

# 粟田遺跡藤平地区 清金アガトウ遺跡

県道額谷三浦線道路工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

石川県野々市町教育委員会

# 粟田遺跡藤平地区 清金アガトウ遺跡

県道額谷三浦線道路工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

石川県野々市町教育委員会



栗田遺跡藤平地区 A区・B区全景（南東から）



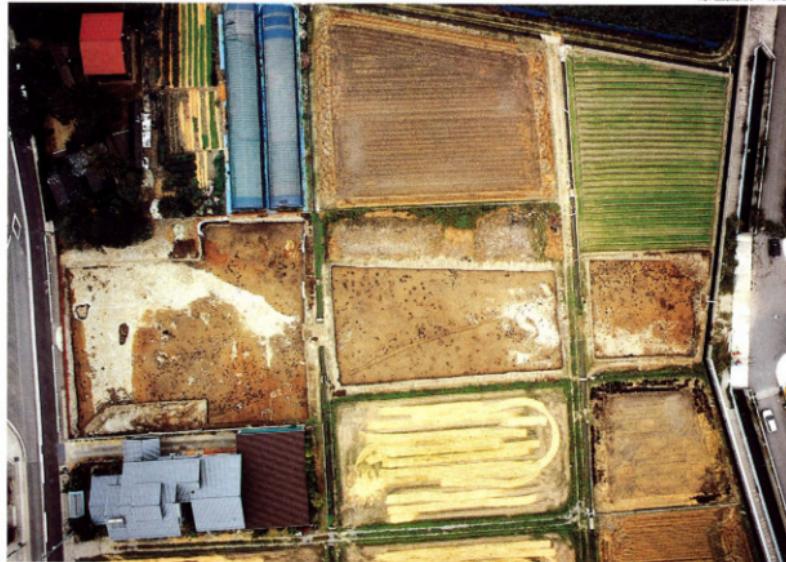
栗田遺跡藤平地区 A区・B区全景



栗田遺跡蘿平地区 B区 SI 2 ~ 6 · SB 2 全景



栗田遺跡蘿平地区 C区 · D区 · E区全景 (南東から)



栗田遺跡藤平地区 C区・D区・E区全量



栗田遺跡藤平地区交番施設調査区全景

白山



清金アガトウ遺跡調査区遠景（北西から）



清金アガトウ遺跡調査区全景（北から）

## 例　　言

- 1 本書『粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡』はそれぞれ以下の地に所在する遺跡の発掘調査である。
    - (1) 粟田遺跡藤平地区：石川県石川郡野々市町藤平地内
    - (2) 清金アガトウ遺跡：石川県石川郡野々市町清金地内
  - 2 本調査は県道額谷三浦線道路工事に伴い、石川県金沢土木事務所の依頼により野々市町教育委員会が実施した。
  - 3 発掘調査に係る費用は石川県金沢土木事務所が負担した。
  - 4 各遺跡の面積、調査年月日は以下のとおりである。
    - (1) 粟田遺跡藤平地区：1,430m<sup>2</sup> 平成5年（1993）11月3日～平成6年2月10日  
2,140m<sup>2</sup> 平成8年（1996）5月20日～平成8年10月16日
    - (2) 清金アガトウ遺跡：2,600m<sup>2</sup> 平成7年（1995）7月7日～平成7年11月7日
  - 5 発掘調査担当者は以下のとおりである。
    - (1) 粟田遺跡藤平地区 平成5年度 田村昌宏（現石川県埋蔵文化財センター出向中）  
平成8年度 德野裕子（野々市町教育委員会文化課主事）
    - (2) 清金アガトウ遺跡 平成7年度 田村昌宏 德野裕子
  - 6 本書執筆は田村昌宏、徳野裕子が担当した。
  - 7 現地調査から出土遺物整理、報告書刊行に至るまでは下記の機関、個人の協力、御教示を得た。記して感謝申し上げたい。

〔機関〕 石川県金沢土木事務所、石川県教育委員会文化財課、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会  
〔個人〕 冈本恭一、垣内光次郎、木田精二、北野博司、庄田知充、滝川重徳、出越茂和、望月精司、安英樹（五十音順敬称略）
  - 8 出土遺物の整理については、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託して行った。
  - 9 本書についての凡例は下記のとおりである。
    - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を指し、水平基準は海拔高（m）で表示する。  
写真図版中の出土遺物に付された番号は押印の出土遺物実測図中の番号に対応する。
    - (2) 遺構名の略号は次のとおりである。竪穴建物（S I）・掘立柱建物（S B）・棚列（S A）  
土坑（S K）・溝（S D）・小穴（P）不明遺構（S X）
    - (3) 土器実測図は断面黒塗りが須恵器、白抜きが繩文土器、土師器、陶磁器、スクリーントーンを貼ったものは赤彩・黒塗を意味する。
  - 10 土器の年代については、田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川県考古学研究会1988による。
  - 11 本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会で保管している。
- 
- 1 本書は石川県石川郡野々市町藤平地内に所在する粟田遺跡藤平地区的発掘調査報告書である。
  - 2 調査原因・面積・調査年月日は以下のとおりである。
    - A 農産加工場兼店舗建設 450m<sup>2</sup> 平成7年（1995）4月20日～5月29日
    - B 野々市南交番建設 150m<sup>2</sup> 平成8年（1996）7月29日～8月6日
  - 3 発掘調査担当者は以下のとおりである。
    - A 田村昌宏 徳野裕子
    - B 徳野裕子
  - 4 本書についての凡例は下記のとおりである。
    - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を指し、水平基準は海拔高（m）で表示する。
    - (2) 遺構名の略号は次のとおりである。土坑（S K）・溝（S D）
  - 5 本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会で保管している。
  - 6 農産加工場兼店舗建設に係る発掘調査では有限会社林農産代表取締役林 浩陽氏には多大な御理解とご協力を頂いた。

# 目 次

## 第1章 位置と環境

第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1

## 第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 .....	4
第2節 調査事業の経過 .....	4

## 第3章 粟田遺跡藤平地区

第1節 遺跡の概要 .....	6
遺構全体図 .....	7
調査区分割図 .....	9
第2節 遺構 .....	50
第1項 壁穴建物 .....	50
第2項 挖立柱建物 .....	57
第3項 上坑 .....	57
第4項 溝 .....	61
第5項 ピット .....	61
第3節 遺物 .....	64
第1項 弥生時代以前の土器 .....	64
第2項 古代以降の土器 .....	64
第3項 近世、近代の遺物 .....	68
第4項 石器・漆器・金属器 .....	69
観察表 .....	85
第4節 まとめ .....	95
写真図版 .....	97

## 第4章 粟田遺跡藤平地区（農産加工場兼店舗・野々市南交番）

第1節 調査の経緯と経過 .....	121
第2節 遺構と遺物（農産加工場兼店舗） .....	121
遺構全体図 .....	125
第3節 遺構と遺物（野々市南交番） .....	127
観察表 .....	130
写真図版 .....	131

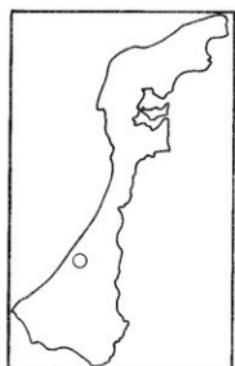
## 第5章 清金アガトウ遺跡

第1節 遺跡の概要	135
第1項 遺跡の立地	135
第2項 基本土層	135
第3項 調査の概要	136
遺構全体図	137
第2節 遺構	139
第1項 挖立柱建物	139
第2項 櫛列	141
第3項 道路状遺構	141
第4項 土坑	145
第5項 溝	146
第6項 その他	147
第3節 遺物	150
第1項 弥生時代以前の土器	150
第2項 古代以降の土器・陶器	151
観察表	155
第3項 石器・鉄器	156
観察表	156
第4節 まとめ	159
調査区分割図	161
写真図版	185

# 粟田遺跡藤平地区

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境



第1図 野々市町位置図

粟田遺跡藤平地区、清金アガトウ遺跡は石川県のほぼ中央に位置する野々市町の北東部に所在する。野々市町は、北と東は金沢市、西は松任市、南は鶴来町に接する東西4.5km、南北6.7km、面積13.56km<sup>2</sup>の小さな町であるが、金沢市の近郊都市として市街地が膨らみ、現在は4万3千人を有する日本海沿岸の雄町となった。これは土地区画整理事業等による都市開発が急速に発展したためである。一方では一昔前までよく目にした田園が一円に統く中集落が点在する、といった日本の原風景が失われ、石川県有数の穀倉地帯と謳われた景観は今では見る影もない。

野々市町は靈峰白山を源とする石川県最長の河川手取川によって形成された扇状地の扇央東部に位置する。手取川は古くから暴れ川として知られ、現在の流路は鶴来町で北から西へ向きを変えて日本海にそいでいるが、氾濫のたびに流れが南に移っていたことが分かっている。手取川からはいくつも支流が派生して流れ、開発前は河川や小支流が複雑に入り込み、島状微高地がいくつも形成されていたことが判明している。現在の水田用水に重要な役割を果たしている七ヶ用水も当時蛇行しながら流れる手取川支流の名残とされている。扇状地上に展開する遺跡は島状微高地の上に立地することが多い。粟田遺跡藤平地区の所在する藤平地内は富権用水の分流木呂川と同分流十人川の間にあり、清金アガトウ遺跡の所在する清金地内は郷用水の分流大塚川の流域に位置する。両遺跡は直線距離にして約750m程離れており、その間旧河道や低湿地が存在しているのを試掘調査で確認している。

## 第2節 歴史的環境

粟田遺跡藤平地区、清金アガトウ遺跡をはじめとしてこの地域周辺は奈良・平安時代の集落跡が非常に多く確認されており、古代における扇状地の開発が窺える。また、両遺跡からは少量ながら縄文時代、弥生時代の遺構、遺物が発見されており、古代以前の人々の営みをかいだり見る事ができる。統いて、両遺跡周辺の主要遺跡について縄文時代から近世にかけて順に紹介していく。

### 縄文時代

この時代で最も注目すべき遺跡は、手取川扇状地扇端部にあたる金沢市と野々市町の境界に位置する御経塚遺跡、新保チカモリ遺跡、米泉遺跡である。これらの遺跡は縄文後期～晩期にかけての大集落遺跡で、御経塚遺跡、新保チカモリ遺跡の両遺跡は国史跡に指定され、史跡公園として整備、公開されている。これだけの大集落が形成されたのは多くの要因があったであろうが、自噴水の噴出という地下水利用に恵まれたこ

とが大きく関係すると思われる。また扇央部では末松遺跡などで縄文土器の小片、打製石斧が散発的に出土している。

### 弥生時代

各地に集落遺跡が散在する。前期では柴山出村式土器がまとめて出土している上林遺跡と乾遺跡があげられる。中期は、上荒屋遺跡で確認されるが、当該時期の遺跡は散発的で多くはない。しかし、後期以降になるとこの地の集落の展開が活発になり、各地で遺跡が急激に増加する。御経塚遺跡デト地区では平成元年度に直径約15mを測る大型の八角形竪穴建物跡が確認された。押野タチナカ遺跡は後期を中心とした大集落跡で、竪穴建物跡が17棟、掘立柱建物跡7棟が確認されている。この御経塚や押野地区付近からは押野大塚遺跡、押野ウマワタリ遺跡など比較的小規模な集落遺跡も点在する。また、これら平野部だけでなく富樫丘陵裾部に位置する額谷ドウシング遺跡など山裾にも集落遺跡が見られる。

### 古墳時代

この時代の遺跡は、縄文時代、弥生時代に比べて確認されている数は少ない。御経塚シンデン遺跡では金沢南部地域では初の方墳12基及び前方後方墳2基が見つかっている。ほかに富樫丘陵縁辺部では全長50mの前方後円墳である長坂二子塚古墳を代表とする長坂古墳群や高尾イシナ塚古墳などが存在する。この他にも町内には存在は確認されているが、所在不明な古墳が伝えられており、古代以降の扇状地開発の過程で削平され消滅したものと思われる。

### 奈良～平安時代

この時代の遺跡の密度は高い。野々市町の西南端には古代寺院として有名な末松庵寺跡がある。建立は7世紀末で法起寺式伽藍配置をとっており、発掘調査では塔跡、金堂跡等の遺構が確認されている。現在、岡史跡に指定され史跡公園として人々の憩いの場となっている。この古代寺院の建立によって扇状地一帯の開発が進み、周辺では集落遺跡が展開していく。野々市町南部に位置する上新庄ニシウラ遺跡、上林新庄遺跡、下新庄アラチ遺跡は8～9世紀の集落遺跡で、特に上林新庄遺跡・下新庄アラチ遺跡は役所的機能と考えられる遺構、遺物を検出している。また、本報告の栗田遺跡から北方約5kmには全国有数の古代莊園跡である横江庄遺跡や上荒屋遺跡が存在する。

### 中世

加賀国守護である富樫氏の館が本遺跡から北東約2kmに位置する。館跡周辺では10箇所ほど発掘調査を実施しており堀跡の一部が確認されている。この館から東へ約2kmの富樫丘陵上には富樫氏の居城となる高尾城跡が認められる。富樫館跡と高尾城跡の間には15世紀の集落遺跡である扇が丘ゴショ遺跡が確認されており、立地条件から館や城跡との関連が取り沙汰される。また、野々市町北西部にも14～15世紀の集落遺跡である長池キタバシ遺跡、御経塚遺跡デト地区が存在する。掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡がセットで検出され、集落の形態を知るうえで良好な資料となる。

### 近世

近世遺跡の調査は御経塚遺跡デト地区から18世紀を主体とした集落跡、乾遺跡から17世紀の墓地が確認されている。また、文書等から現在の集落は江戸時代には成立しており、農業経営を中心とした村落が各地に点在していたようである。



- |              |               |                |               |
|--------------|---------------|----------------|---------------|
| 1. 栗田遺跡藤平地区  | 8. 長池キタバシ遺跡   | 15. 富櫻館跡       | 22. 下新庄アラチ遺跡  |
| 2. 清金アガトウ遺跡  | 9. 米泉遺跡       | 16. 扇が丘ハイゴク遺跡  | 23. 上林新庄遺跡    |
| 3. 新保チカモリ遺跡  | 10. 押野大塚遺跡    | 17. 高尾イシナ塚古墳   | 24. 上林遺跡      |
| 4. 上荒屋遺跡     | 11. 押野タチナカ遺跡  | 18. 乾遺跡        | 25. 上新庄ニシウラ遺跡 |
| 5. 横江庄遺跡     | 12. 押野ウマワタリ遺跡 | 19. 高尾城跡       | 26. 末松庵寺跡     |
| 6. 御経塚シンデン遺跡 | 13. 長坂二子塚古墳   | 20. 栗田遺跡       | 27. 末松遺跡      |
| 7. 御経塚遺跡     | 14. 扇が丘ゴショ遺跡  | 21. 額谷ドウシンドア遺跡 |               |

第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

栗田遺跡藤平地区及び清金アガトウ遺跡発掘調査は一般県道額谷三浦線道路工事事業が原因で実施された。この工事に先立ち、石川県立埋蔵文化財センター(以下 県埋文センター)企画調整課が平成3年11月14日に野々市町藤平～清金地内、平成4年12月10日に藤平～栗田地内において試掘調査を実施した。その結果、一部に遺跡が存在する事が確認され、工事前に発掘調査を実施することとした。近年の諸開発の増加に伴い埋蔵文化財の発掘件数も増え、県埋文センターでは早急な対応は困難であったため、野々市町教育委員会(以下 町教委)で調査を実施してほしいと依頼を受けた。町教委は埋蔵文化財の保護と道路工事の調整を円滑に図るために発掘調査を引き受けた。そこで県埋文センター、石川県金沢土木事務所、町教委の3者で協議を重ね、正式な依頼を受けて平成5年度に栗田遺跡藤平地区(1,430m<sup>2</sup>)、平成7年度に清金アガトウ遺跡(2,600m<sup>2</sup>)、平成8年度には再び栗田遺跡藤平地区(2,140m<sup>2</sup>)の発掘調査を実施した。

### 第2節 調査事業の経過

#### 平成5年度(現地調査)

平成5年7月27日付けで金沢土木事務所長から依頼を受けて、栗田遺跡藤平地区的現地調査を実施した。調査は田村昌宏が担当し、調査期間平成5年11月3日～平成6年2月10日、面積1,430m<sup>2</sup>を調査した。

[作業員]相木秀雄、天川千代、井手和郎、木津美和子、田中よね子、谷口初代、田部良行、紺美保子、徳田外喜栄、中川美幸、中川吉三、中黒正雄、中田ツヤ子、永田芳子、西川千明、橋本美智子、羽土啓子、早崎長三、東 猛、前田弘、前田るり子、樹野敏子、南外志雄、山本美保子、横山日出子、吉田久平

#### 平成7年度(現地調査)

平成7年6月12日付けで金沢土木事務所長から依頼を受けて、清金アガトウ遺跡の現地調査を実施した。調査は田村昌宏が担当、徳野裕子が補佐し、調査期間平成7年7月7日～11月7日、面積2,600m<sup>2</sup>を調査した。

[作業員]天川千代、井手和郎、小野幸子、木津美和子、木下光、田中よね子、谷口初代、紺美保子、徳田外喜栄、中川美幸、中川吉三、中黒正雄、永田芳子、西川千明、橋本美智子、羽土啓子、早崎長三、東 猛、前田るり子、松井正利、南外志雄、山本美保子、横山日出子

#### 平成8年度(現地調査)

平成8年5月9日付けで金沢土木事務所長からの依頼を受けて栗田遺跡藤平地区的現地調査を実施した。徳野裕子が担当し、調査期間平成8年5月20日～10月16日、面積2,140m<sup>2</sup>を調査した。

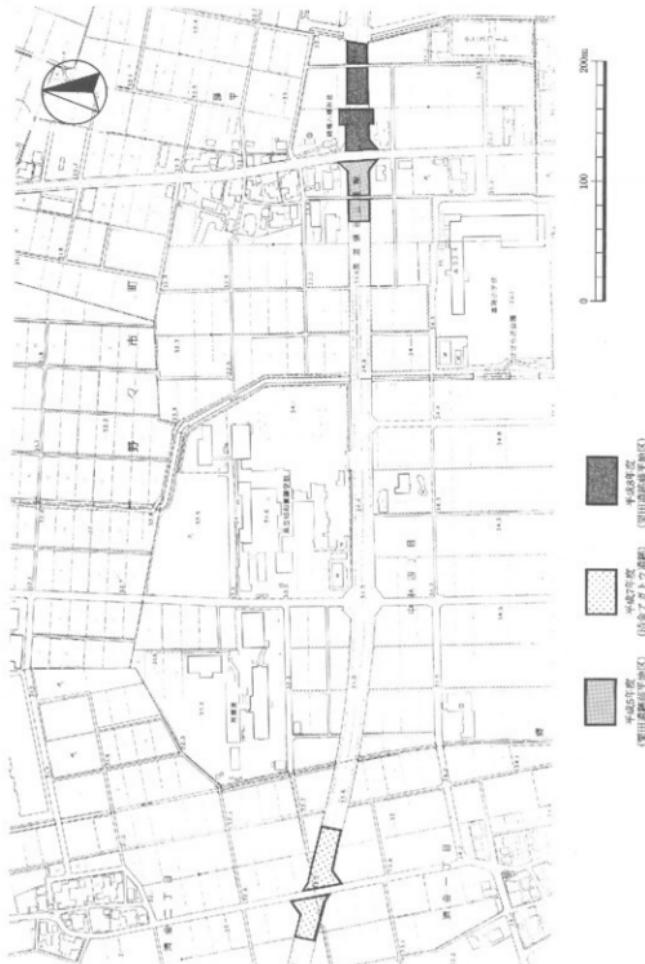
[作業員]伊藤忠行、猪又邦子、岩田孝七、遠藤外茂義、大知時子、小幡頼三、川村和夫、北出貞子、北村三千子、木下光、栗山久、古源きよ、小林幸子、小柳幹男、瀬川朝子、田端実、田村謙、寺本昭夫、藤部純子、遠塚一農、中川紀子、中川美幸、中川吉三、長田外美子、永田芳子、西川妙子、西川千明、西本光江、彦田洋子、藤井梢、佛田静枝、佛田正子、松井正利、宮川英子、宮川美津子、谷内茂代、吉本智子、山岸古男

### 平成10年度(遺物整理)

遺物の洗浄、整理は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行い、平成10年1月16日～3月20日まで行った。委託作業の内容は、洗浄、記名、接合、復元、実測、遺物実測図トレイスであった。

### 平成11年度(報告書刊行)

平成11年4月1日付けで金沢土木事務所からの依頼を受けて田村昌宏と徳野裕子が原稿執筆、図版作成、編集を行い、徳野裕子が遺物の写真撮影を行い、報告書を刊行させた。



第3図 年次別測査区図

## 第3章 粟田遺跡藤平地区

### 第1節 遺跡の概要

粟田遺跡は全長400m四方に及び、粟田、中林、藤平の3カ所の行政区域にまたがる。本遺跡はこれまで石川県埋蔵文化財保存協会（以下「県埋文協」）と町教委が粟田地区で、町教委が中林地区でそれぞれ発掘調査を行い成果をあげている。

県埋文協の調査は民間工場用地造成事業に伴うもので、約13,500m<sup>2</sup>の面積が範囲となった。調査区の4分の1は砾原で、繩文時代晚期の打製石器製作場が発見された。古代においては8世紀半ば～9世紀前半の竪穴建物14棟、掘立柱建物8棟を検出した。建物は3棟前後で群をなし、約50m間隔で分布する散居村の形態をもつ。住居群の間に側溝をもった道路跡が横断する。

中林地区では町教委がスポーツ施設や農協建設に伴う発掘調査を実施した。竪穴建物16棟、掘立柱建物16棟を検出し、8世紀前半～9世紀半ばの集落跡であることがわかった。

今回調査の藤平地区は粟田遺跡の北西部に位置する。遺跡確認による試掘調査の結果から、調査区西端は地山が急激に下がり、鞍部となって落ち込んでいくことが分かった。周辺の発掘調査成果を考慮すると本調査区が粟田遺跡の北西端にあたると考えられる。

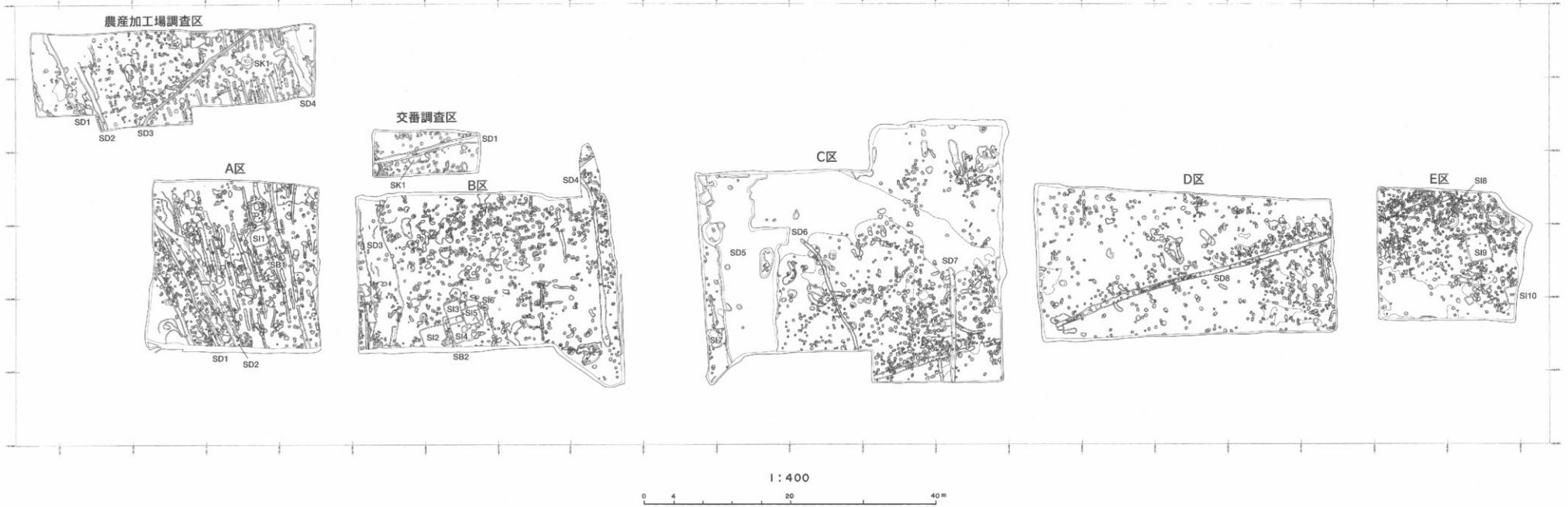
調査区は東西に長く、約3,570m<sup>2</sup>が対象で、その真ん中を町道太平寺上林線が横断する。調査はこの町道を境に西側を平成5年度に、東側を平成8年度にそれぞれ実施した。平成5年度調査は約1,430m<sup>2</sup>でカマドを有した竪穴建物6棟、掘立柱建物2棟を確認した。うち竪穴建物は4回の立て替えが行われていたことが分かった。平成8年度調査は約2,140m<sup>2</sup>が対象となり竪穴建物4棟、北東一南北間を走る溝などが発見された。時期はいずれも8世紀後半～9世紀前半に位置付けられる。また、調査区から近世に機能した溝跡が2条確認された。2条共南北に走り、1条は幅約4m、もう1条は幅約7mで田畠用水に伴うと推定される。近世陶磁器が多く出土しており、周間に集落が存在していたことが想定される。

#### 調査区の設定（第45図）

発掘調査区は道路と用水でいくつかのブロックに区切られ、平成5年度調査の西側からA区、B区と分け、平成8年度調査の西側からC区、D区、E区とした。

#### 基本土層（第46図）

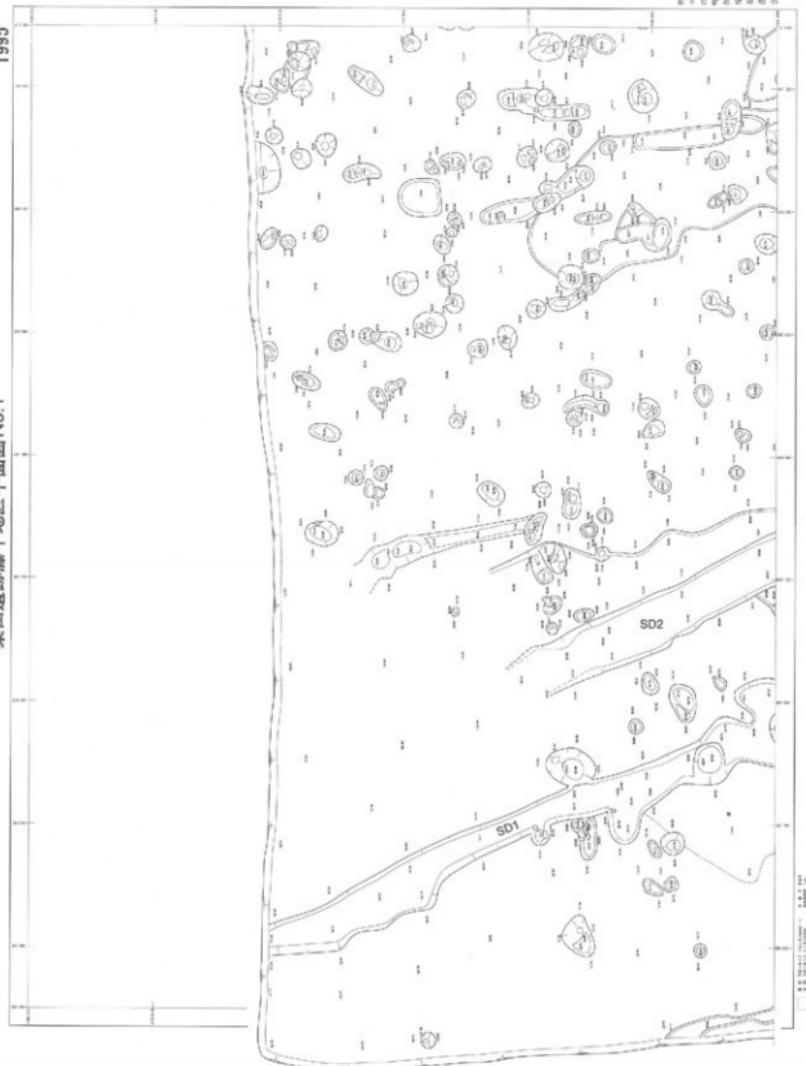
粟田遺跡の土層は基本的に単純である。表土は現耕土上で、10～15cmを測る。その下は橙色をした鉄分混じりの床土が約5cmの深さで広がる。次は20～30cmの淡灰色粘質土が堆積する。この層は中世から昭和初期の耕地整理前の耕作土にあたると思われる。その下には20～70cmの遺物包含層にあたる褐色粘質土がある。今回の調査では顕著な遺物の堆積は見られなかった。その下の地山は黄褐色粘質土で一部石礫層が顔を出す。ただし、県埋文協が調査した石器製作場のような大型の石が見れるようなものではなく、小型の石が散在する程度のもので、手取川から流出する土砂にあたる。鞍部に近い部分では遺物包含層は2層に分かれ、地山土はシルト質になる。



第4図 造機全体図

1995

第5回調査区平面図  
農田灌漑統計 No.1



第5回 調査区分割 (1/80)  
(農産加工場兼店舗)

1995

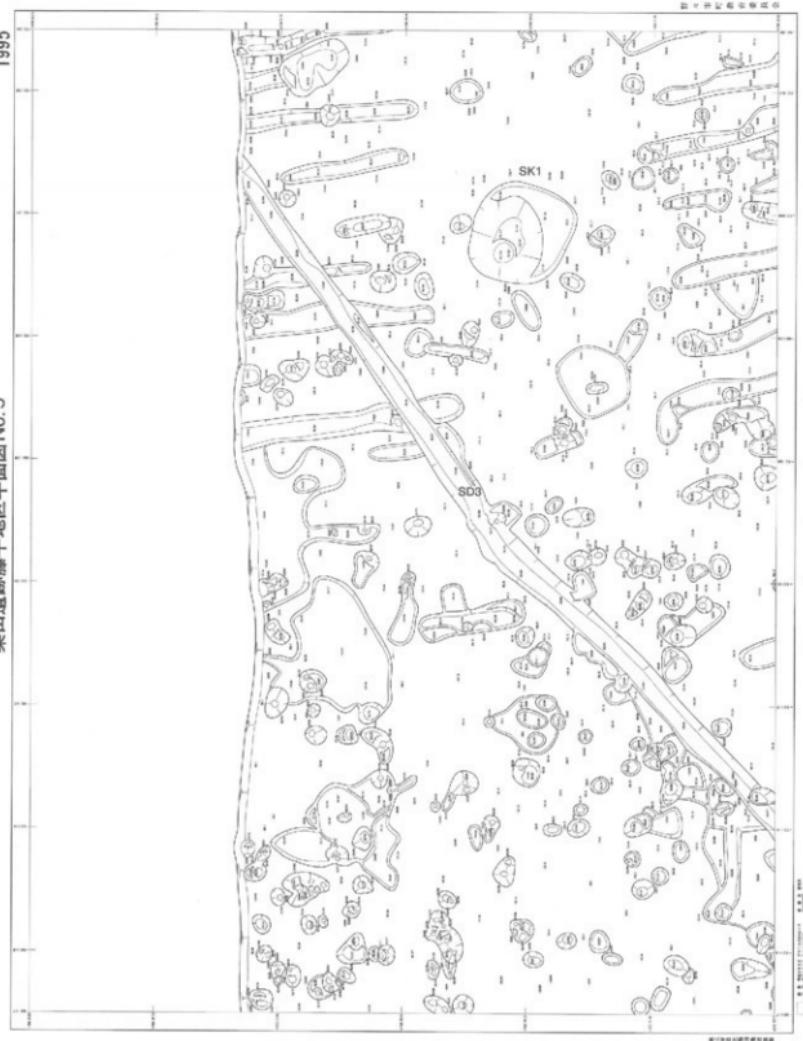
栗田遺跡耕地区平面図 No.2



第6図 調査区分割 (1/80)  
(農産加工場兼店舗)

1995

菜田連續耕平地区平面図 No. 3



第7図 検査区分割 (1/80)  
(農産加工場兼店舗)

1995

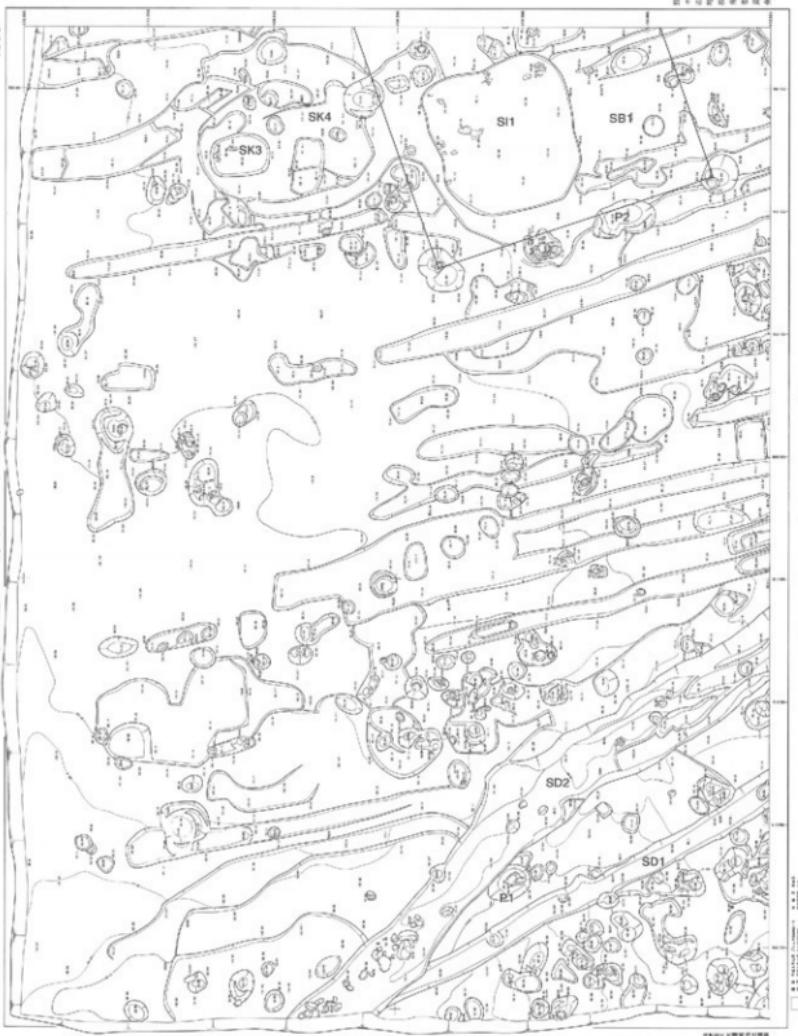
栗田遺跡標準平地区平面図 No.4



第8図 調査区分割 (1/80)  
(農産加工場兼店舗)

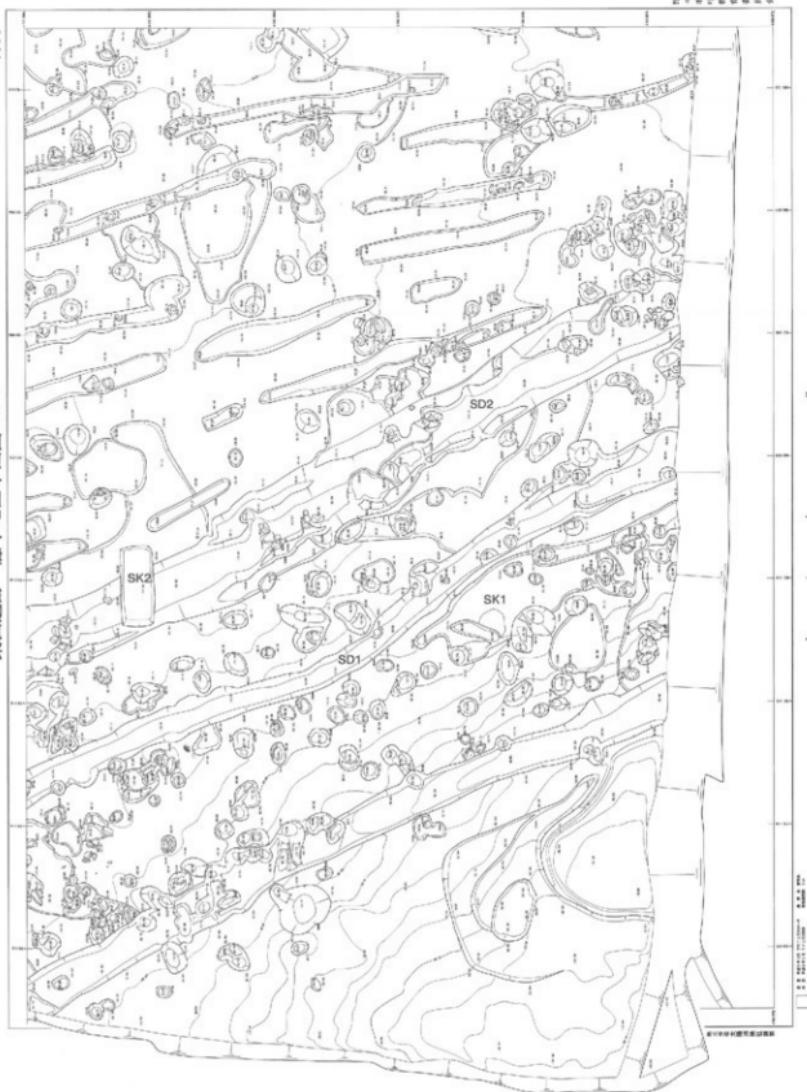
栗田地区 藤平地区平面図No.5

1993



第9図 調査区分割 (1/80)

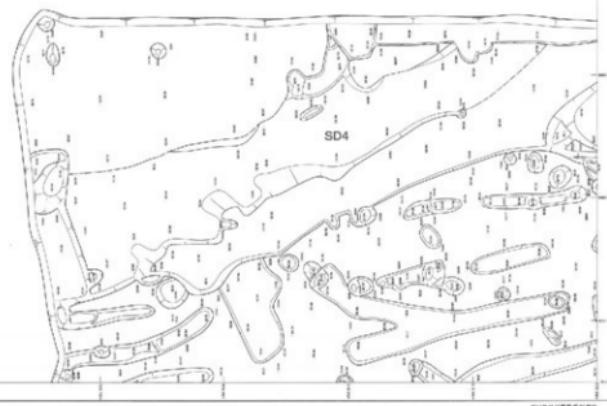
1993  
栗田遺跡 藤平地区平面図No.6



第10図 椰査区分割 (1/80)

栗田遺跡藤平地区平面図 No.7

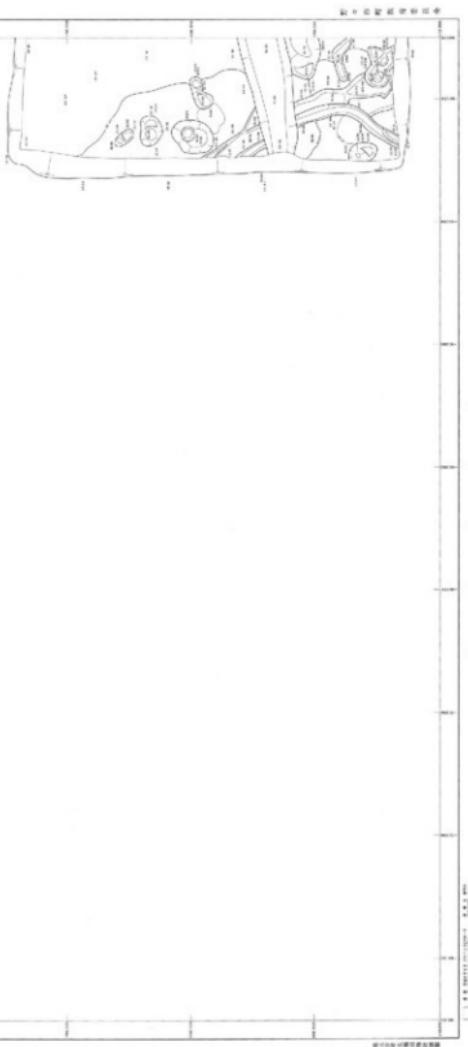
1995



第11図 調査区分割 (1/80)  
(農産加工場兼店舗)

栗田遺跡廣平地區平面圖 No. 8

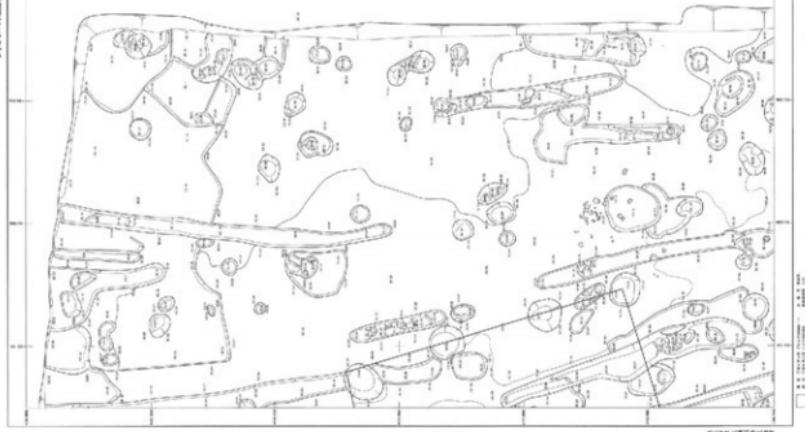
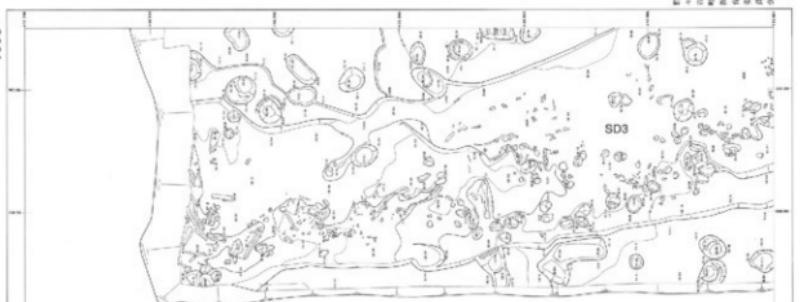
1995



第12圖 檢查區分割 (1/80)  
(貿易加工場兼店舗・交番)

栗田遺跡 藤平地区平面図No.9

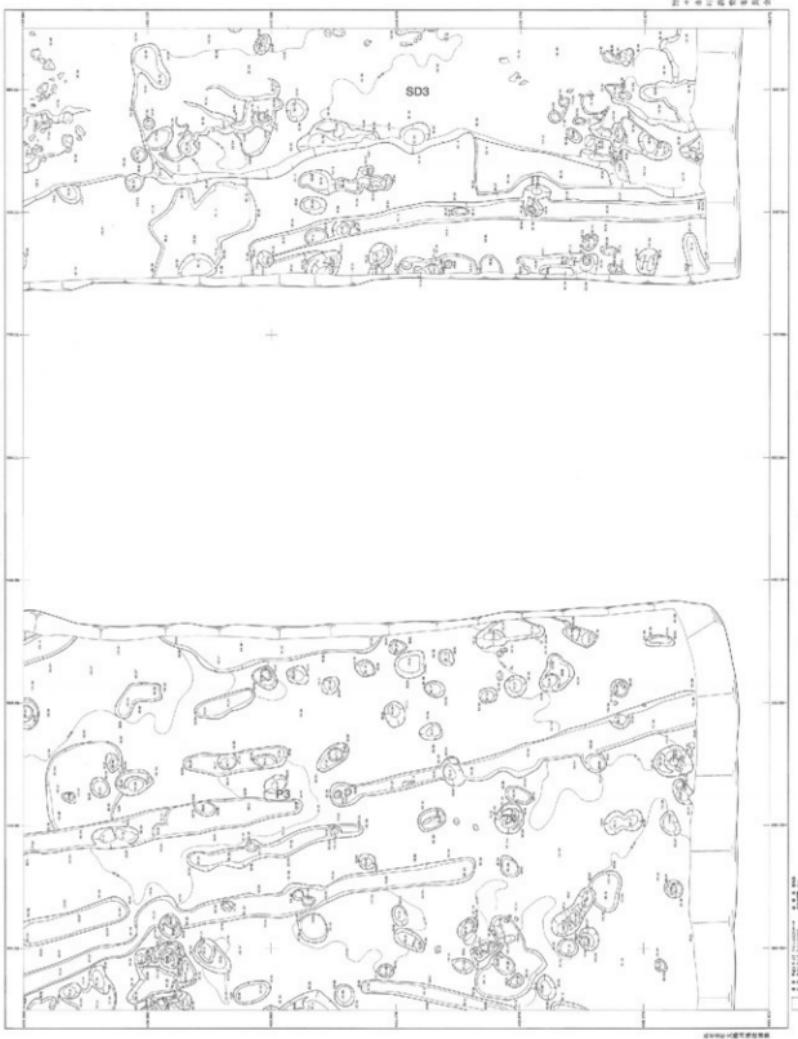
1993



第13図 椰査区分割 (1/80)

1993

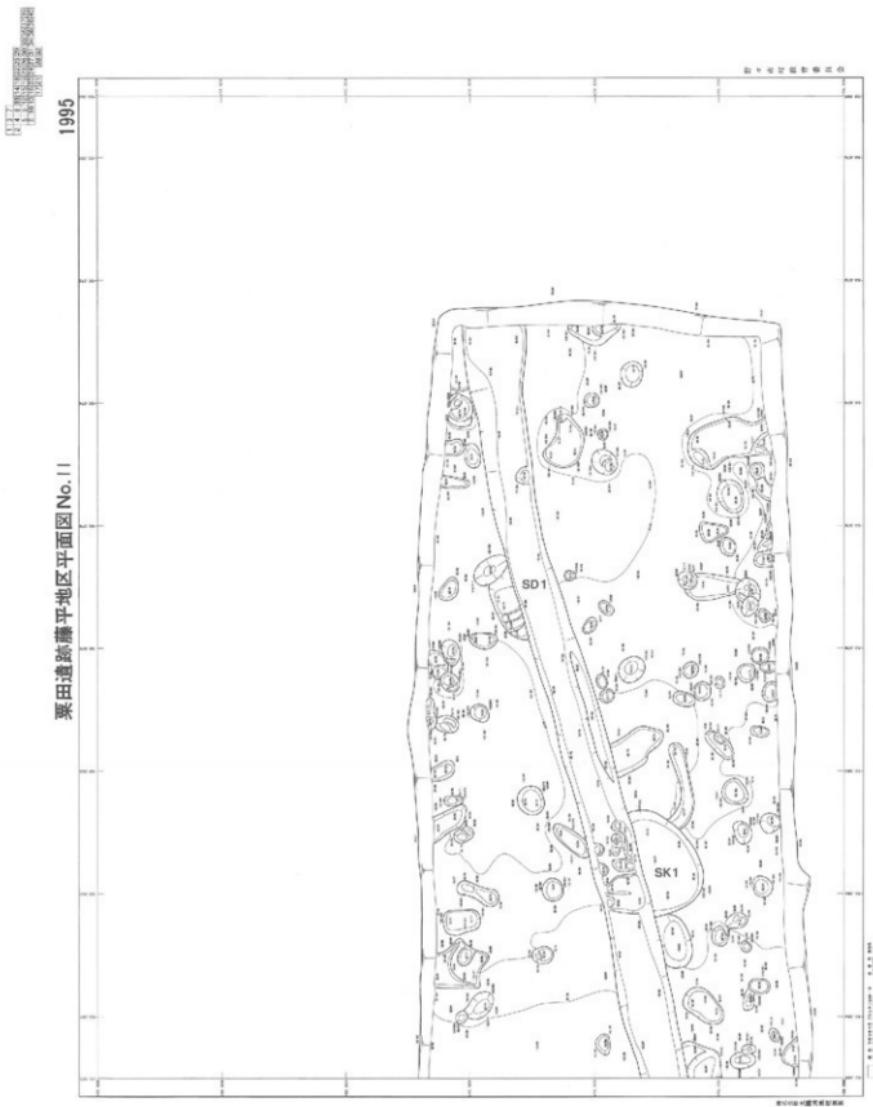
栗田遺跡 平面図No.10



第14図 調査区分割 (1/80)

1995

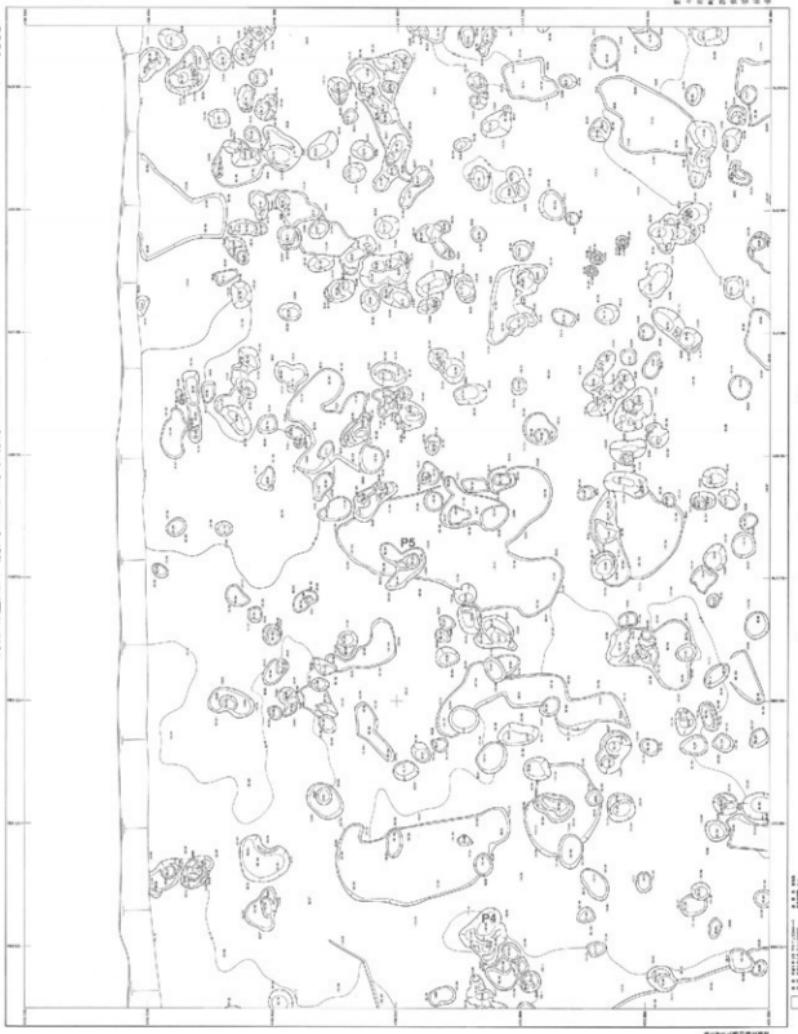
栗田遺跡標平地區平面圖 No. 11



第15圖 調查區分割 (1/80)  
(交番)

粟田遺跡 藤平地区平面図No.12

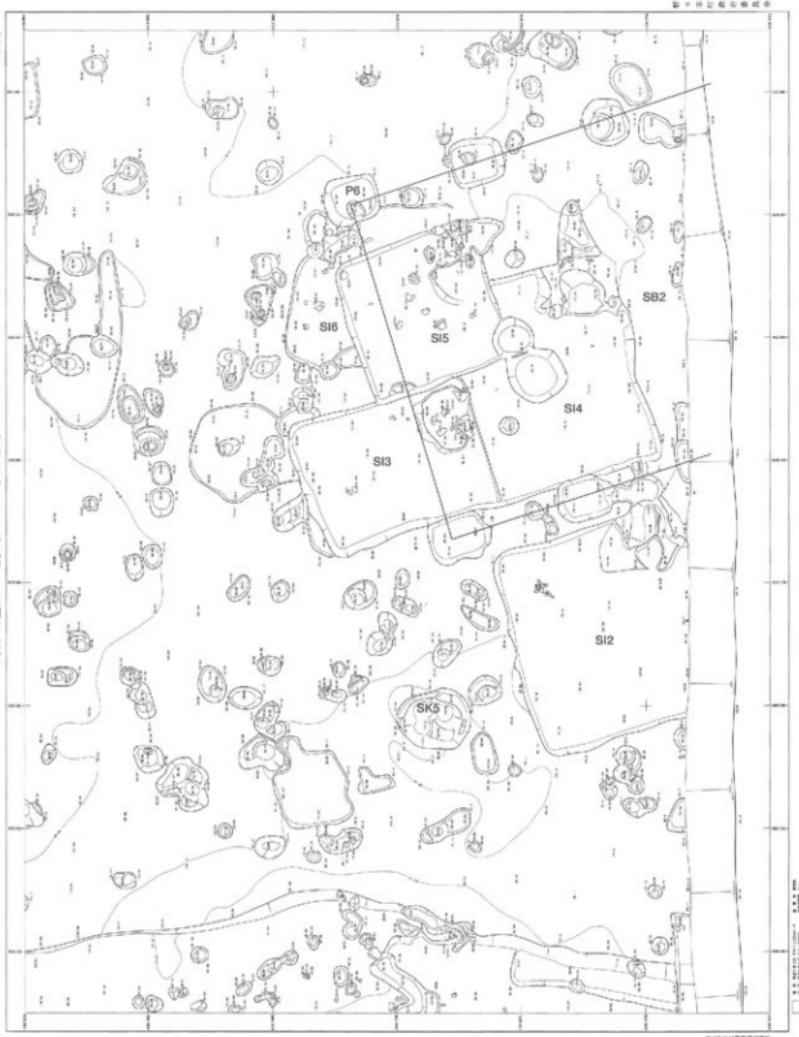
1993



第16図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡 薩摩地区平面図No.13

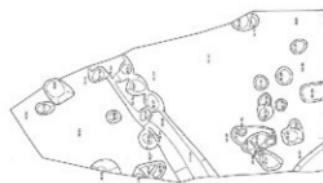
1993



第17図 調査区分割 (1/80)

1993

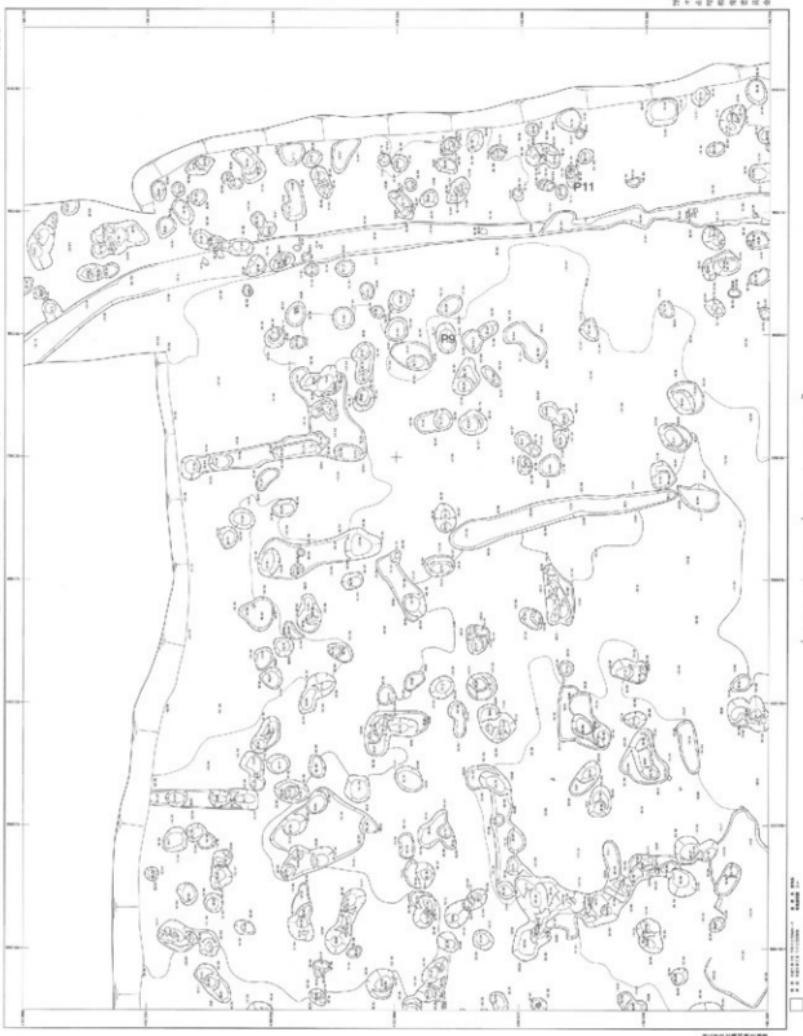
栗田遺跡 藤平地区平面図No.14



第18図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡 藤平地区平面図No.15

1993



第19図 調査区分割 (1/80)

粟田遺跡 藤平地区平面図No.16

1993

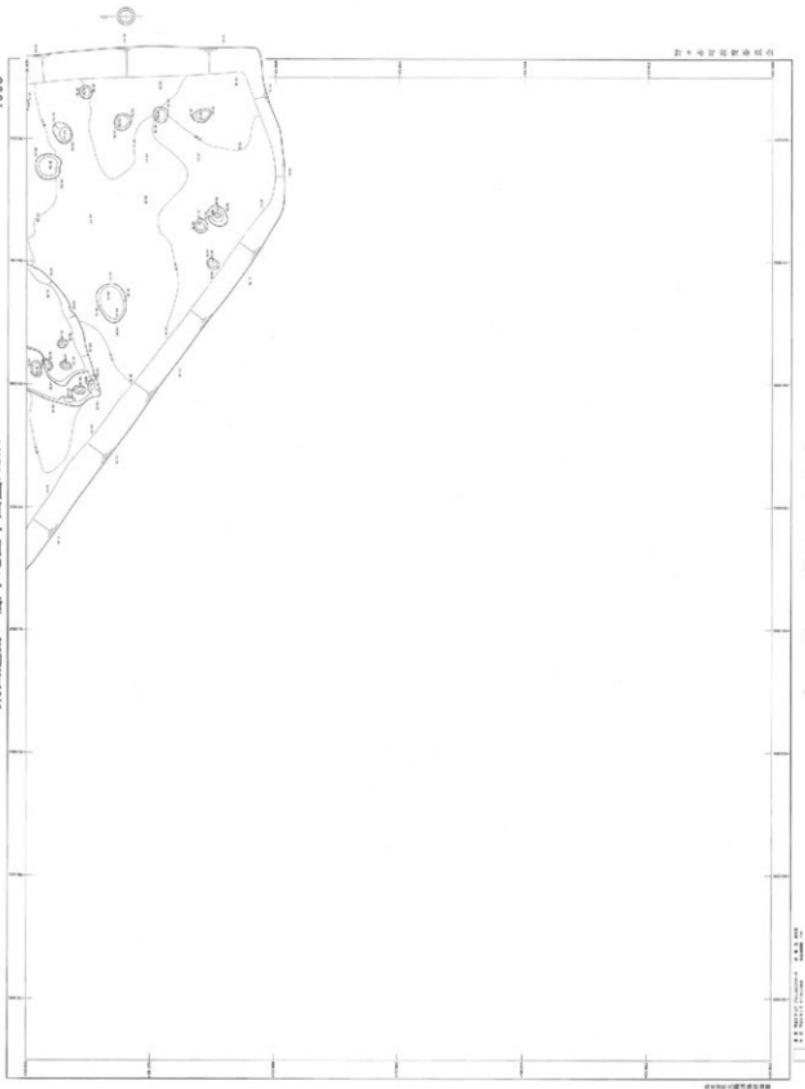


第20図 調査区分割 (1/80)



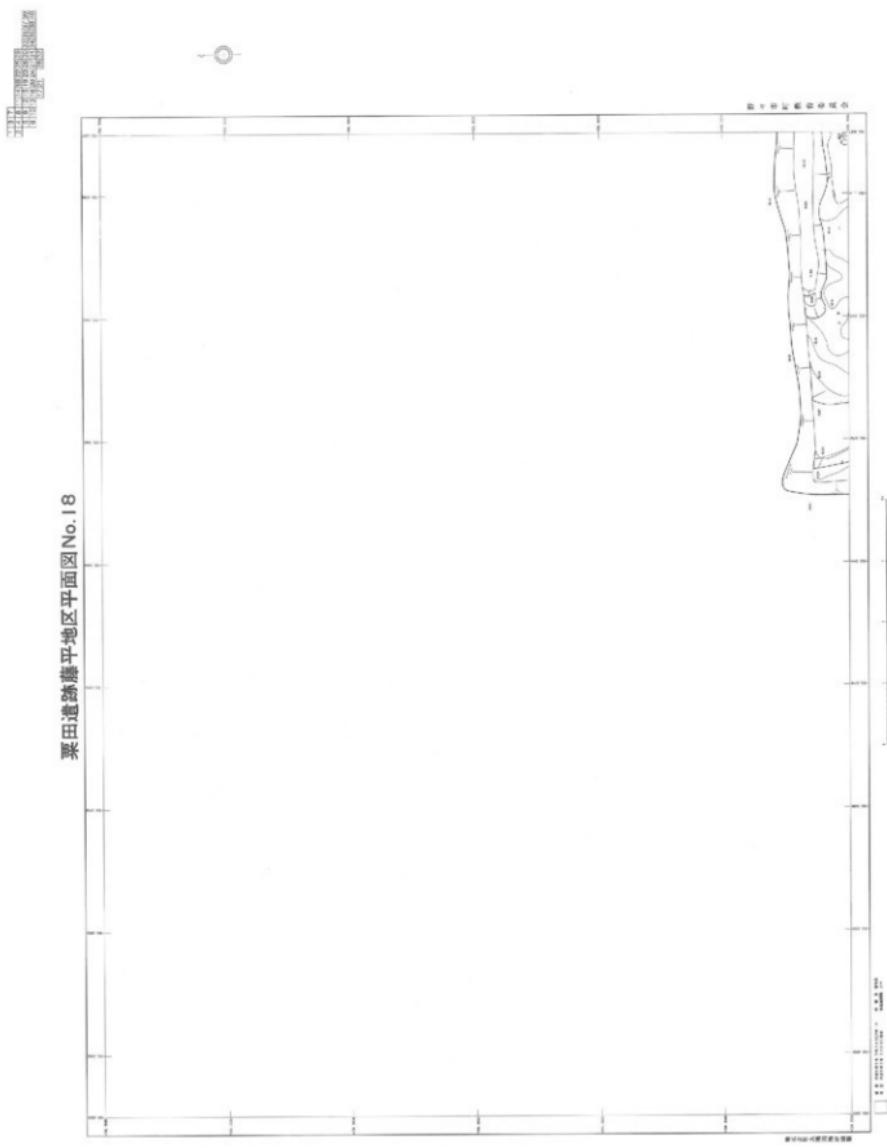
藤平地区平面图No.17  
粟田遺跡

1993



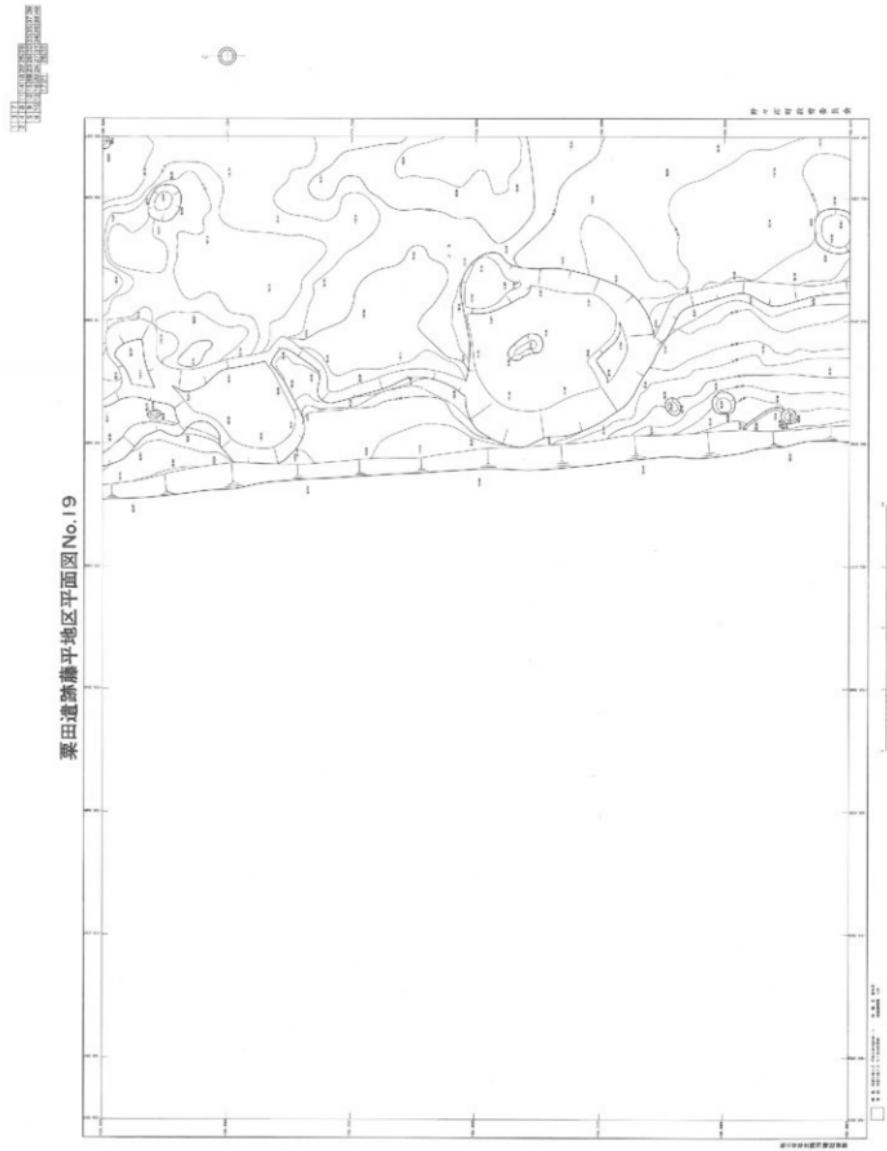
第21図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No. 18



第22図 調査区分割 (1/80)

稻田灌溉排水地区平面图 No. 19



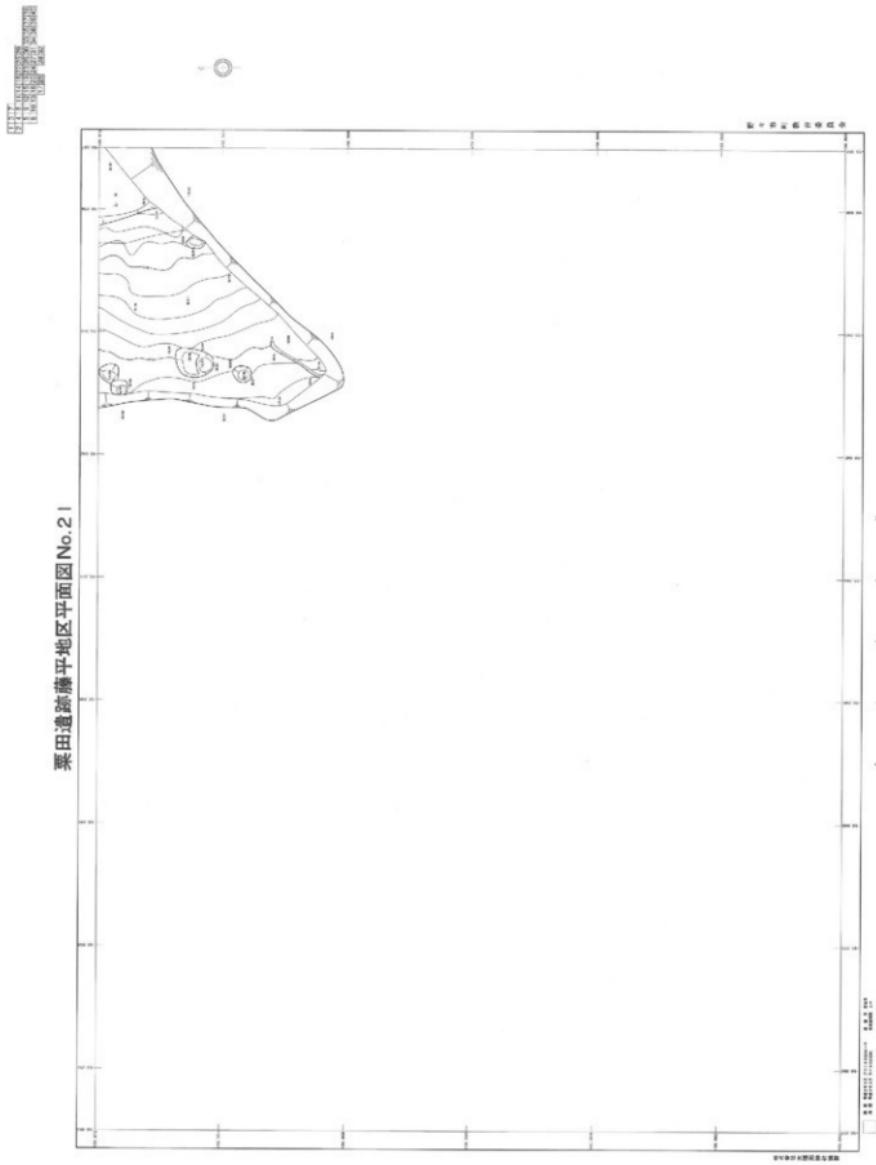
第23図 調査区分割 (1/80)

栗田道添耕地区平面図 No. 20



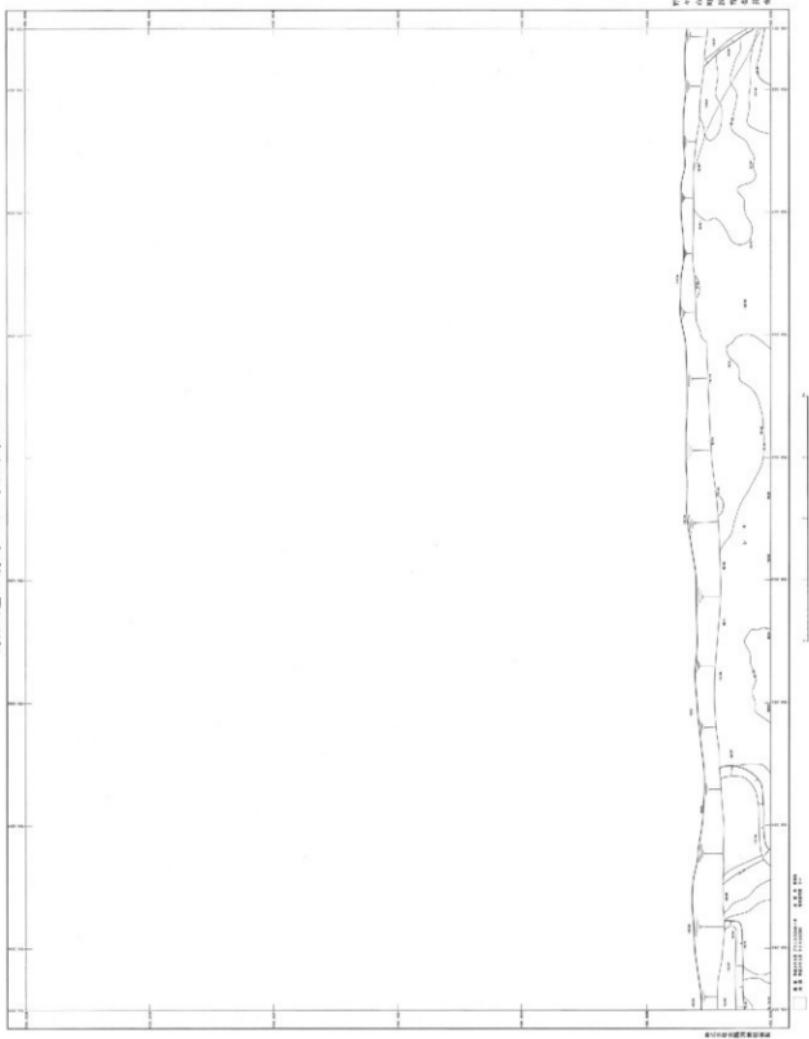
第24図 調査区割別 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No. 21



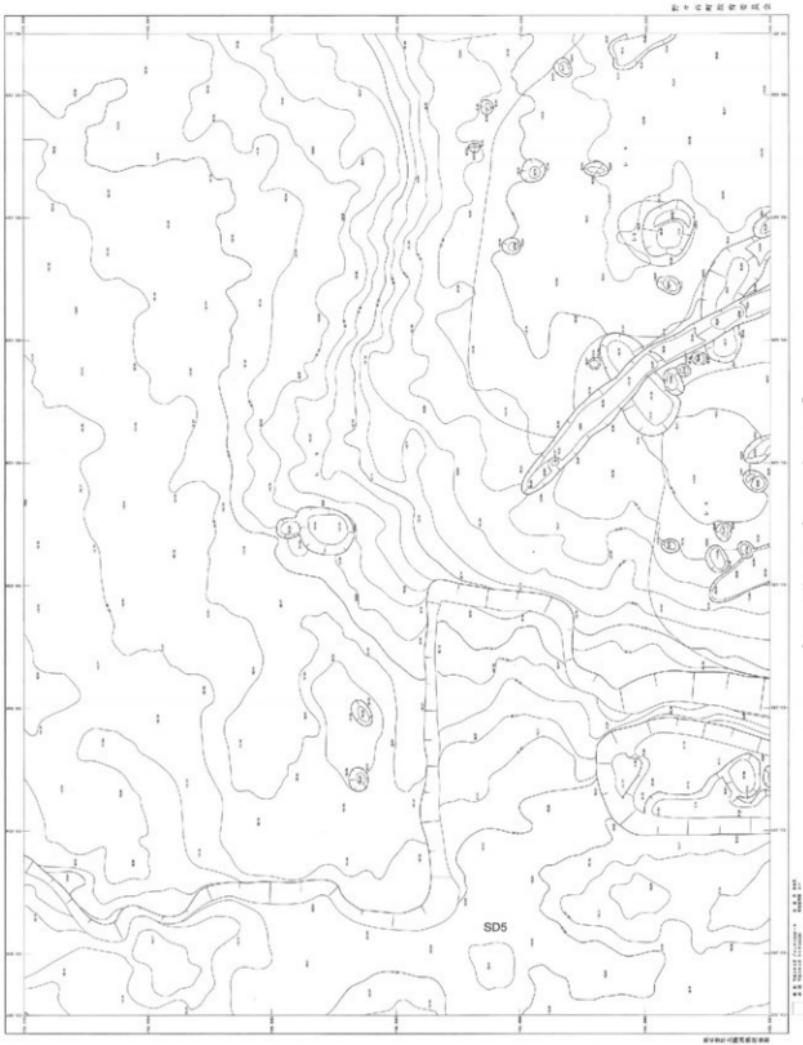
第25図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡耕作地地区平面図 No.22



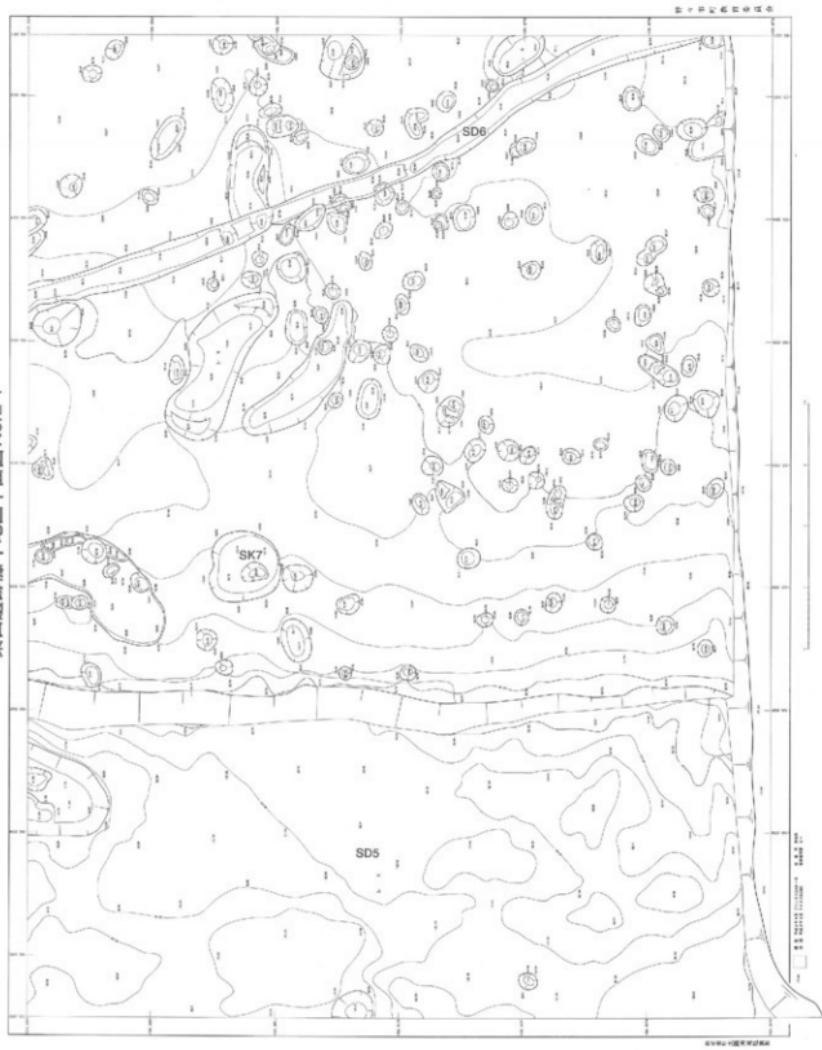
第26図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No.23



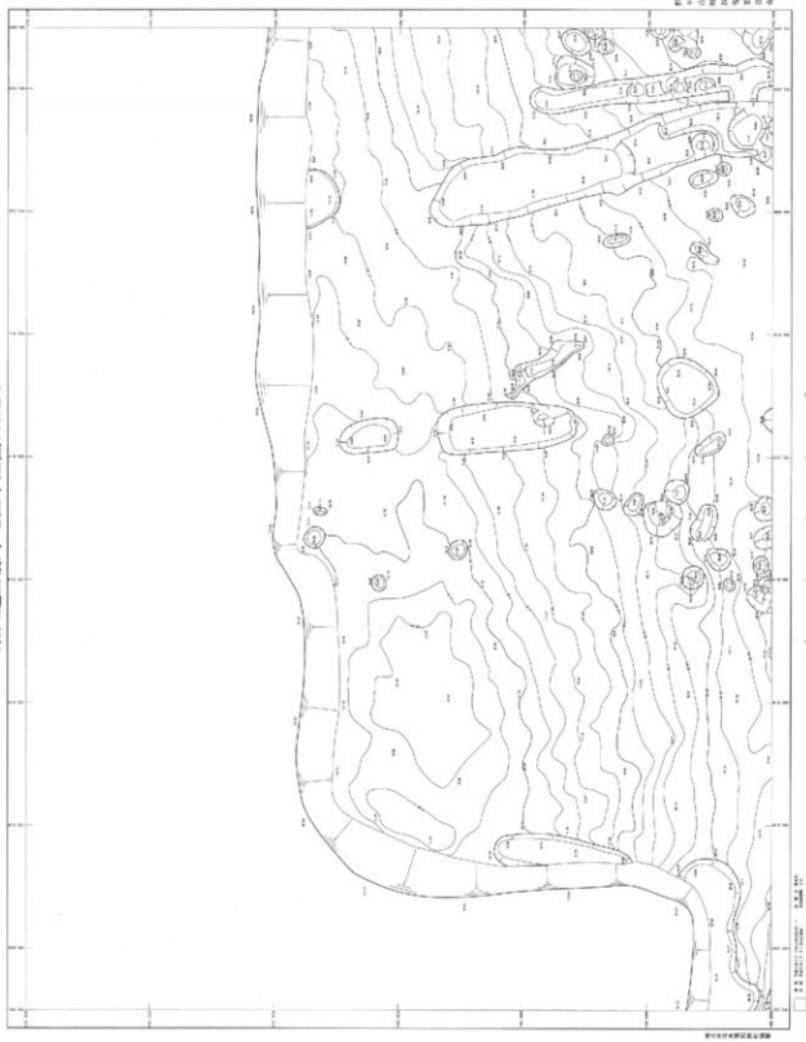
第27図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡扇平地区平面図 No.24



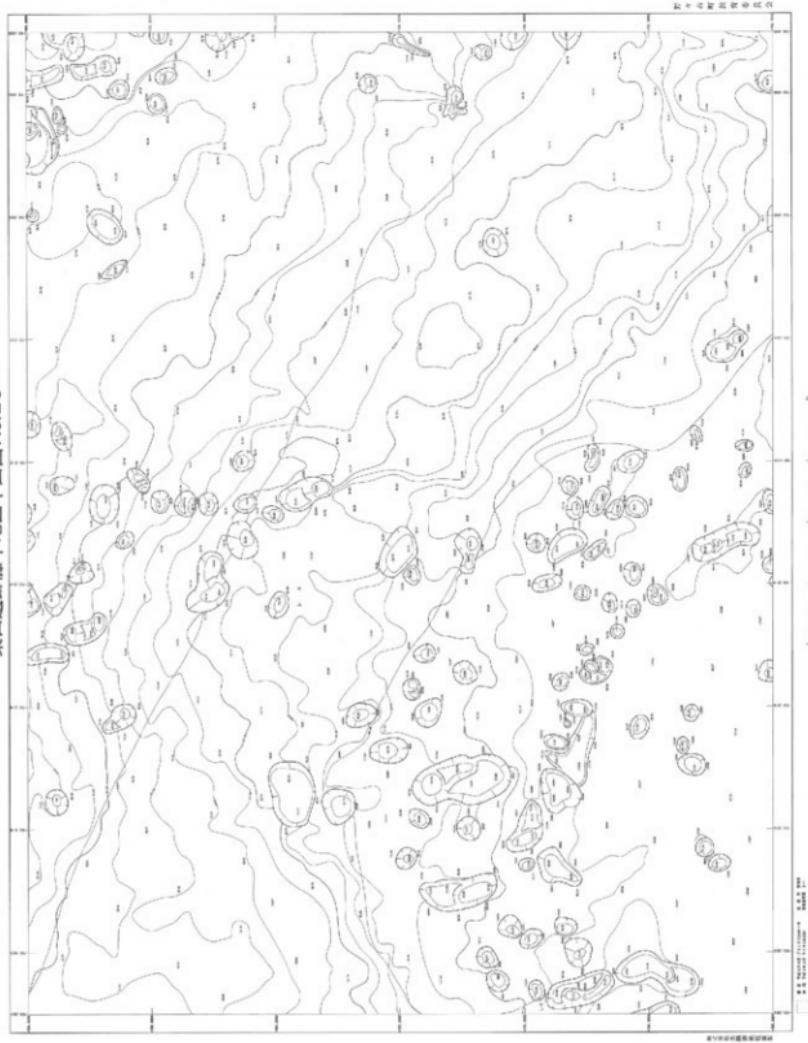
第28図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No.25



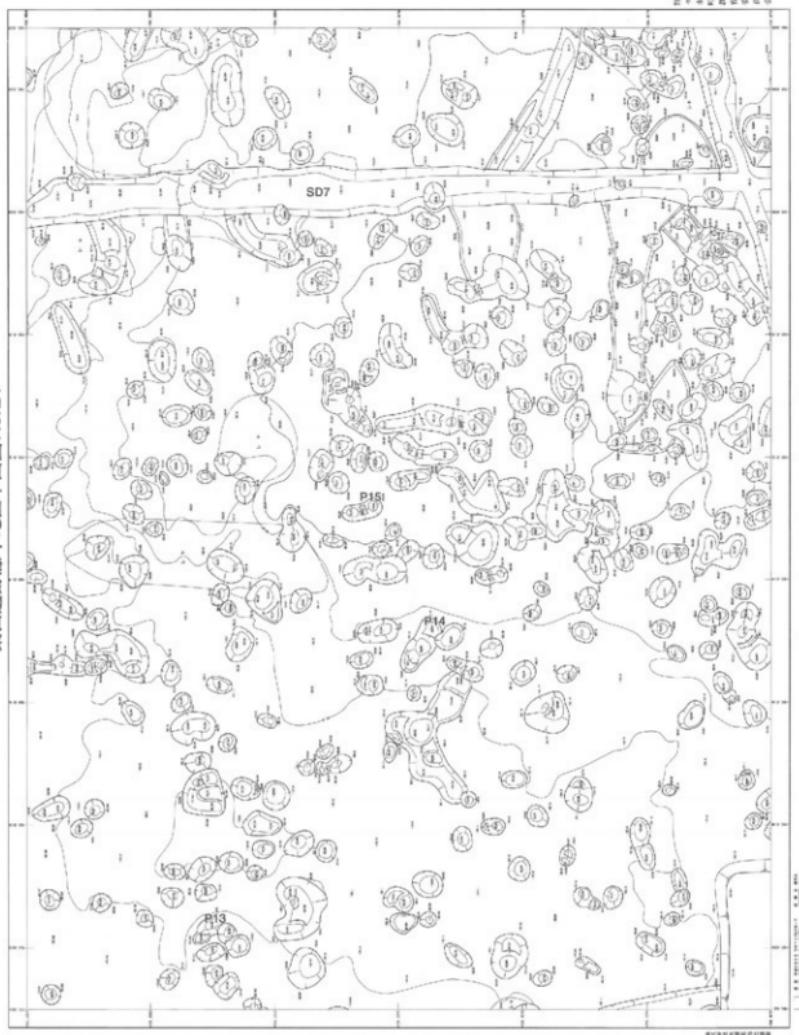
第29図 調査区分割 (1/80)

栗田道勝平地区平面図 No.26



第30図 調査区分割 (1/80)

栗田道路整平地区平面图 No.27



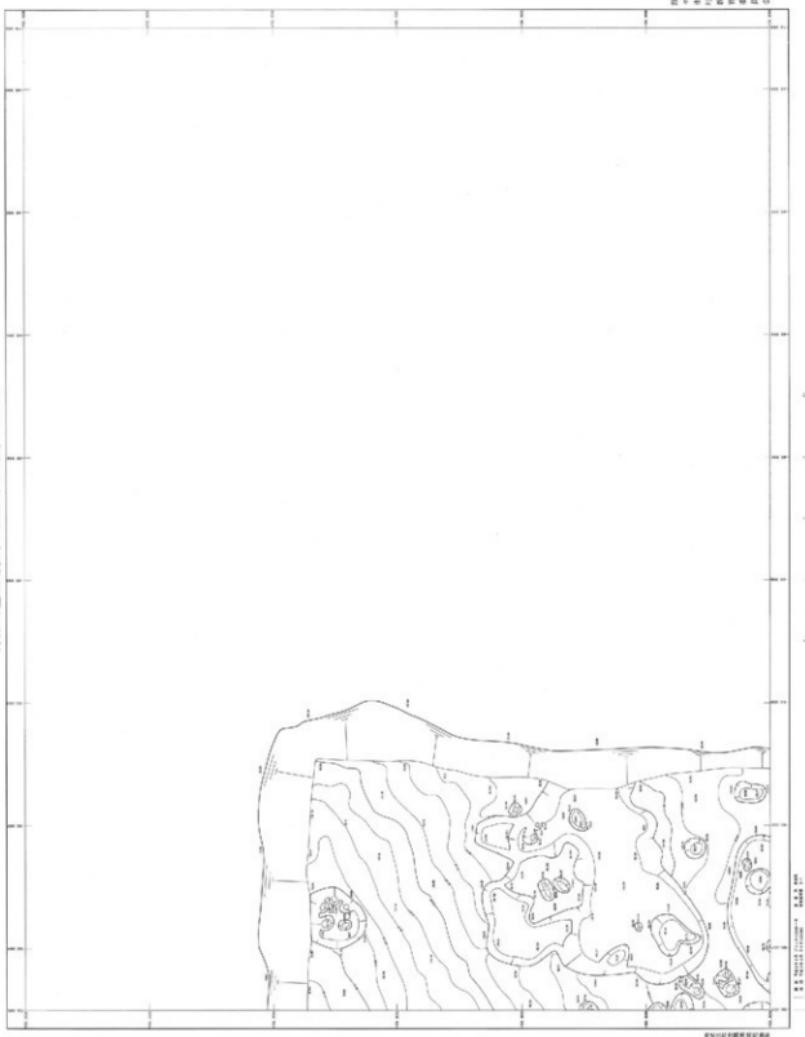
第31图 测量区分割 (1/80)

栗田地跡地平地区平面圖 No.28



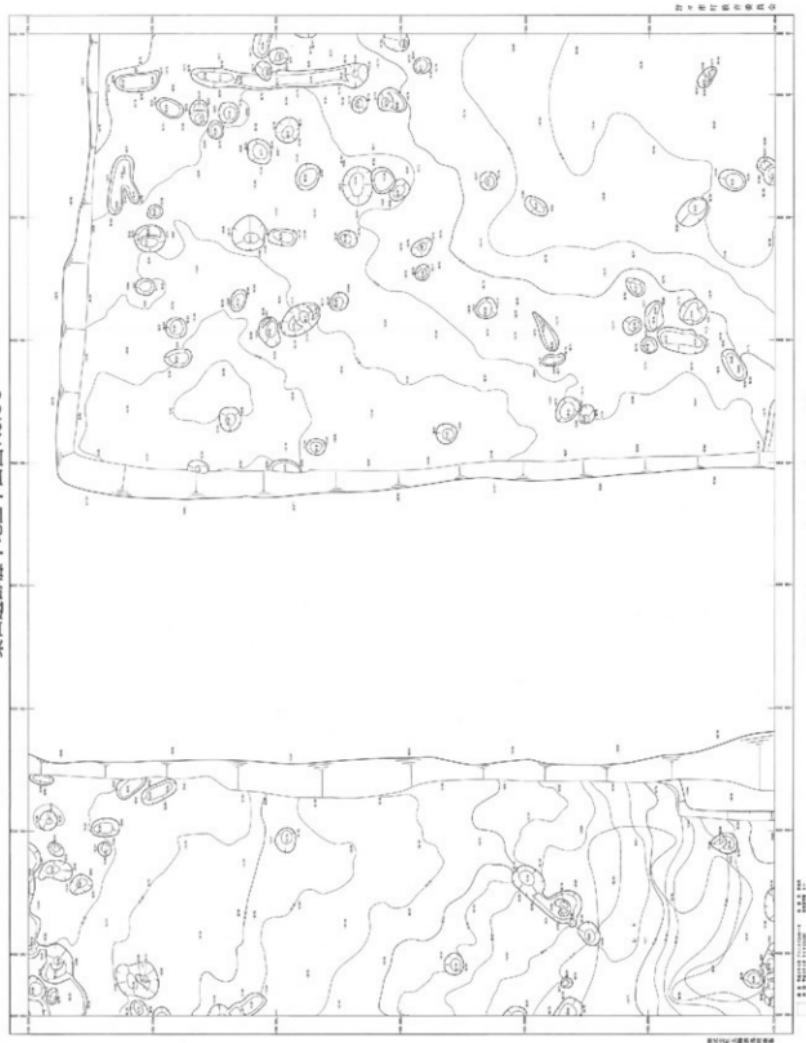
第32図 調査区分割 (1/80)

菜田造地排水地区平面图 No.29



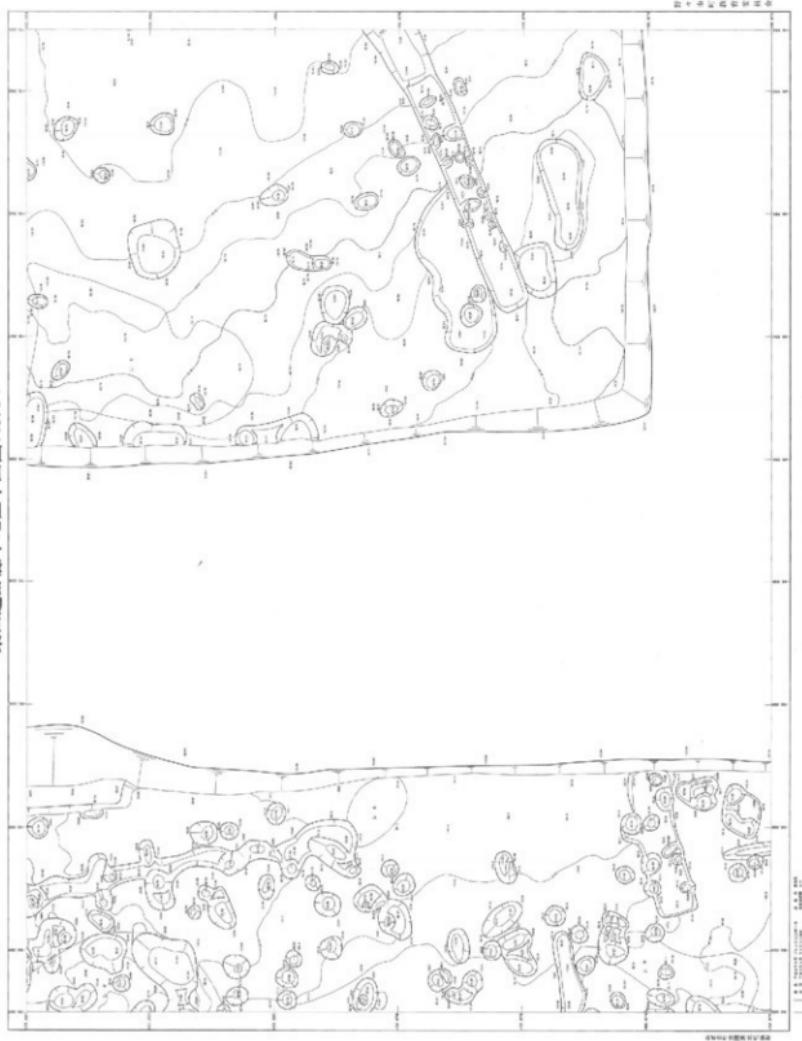
第33图 漏查区分割 (1/80)

栗田造跡藤平地区平面図 No.30



第34図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡耕平地区平面図No.3



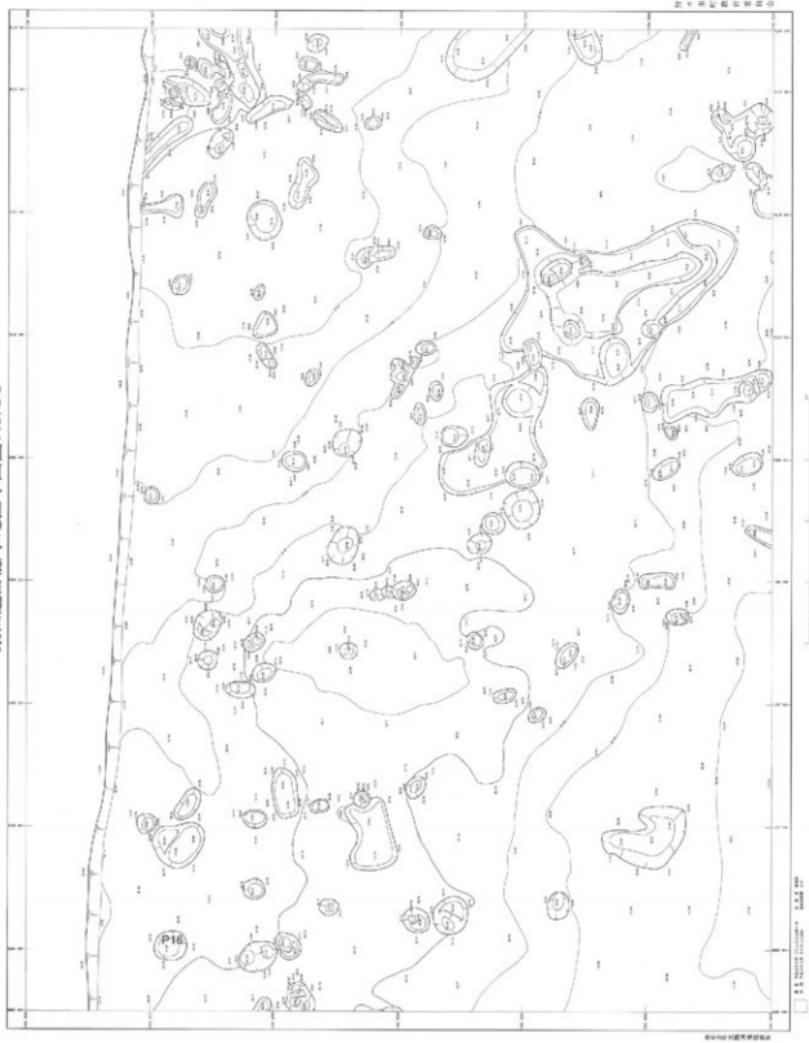
第35図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡藤平地区平面図 No.32



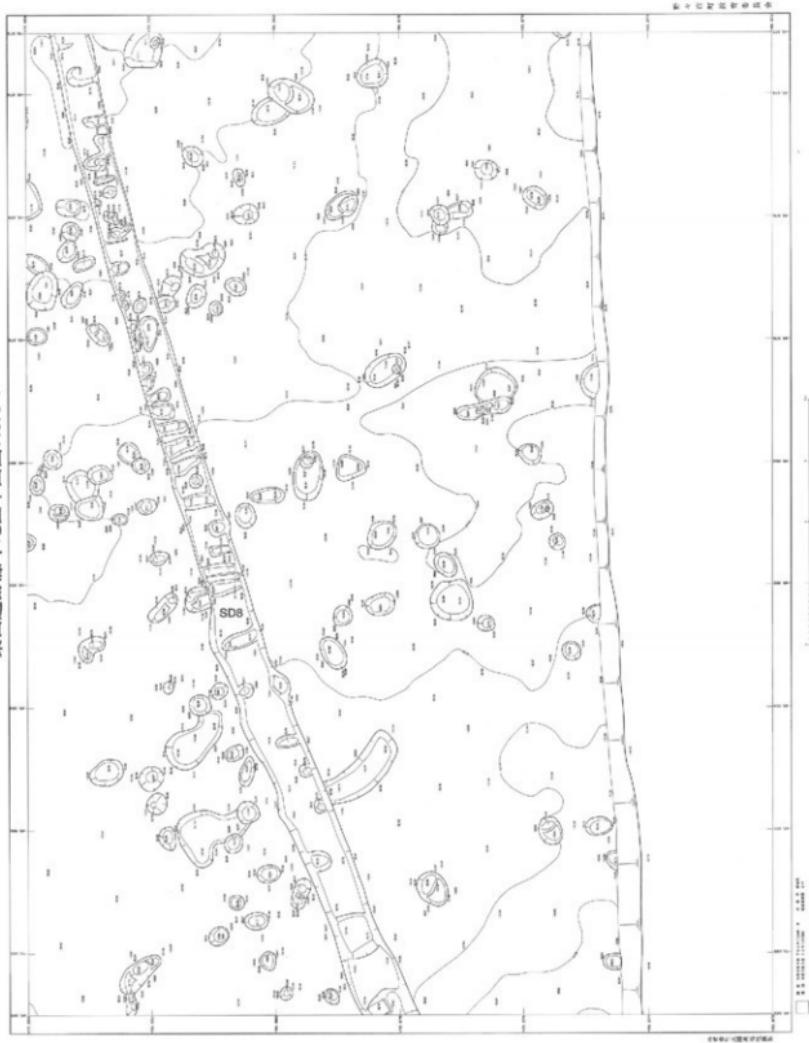
第36図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No. 33



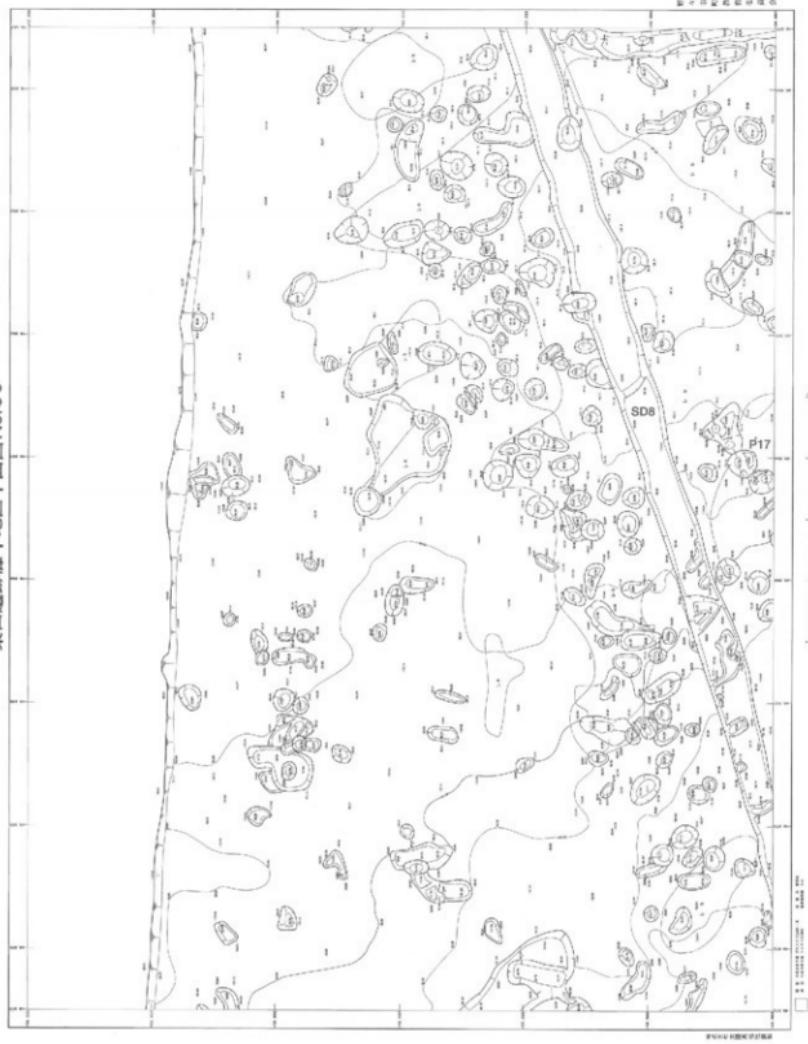
第37図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡地形図 No.34



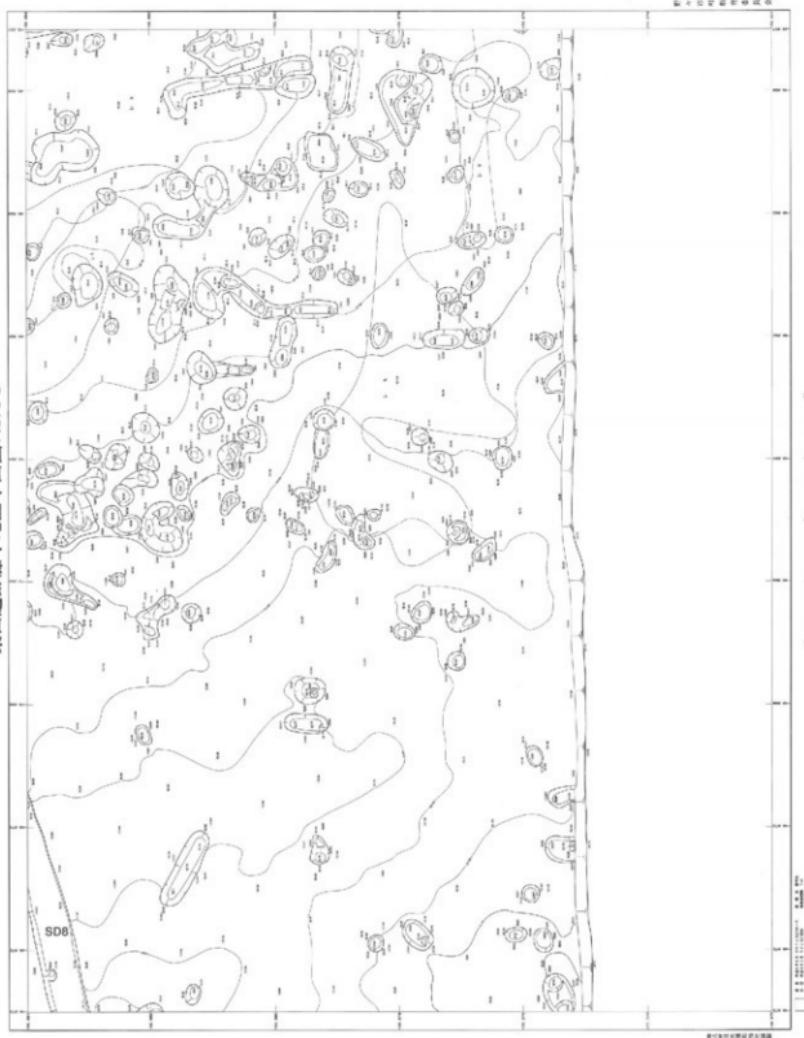
第38図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No.35



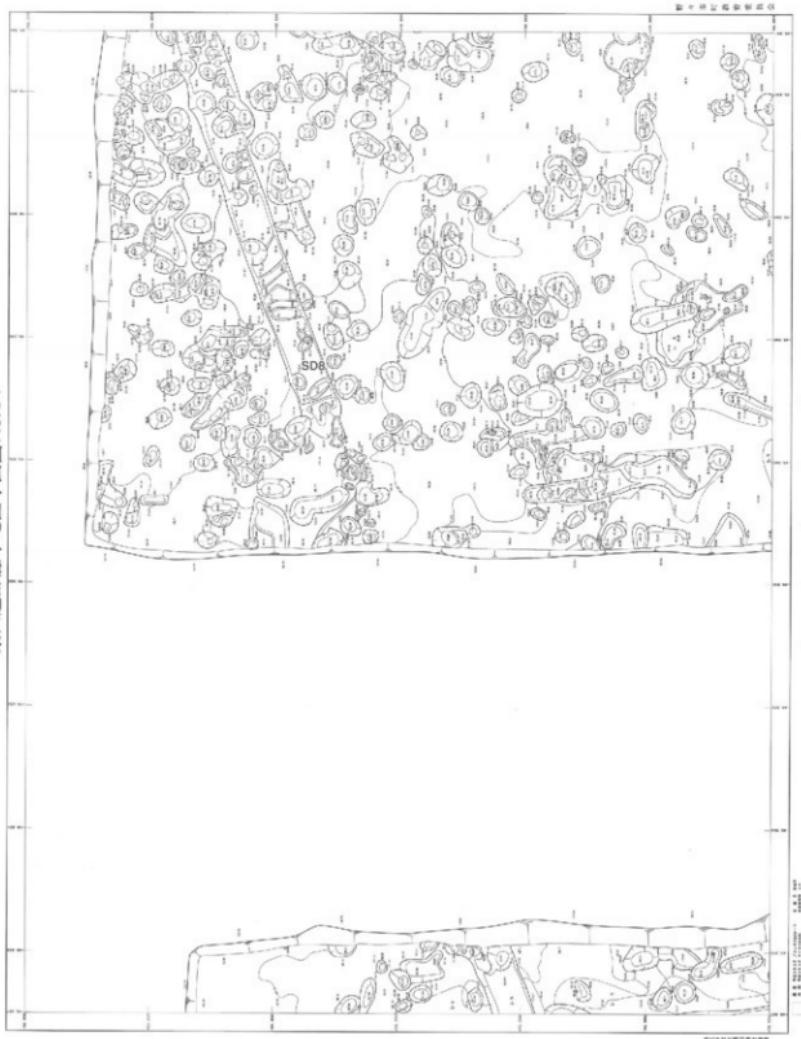
第39図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡原地区平面図No.36



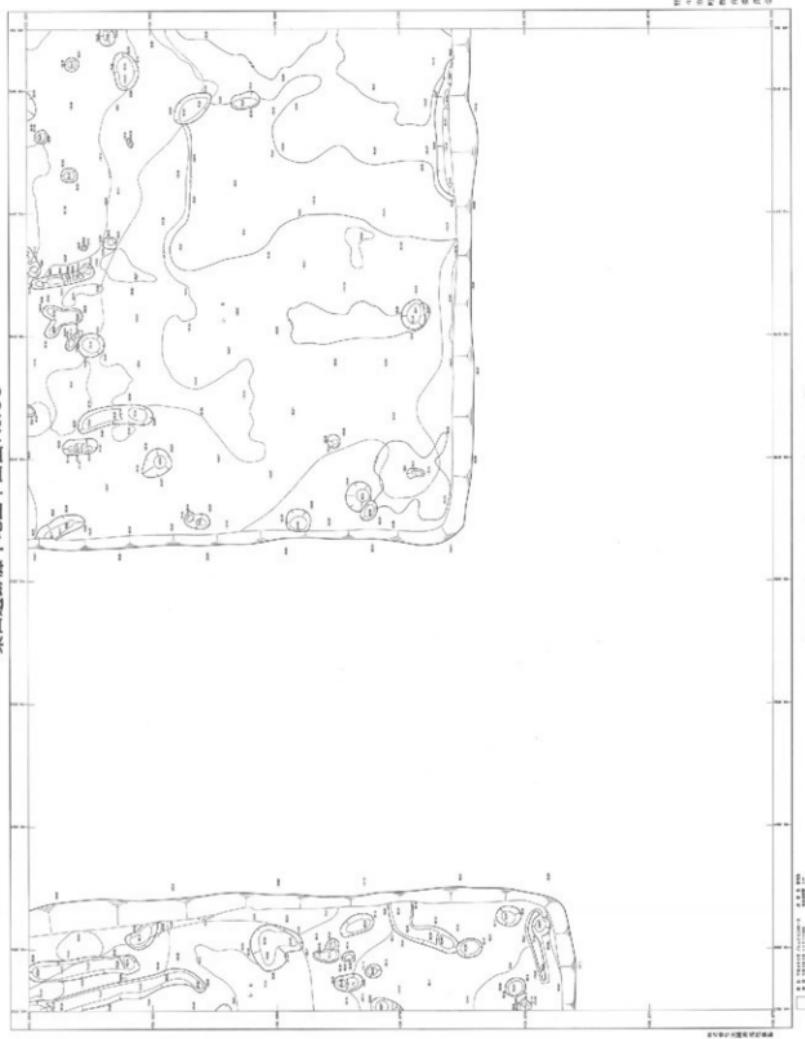
第40図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡溝平地区平面図 No. 37



第41図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡整平地区平面図 No. 38



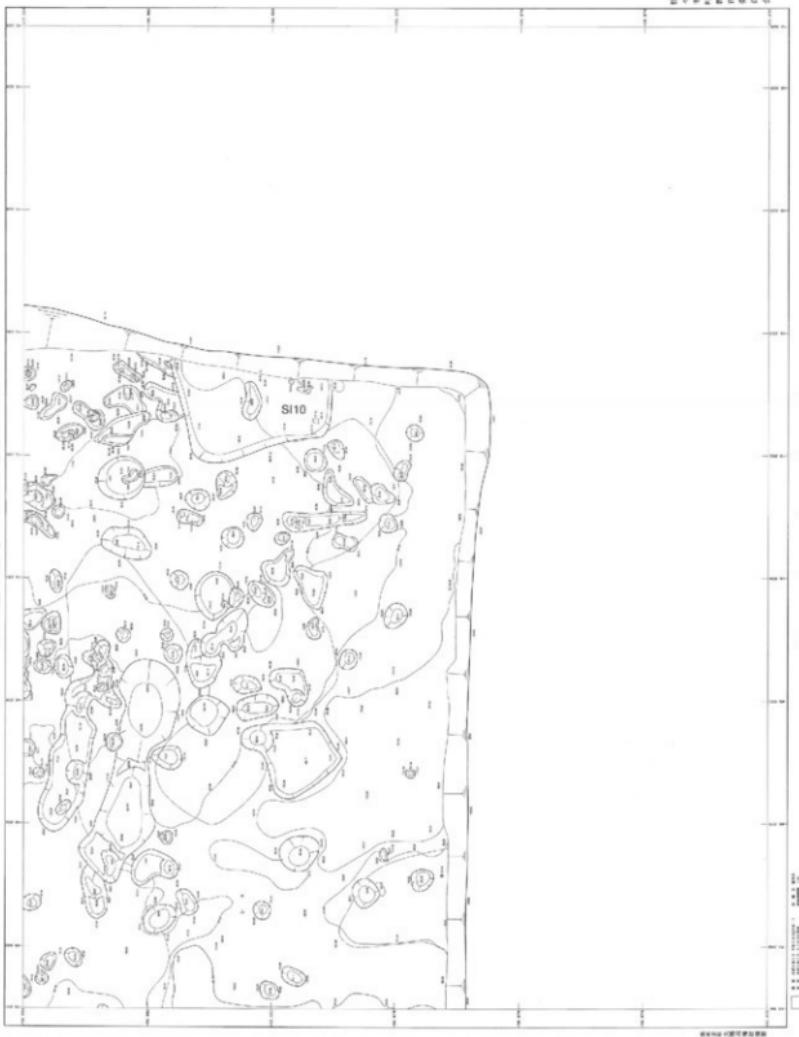
第42図 調査区分割 (1/80)

栗田遺跡標平地区平面図 No.39



第43図 調査区分割 (1/80)

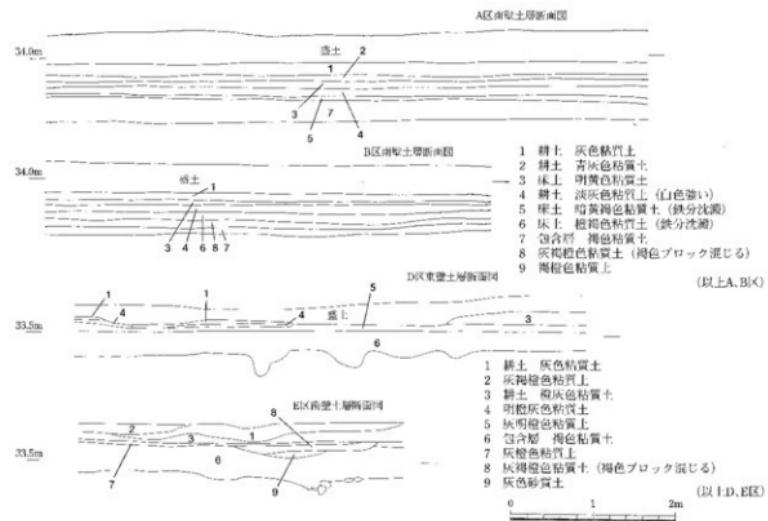
菜田造塗平地区平面図 No.40



第44図 調査区分割 (1/80)



第45図 調査区位置図



第46図 墓面上層断面図 (S-1/60)

## 第2節 遺構

### 第1項 竪穴建物

#### S I 1 (第47図)

A区中央北東寄りに位置する建物跡である。1辺約240cm×230cmの面積約5.52m<sup>2</sup>で若干重な隅丸方形をしており、壁の立ち上がりはゆるい。竪穴中央部で貼り床が確認できた。地山からの深さは約5~25cmで柱穴、壁溝、カマドは見られない。竪穴全体がS B 1の中に入り込む形となるが、両遺構の時期的な前後関係は不明である。

#### S I 2 (第48図)

B区S D 3の東側に位置する。竪穴南端は調査区外に伸びている。約330cm×230cm以上の方形である。面積は推定約7.6m<sup>2</sup>である。検出面からの深さは約18~50cmで柱穴、壁溝は確認できなかった。床面は踏み固められていた。床面カマド付近で一部焼上と炭が混じて堆積している。

カマドは南東隅で確認した。幅約80cm、奥行き約100cmで焚口は西側に開く。煙道はS I 4によつて削平されているが一部残存する。カマドの袖は馬蹄形で一部破壊を受けている。

#### S I 3 (第48図)

B区S I 2の北東に隣接する。S I 4を切り、S I 5に切られている。約290cm×235cm、床面積約6.82m<sup>2</sup>の長方形で検出面からの深さは約15~25cmである。竪穴内の喫溝やピットは確認していないが、北側壁に接する中央部には直径約50cm、深さ約41cmのピットがある。

カマドは南東隅に位置する。焚口は北側に開くと思われるが、残りが悪く詳細は不明である。須恵器の壺をカマド体の一部に使用している。煙道は確認できなかった。

#### S I 4 (第48図)

B区S I 3の南隣に位置する。S I 3、S I 5に切られている。一辺約350cm×250cm以上で面積は推定12.2m<sup>2</sup>、形は方形をしていたと思われる。中央やや北寄りに直径約30cm、深さ約44cmのピットがあり、S I 3の柱穴の可能性がある。また直径約90cmで深さ約37cm、直径約60cm深さ約37cmの大型のピットが中央に掘られているが、S B 2に伴う穴と思われ、この竪穴とは関連しない。壁溝は確認できなかった。

カマドは南東隅に確認された。幅約130cm、奥行き約100cmで焚口は西側に開く。袖の先には径約20cmの石が据え置かれている。煙道は幅約50cm、奥行き約90cmを測る。

#### S I 5 (第48図)

B区S I 3、S I 4、S I 6を切り、この竪穴群で最も新しい遺構となる。約240cm×240cmの正方形で、検出面からの深さは約30~35cm、床面積約5.76m<sup>2</sup>である。竪穴内からは柱穴は検出できなかつたが、竪穴外の南壁に隣接したところに直径約30cm、深さ約42cmのピットが竪穴方向へ斜めに掘られている。北壁の中央部にも直径約30cm、深さ約34cmのピットを検出しており、これらのピットは竪穴に伴う柱穴にあたると考えられる。床は貼り床が施される。壁溝は確認されなかった。

カマドは南東隅で確認した。焚口は北側に開き、煙道が残っている。袖は破壊を受けたため、一部しか残らない。直径約15~20cmの自然石と、土師器甕の破片が袖内に補強材として使用されていた。煙道は袋状をし、最大幅約60cm、奥行き約50cmを測る。出土遺物は土器の他、鉄製品が出土している。

#### S I 6 (第48図)

B区S I 5とS B 2の柱穴に切られている。大きく削平を受けているため遺存状態は悪い。一辺約250

cm×200cm以上の盃な方形をしている。深さ約10cm足らずで壁溝は確認していない。西壁に直徑約30cm、深さ約10cmのピットが掘られている。一部床の踏み固められた箇所が見られるが、あまり明瞭ではない。

カマドは北東隅で検出された。焚口は南西に開き、袖石をもつ。残りが悪く、煙道も確認できない。

#### S I 7 (第51図)

C区最西端で検出した。平面形態は盃な方形である。一辺約250cm×160cm、床面積約4.0m<sup>2</sup>と小型である。深さは約18cmで踏み固められた貼り床の痕跡が見られた。壁溝、カマドは見られなかった。内部には直徑約30~60cm、深さ約7cm~13cmのピットが3基見られるが、柱穴になるかは不明である。また、ピットAからは人頭大の自然石が3個見つかった。

#### S I 8 (第52図)

E区中央北寄りで検出した。平面形態は隅丸方形をしている。一辺約280cm×240cmで床面積約6.72m<sup>2</sup>、深さ約17~34cmで床面からは不定形なピットが多く検出されているが柱穴にはならないようである。壁溝、カマドは確認できなかった。

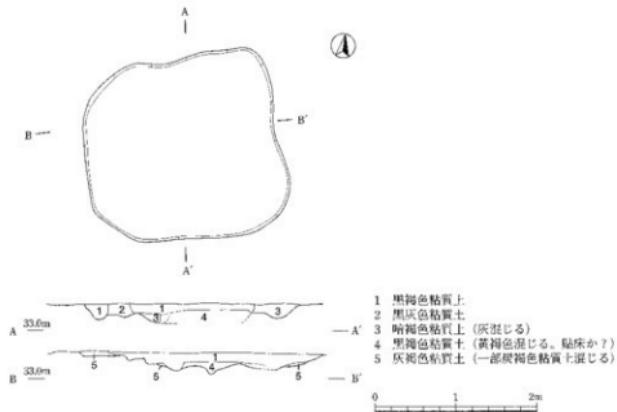
#### S I 9 (第53図)

S I 8 東南下に位置し、隅丸方形をしている。一辺約370cm×300cmで床面積約11.1m<sup>2</sup>である。深さは検出面から約10~20cmで、踏み固められた痕が残っている。竪穴内からは直徑10cm~20cm、深さ10cm~20cmのピットが数個検出されているが、柱穴になるかどうかは不明である。中央付近のピットBからは完形の須恵器坏が据え置いた状態で見つかった。北東側で壁溝が幅約15~35cm、深さ約4cmで確認された。

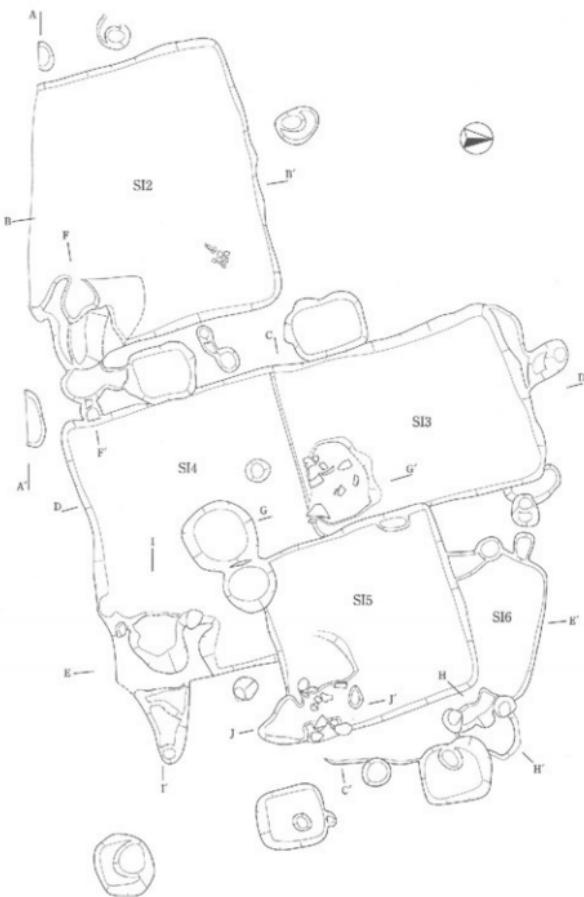
カマドは南東隅で確認した。幅約110cm、煙道も含めて奥行き約155cmであった。袖の残存はあまりよくない。

#### S I 10 (第54図)

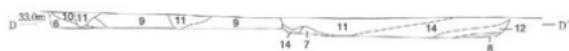
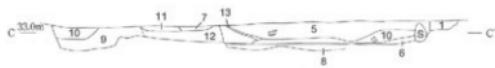
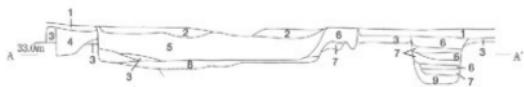
E区最東端で検出した。東部分は調査区外に伸びている。一辺約225cm×180cm以上、検出面からの深さは約30cmで床面は貼り床が見られず礫層まで掘りぬいている。中央部には約60cm×20cm、深さ約30cmのピットが検出された。壁溝、カマドは確認できなかった。また、南壁際から上師器片が集中して出土した。



第47図 A区 S I 10 平面図、断面図 (S=1/60)



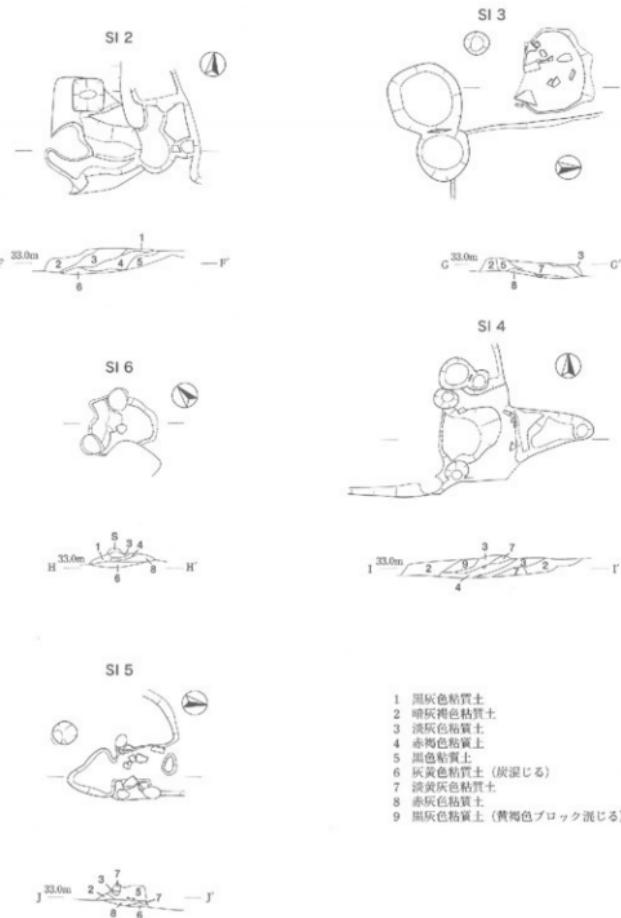
第48図 B[× SI2-3-4-5-6平面図(S=1/60)



- |                         |                                       |
|-------------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土                | 8 黒褐色粘質土（黄褐色ブロック混じる、一部赤褐色焼土及び炭渙じる、胎床） |
| 2 海黄色粘質土                | 9 灰褐色粘質土                              |
| 3 褐黃色粘質土（地山と包含層の間の結合）   | 10 黄灰色粘質土（地山の上を使用）                    |
| 4 海色粘質土（一部炭渙じる）         | 11 黒灰海色粘質土                            |
| 5 喜潤色粘質土（黄褐色小ブロック混じる）   | 12 黑灰色粘質土                             |
| 6 黒褐色粘質土（若干褐色混じる）       | 13 明黄灰褐色粘質土（地山の土を使用）                  |
| 7 黑色粘質土（地山の上を使用、明黄色に近い） | 14 淡灰褐色粘質土                            |

0 1 2m

第49図 B区 S12・3・4・5・6 断面図 (S=1/60)



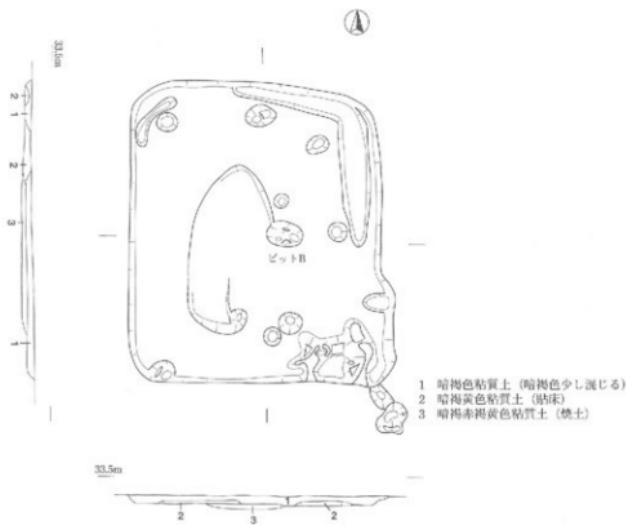
第50図 B区 SI 2-3-4-5-6 カマド平面図、断面図 (S=1/60)



第51図 C区 S17平面図、断面図 (S=1/60)



第52図 E区 S18平面図、断面図 (S=1/60)



第53図 E区 SI9平面図、断面図 (S=1/60)



第54図 E区 SI10平面図、断面図 (S=1/60)

## 第2項 挖立柱建物

### S B 1 (第55図)

A区S I 1を囲む形で検出された。約520cm×520cm (3×3間) の側柱建物である。磁北から約20度西へ傾き、周囲の溝群の方向とほぼ一致する。柱間は約180cm前後である。柱穴はやや不定形な円形をしており、直径約40~60cmを測る。深さは地山から約15~30cmで約25cmのものが多い。遺物は柱穴のP 2から須恵器の蓋が出土している。

### S B 2 (第56図)

B区竪穴建物群に隣接して検出された。約6m以上×6.5m (3間以上×1間) の側柱建物で、竪穴建物の後構築されたと思われる。桁行が北西一南東を向き、磁北から約35度西に振れる。柱間は桁行が200cm前後である。梁間に途中支柱穴があった可能性があるが確認できなかった。S I 4の中央に掘られたピットもS B 2の柱穴になるかもしれない。

柱穴は一辺約70~100cmの方形をしており、深さは約40~60cmである。遺物は柱穴内から須恵器の他に繩文土器の破片が混じって出土している。

## 第3項 土坑

### S K 1 (第57図)

A区西南隅、S D 1の西隅で確認された。長辺約330cm×短辺300cm、深さ10cm足らずの不定形プランである。土坑内や周辺にはピットがいくつも見られるが、この土坑に伴うかどうかは不明である。出土遺物は須恵器の壺が出土した。

### S K 2 (第58図)

A区S D 2中央付近に位置する土坑である。長辺約50cm×短辺約130cm、深さ約80cmの長方形で、S D 2を切って検出された。須恵器有台壺が出土したが、後述するS D 2は古代以降と考えられるためS K 2はそれよりも新しい時期となる。

### S K 3 (第59図)

S I 1の北隅に存在する。長辺約95cm、短辺約70cmの楕円形で深さは地山から約26cmである。中から須恵器有台壺が出土した。

### S K 4 (第59図)

S K 3を取り囲むようにして検出された。長辺約270cm、短辺約200cm、深さ約10cmの楕円形である。遺構自身明確ではないが、遺物は須恵器、土師器片が何点か出土している。

### S K 5 (第60図)

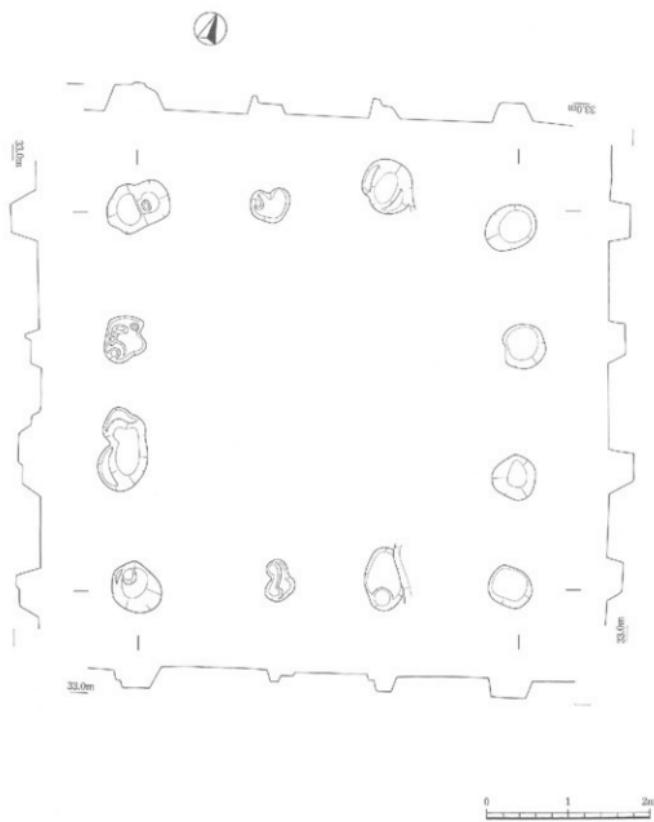
B区S I 2の北方で発見された。長辺約120cm、短辺約100cmの楕円形で最深部は約40cmである。内部にはいくつかテラスを持つ。

### S K 6 (第61図)

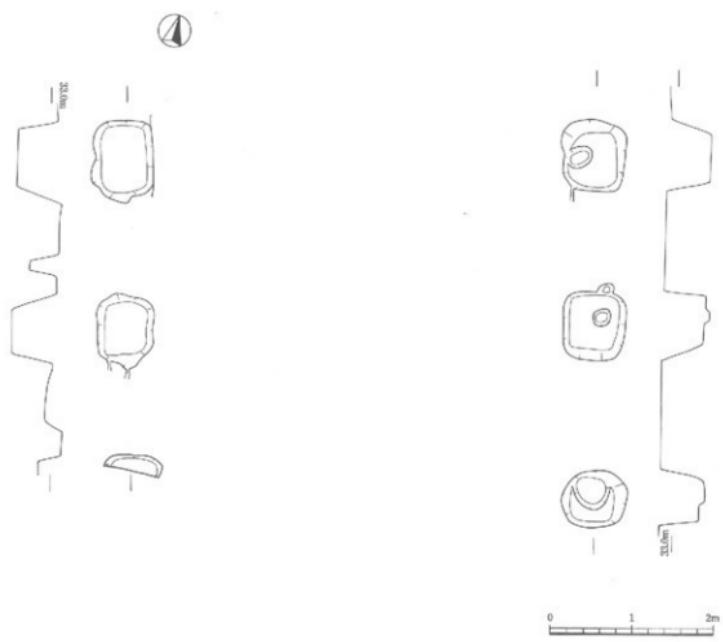
B区竪穴群の東隣で検出された。長辺約200cm、短辺約100cmの正な方形である。深さ10cm足らずである。南壁は溝に切られ削平されていた。繩文土器が出土している。

### S K 7 (第62図)

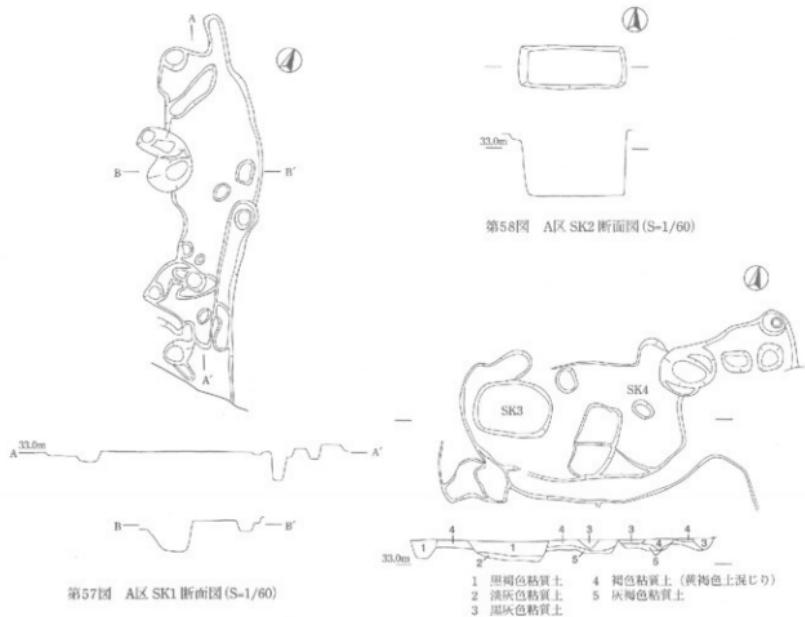
C区S D 5の東隣に位置する。直径約120cmの若干歪な形状をもった円形をする。深さ約18cmで内部には直径約45cm×30cmの小ピットが見られる。遺物は須恵器の無台壺が1点出土している。



第55図 A区 SB1平面図、断面図 (S=1/60)

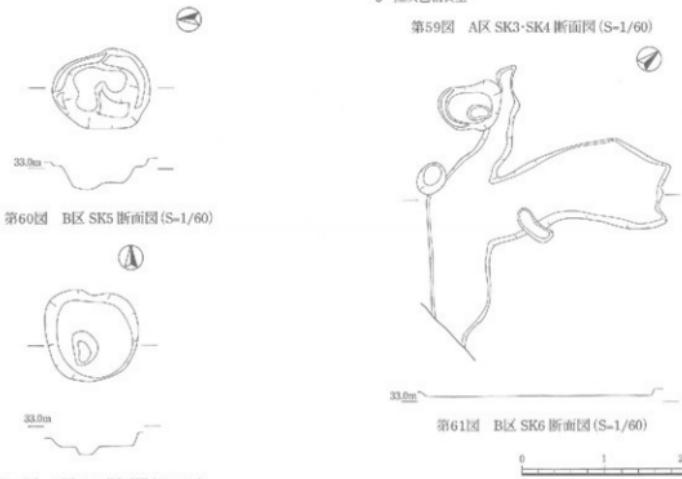


第56図 B区 SB2平面図、断面図 (S-1/60)



第57図 A区 SK1 断面図 (S=1/60)

第58図 A区 SK2 断面図 (S=1/60)



第60図 B区 SK5 断面図 (S=1/60)

第61図 B区 SK6 断面図 (S=1/60)

0 1 2m

#### 第4項 溝

##### S D 1 (第62図)

A区南西で検出した。幅約40cm～80cmで、深さは地山から約20cm～28cmである。南東一北西方向に走り、調査区外へ伸びていくため、長さは確認できない。レベルを観察すると、南東から北西に向かって傾斜していることが分かった。西隣には幅約60cm、深さ約8～10cmの溝が平行して走っている。

##### S D 2 (第62図)

A区S D 1の東隣で検出した。幅約80cm～110cmで、深さは地山から約6cm～21cmであった。南東一北西方向に走り、S D 1と13m程離れる形で平行して走り、西側壁付近でS D 1を切って調査区外に伸びていく。レベルから判断して、南東から北西に向かって傾いていくと思われる。覆土は包含層より上層の淡灰色粘質土で人頭大の石が多く堆積していた。遺物は須恵器と土師器が出上しているが時期は若干下ると思われる。

##### S D 3

B区西側で検出した溝で、弱く蛇行しながら南北方向に走る。幅約250cm～400cmで、深さは地山から約20cm～27cmである。第4章の平成7年度調査の東端で確認したS D 4に統く。遺物は古代の土器、17C前半～明治期の陶磁器が出土している。

##### S D 4

B区東側で検出した。南北方向を走り、調査区の北端から徐々に西に折れて行く。幅約20cm～110cmで深さは地山から1cm～8cmと浅い。P10手前が南限となる。レベルの確認から南から北に向かって傾斜していくようである。遺物は須恵器や土師器が比較的多く出土した。

##### S D 5

C区西側で検出した。約6～12mの幅をもち、南北方向に走る。堆積土に砂が含まれていたため、河跡になると思われる。遺物は古代の土器が混じるが、近世、近代の陶磁器が主体である。

##### S D 6

C区中央で検出した。幅約50cm、深さは約5cm～14cmである。東南から北西方向(N23°W)に弱く蛇行して走り、疊層で消える。遺物は須恵器の坏が出土している。

##### S D 7

C区東側で検出された。幅約50cm～80cmで深さは約12～14cmである。南北に走り、調査区南壁から16m走った礎層付近で消える。遺物は須恵器の有台坏の底部が出土している。

##### S D 8 (第63図)

C区、D区、E区を横切る形で検出された。途中で途切れはするが方向、深さ等から同一遺構と見てもよいだろう。幅約50～100cmで確認出来た長さは約67mであった。溝は南西一北東ライン(N76°E)で、遺物は出土していない。深さ約8～15cmで、中には多数の小ピットが点在している。

#### 第5項 ピット

##### P 1

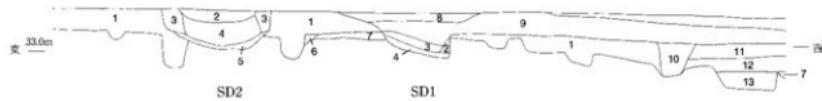
A区S D 2に切られる形で検出された。長辺約75cm、短辺約45cmの楕円形で深さ約13cmである。内部に小ピットが見られ、小ピットは直径約20cmで深さ約26cmである。遺物は須恵器の坏1点である。

##### P 2

A区S 1 1の南西に位置するピットで、S B 1の柱穴である。長辺約110cm、短辺約55cmの不定形な円形をしており、内部にテラスが存在する。深さは約27cmである。

##### P 3

A区歓溝の東側に見られる。長辺約40cm、短辺約30cmの楕円形で約21cmの深さを持つ。遺物は土師



- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 1 暗褐色粘質土         | 9 淡灰褐色粘質土            |
| 2 黑色砂質土          | 10 暗灰褐色粘質土           |
| 3 灰褐色粘質土         | 11 灰白色粘土 (極褐色鉄分混じる)  |
| 4 淡灰色砂質土         | 12 黒色粘土              |
| 5 灰褐色砂質土         | 13 暗灰褐色粘質土 (黑色粘土混じる) |
| 6 淡褐色粘質土         |                      |
| 7 黑灰色粘質土         |                      |
| 8 淡灰褐色粘質土 (白色強い) |                      |

第62図 A区 南壁 SD1・2 断面図 (S=1/60)



- |                  |
|------------------|
| 1 暗灰褐色粘質土        |
| 2 暗褐色粘質土 (黒色に近い) |
| 3 淡灰色砂質土         |

第63図 D区 東壁 SD8 断面図 (S=1/60)



器の壺口縁が出土している。

P 4

B区 S D 3 の東側に位置する。長辺約92cm、短辺約76cmの不定形な形をする。内部には小ピットやテラスが見られ、最深で約35cmである。遺物は破壊が出土している。

P 5

B区 P 4 より東へ 6 m、調査区北壁より南へ4.5mに位置する。形は不定形で深さは約 8 cm、内部に小ピットが見られる。小ピットの直径は約25cmで深さは約37cmである。

P 6

B区掘立柱建物の東ラインの柱穴である。直径約90×75cmの隅丸方形で、約62cmの深さを持つ。内部に直径約25cmの小ピットが見られ、柱痕の可能性がある。

P 7

B区南壁中央付近に位置する。長さ約105cmの直な楕円形で、深さは地山から約11cmである。縄文土器が出土している。

P 8

B区 S K 6 東隣に位置する。形は不定形でテラス、ピットが多数見られる。ピットの最深は約65cmである。遺物は縄文土器が出土している。

P 9

B区 S D 4 の西側に位置する。長辺約50cm、短辺約30cmの楕円形をしており深さは約20cmを測る。

P 1 0

B区南東に位置する楕円形のピットである。長辺約85cm、短辺約35cmで深さ約23cmである。

P 1 1

B区 S D 4 の東側に位置し、長辺約37cm、短辺約20cmの楕円形で深さは約25cmである。

P 1 2

C区西南隅に位置するピットである。長辺約68cm、短辺20cm以上の楕円形をしており、調査区外にのびるため全容は明らかでない。深さは約25cmであった。

P 1 3

C区中央で S D 6 の東側で検出した。長辺約55cm、短辺約30cmの楕円形状で、深さは約29cmである。縄文土器が出土している。

P 1 4

C区 P 1 3 より 6 m 南東下に位置するピットである。長辺約96cm、短辺約39cmの直な楕円形をしている。両側にテラスを持ち、中央の深さは約26cmである。

P 1 5

C区 P 1 4 の北東上に位置する。長辺約66cm、短辺約27cmの楕円形で、穴内部に小ピットが 2 個見られる。ピットの深さは約22cmと約23cmである。遺物は須恵器壺が出土している。

P 1 6

D区北壁付近に位置する。直径約55cmの円形で、約23cmの深さを持つ。

P 1 7

D区 S D 8 の南側に位置するピットである。直径約45cmの円形で深さは約18cmである。出土遺物は内黒の塊が出土している。

### 第3節 遺物

#### 第1項 弥生時代以前の土器 (第64図)

1～5は縄文土器である。1～3は底部である。1の底部外面はスダレ状圧痕が見られる。全体的に摩耗が著しい。4、5は深鉢である。4は外面に3本の沈線が、内面には1本の沈線が見られる。後期中葉と思われる。5は口縁部の破片でやや弱めの外反をもつ。

#### 第2項 古代以降の土器 (第65～73図)

S I 1

6、7は須恵器無台坏である。6は高松産で口縁部外面に重ね焼きの痕が見られ、7は苔干焼成不良で末産のものと思われる。IV<sub>2</sub>期に相当するであろう。

8、9、10は上師器甕である。9は口縁外面に工具による圧痕が見える。

11は土師器鍋である。

S I 2

12、13は須恵器蓋である。12は高松産で口縁端部に使用痕が見られる。IV<sub>2</sub>期にあたると思われる。13は木座と思われ、口縁端部の返しが弱い。

14、15は須恵器坏で、14は高松産でIV<sub>2</sub>期である。15は体部下半全体に重ね焼き痕が見られる。高松産でIV<sub>2</sub>期に相当する。

16は須恵器高坏の脚部で末産である。沈線が2本見られる。IV<sub>2</sub>～V<sub>1</sub>期にあたると思われる。

17、18は土師器甕である。17は小型甕で体部下半全体に煤が付着し、海綿骨針が見える。底部は静止糸切りである。18は内外面口縁部を中心に煤が付着している。IV<sub>2</sub>期である。

19～22は何れも長胴甕である。IV<sub>2</sub>期に相当すると思われる。19は外面全体に煤が付着し、摩耗が著しい。20は内外面共に煤が付着するが、19ほど顕著ではない。体部下半の外面は平行線状、内面は同心円状の叩き痕を残している。21も内外面に煤が付着する。叩きは外面は格子状、内面は同心円状である。22も内外面に煤が付着している。叩き痕は外面格子状、内面同心円状である。20、21、22には割口にも煤が付着しており、廃棄時もしくはその後に付着したものと思われる。

S I 3

23は須恵器坏口縁部である。小片のため詳細は分からぬ。

24は須恵器有台坏である。木座で底部内面に使用痕が見られる。V<sub>1</sub>期と思われる。

25、26は土師器甕である。25は口縁部にあたる。小片のため詳細は不明である。26は小型甕で、口縁内面と外面全体に煤が付着している。カマドから出土しており、被熱のため所々剥離している。底部は平底で静止糸切りである。

S I 4

27、28は須恵器坏である。27は口縁部のみで、28是有台坏の底部で両方とも辰口産である。

29、30は何れも長胴甕である。29は外面の体部に煤が付着し、内面口唇部に工具痕が見られる。30は内面の頸部から下方に煤が付着している。

S I 5

31、32は須恵器蓋でIV<sub>2</sub>期になると思われる。31は木座で、体部が扁平で口縁端部の返しが弱い。紐は欠損している。32は辰口産で、体部に丸みをもち、口縁端部外面に重ね焼きの降灰が見える。

33、34は須恵器坏である。33は降灰の状況から有台になると思われる。IV<sub>2</sub>期の辰口産と思われる。34は有台である。辰口産でIV<sub>2</sub>期になるであろう。

35はやや小型の縁で内面に使用痕が確認できる。末産でIV<sub>2</sub>期に相当する。

36は短頸瓶で頸部は欠損する。体部の一部に降灰が見られる。カマドからの出土で高松産のIV<sub>2</sub>期になると思われる。

37、38は土師器甕である。37は外面のII縁と体部の一部に煤が付着している。II縁は短めで全体的に厚い。海綿骨針が確認できる。38は長胴甕で内外面の一部に煤が付着している。叩き痕は外が平行線状、内面が同心円状である。口縁は短く仕上げている。IV<sub>2</sub>期と思われる。

S I 6

実測できたのは39の1点のみであった。土師器の長胴甕で、底部や体部下半と思われる破片も数多く出土したが接合できず、II縁～胴部のみの実測となつた。内外面の一部に薄い煤が付着し、口縁外側には沈線が一条見られる。IV<sub>1</sub>期と思われる。

S I 7

40は須恵器有台坏である。全体に赤橙色の色調をしており、底部内面に使用痕が見られる。末産でV<sub>1</sub>期である。

41は須恵器瓶である。辰口産でV<sub>1</sub>期と推される。

42、43は土師器甕である。42は長胴甕で口縁内外面と胴部外側の一部に煤が付着している。IV<sub>1</sub>期である。

S I 8

44は須恵器坏である。小松産でIV<sub>2</sub>（新）～V<sub>1</sub>のものと思われる。

S I 9

45は完形の須恵器無台坏でピットBから出土した。重ね焼き痕が見られ、やや肉厚である。高松産でIV<sub>2</sub>期と思われる。

46は高杯の脚部である。

47、48は共に小型甕で、IV<sub>1</sub>期である。47は丸底で内外面に煤が付着しており、口縁の内外面の一部に黒斑が確認できる。底部内面にあて具痕が見える。48も同じく丸底で外側の一部に煤が付着している。こちらも底部内面にあて具痕が見える。

S I 10

49～51は土師器甕である。49は小型甕で、口縁部のみの出上で外側に剥離している部分が見られる。50は小片で詳細は不明である。51は長胴甕で外側の口縁～胴部にかけて具痕が見られ、削れ口に煤が付着している。

S K 1

52は須恵器坏で末産である。II縁端部に使用痕が確認できる。

S K 2

53は末産の須恵器有台坏でV<sub>1</sub>期にあたる。

S K 3

54は須恵器有台坏で外側に重ね焼きの降灰が見える。底部内面に使用痕が見られる。

S K 4

55は須恵器坏で末産のV<sub>1</sub>期となる。

56は長胴甕でIV<sub>2</sub>期にあたると思われる。

### S K 5

57は須恵器盤で底部外面に使用痕が見られる。末産のV<sub>1</sub>期となる。

58は土師器甕で内外面の一部、割れ口にも煤が付着している。IV<sub>2</sub>期と思われる。

### S K 6

59は須恵器の無台坏で、焼成が生焼け状態となっており、全体が乳白色の色調となっている。辰口産のV<sub>1</sub>期である。

### S D 1

60、61は須恵器無台坏で、共に辰口産でV<sub>1</sub>期と思われる。60は外面に重ね焼き痕が見られる。61は焼成不良のため全体に砂っぽく摩耗が著しい。

62は土師器高坏の脚部で、内外面摩耗が激しいが、外面の一部に赤彩の痕が見える。

63は土師器の甕で口縁端部外面に煤が付着している。IV<sub>2</sub>期と思われる。

### S D 2

64は須恵器無台坏で高松産のV<sub>1</sub>期である。

65～67は土師器甕である。65は有台坏で高台のみの出上である。VI<sub>1</sub>期のものと思われる。66は無台坏で底部は回転糸切りを行っている。VI<sub>1</sub>期に相当すると思われる。67は無台坏で僅かに底部～体部に段を有しており、66より丸みを帯びた形となっている。底部は回転糸切りである。VI<sub>1</sub>期と推される。

### S D 4

68～71は須恵器蓋である。68は内面に薄く墨書「廣」の文字が見える。辰口産でIV<sub>2</sub>期になると思われる。69は口縁端部のみで強いかえりをもつ。高松産でIV期に相当する。70は辰口産でV<sub>1</sub>期になるであろう。71は口縁端部に重ね焼きの痕が見られ、空気膨れのため全体に歪んだ作りになっている。

72～89は須恵器坏である。72～79は無台坏で72は口縁外面に煤が付着し、内外面に使用痕が見られる。末産のV<sub>1</sub>期と思われる。73は口縁端部外面に重ね焼きによる降灰が見える。高松産のV<sub>1</sub>期にあたる。74も口縁端部外面に重ね焼きによる降灰が見える。底部外面に墨書と思われるものが見えるが詳細は分からぬ。辰口産のV<sub>1</sub>期であると思われる。75は重ね焼きによる降灰が見られる。辰口産でV<sub>1</sub>期である。76は焼成不良のため白っぽい色調を呈している。辰口産のV<sub>1</sub>期であると思われる。77も焼成不良のため乳白色となっている。辰口産でV<sub>1</sub>期と思われる。78は辰口産のV<sub>1</sub>期であると思われる。79は底部内面に使用痕が見える。辰口産である。80は口縁端部外面に降灰が見られる。末産である。81はIV<sub>2</sub>期の小松産にあてられる。82は焼成不良で白っぽい色調をもつ。83は小片であるため詳述できない。辰口産であろう。84は内外面に使用痕が確認できる。末産と思われる。

85～89是有台坏である。85は体部外面の大半に自然釉がかかっており、口縁は少し歪んでいる。高松産でV<sub>1</sub>期に相当する。86は体部～口縁がやや外反している。辰口産のV<sub>1</sub>期と思われる。87は体部外面中程に2条の工具痕が見られる。辰口産でV<sub>1</sub>期のものである。88は体部外面に自然釉がかかっている。辰口産でV<sub>1</sub>期と思われる。89は辰口産のV<sub>1</sub>期である。

90～92は須恵器盤である。何れも口縁端部外面に重ね焼き痕が確認できる。90は底部内面に使用痕が見られる。末産のIV<sub>2</sub>期と思われる。91、92はV<sub>1</sub>期の辰口産である。

93は器種不明の土師器で、外面に煤の付着が見られる。

94～97は内黒赤彩甕である。94は外面が摩耗しており、赤彩が僅かに残っている程度である。95～97には外面に黒斑が見られ、成形は殆ど同一である。何れもV期に相当する。

S D 6

98は須恵器坏で辰口産である。

S D 7

99は須恵器有台坏でV<sub>1</sub>期の小松産である。

P 1

100は須恵器無台坏で底部に歪みが見られる。高松産でV<sub>1</sub>期である。

P 2

101は須恵器蓋で口縁端部外面に重ね焼き痕が見える。V<sub>1</sub>期の末産である。

P 3

102は土師器甕で口縁外面に少量の煤が確認できる。IV<sub>2</sub>期と思われる。

P 5

103は土師器甕の底部である。小片のため詳細は不明である。

P 6

104は須恵器坏口縁部で小片のため詳細は不明である。

P 9

105は須恵器無台坏で口縁外面に重ね焼き痕が残っている。高松産のV<sub>1</sub>期である。

P 1 0

106は台付長頸瓶で、外面には格子状の叩き痕が確認できる。肩部がやや下がるタイプで気泡が所々見え、全般的に形が歪んでいる。高松産でIV期に相当する。

P 1 1

107は須恵器の瓶で頸部より上部は欠損している。頸部割れ口が摩耗しており、破損後も使用されていたと思われる。

P 1 2

108は須恵器有台坏である。辰口産でV<sub>1</sub>期である。

P 1 4

109は須恵器壺か瓶である。辰口産のIV期にあたる。

P 1 5

110は須恵器坏で辰口産である。

P 1 6

111は土師器小型甕で詳細は不明である。

P 1 7

112は土師器の塊で内面黒色である。

包含層

113、114は須恵器無台坏である。113は口縁外面に重ね焼きの痕がみえる。辰口産のV<sub>1</sub>期である。

114はV<sub>1</sub>期の末産にあたる。115～118は須恵器坏である。115は小片のため詳細不明である。116は内面に気泡があったため、変形していることが確認できる。117は焼成不良のため全体に白っぽい色調になっている。高松産と思われる。118は小片であるが重ね焼き痕がはっきりと確認できる。辰口産である。

119～121は底部のみの無台坏である。何れも辰口産でV<sub>1</sub>期と思われる。122、123は有台坏で122は底部内面に使用痕が見られる。辰口産である。123も底部内面に使用痕が見られる。末産のIV<sub>2</sub>～V<sub>1</sub>期と思われる。124は盤で辰口産のIV<sub>2</sub>期と思われる。125は須恵器皿で底部内面に使用痕が見ら

れる。辰口産のⅤ期にあたる。126は須恵器壺で頸部より下に降灰が見える。末産である。127は須恵器の貯蔵具であるが器種は断定できない。おそらく壺か瓶になるであろう。外面に自然釉がかかっている。小松産である。128は土師器塊で内黒赤彩土器である。底部は欠損している。Ⅵ<sub>1</sub>～Ⅵ<sub>2</sub>期に相当する。129は土師器長胴甕で口縁外側に沈線2本が見える。Ⅳ<sub>2</sub>期と思われる。

### S D 3・S D 5

近世主体の溝であるが古代・中世の遺物も少量混じっていたのでここで紹介する。

130は須恵器の蓋で辰口産である。131は須恵器壺で焼成不良のため白っぽい仕上がりとなっている。Ⅳ<sub>2</sub>期にあたると思われる。132は須恵器の貯蔵具で瓶と思われる。133は土師器の有台塊の高台部である。179は須恵器の蓋でⅤ<sub>2</sub>期の辰口産と思われる。180は壺で口縁のみの出土である。端部に重ね焼きの降灰が見える。辰口産のⅥ<sub>1</sub>期であろう。181は有台壺で高松産のものである。182は土師器甕でⅣ<sub>2</sub>期と思われる。183は器種は不明であるが内面黒色である。184は青磁碗である。

### 第3項 近世、近代の遺物（第73～76図）

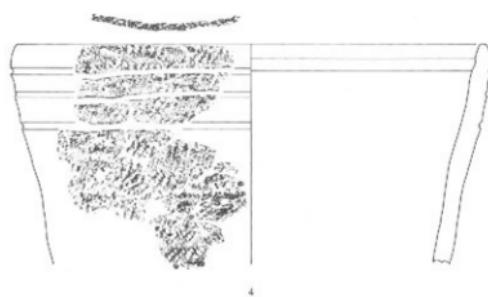
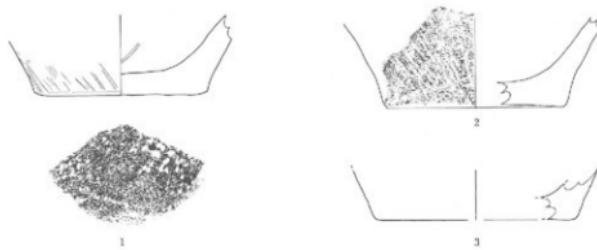
近世、近代の遺物は134～178、185～211で何れも溝からの出土である。主体は肥前系のものであるが京・信楽焼や越中瀬戸焼が何点か見られる。

134～149は磁器の碗である。134は17世紀中頃の肥前である。内外面に細かい貫入が入っている。135は17世紀末～18世紀初頭の肥前で、外面に手描きとコンニャク印判による草花文が見える。口縁のつくりは粗雑である。136は18世紀前半の肥前で欠羽根文が描かれている。137は18世紀前半の肥前である。138は肥前の底部である。139は肥前系で一重腹目文らしい文様が見える。17世紀中頃のものである。140も肥前系で底盤に「大明年製」の大字の一部が残っている。18世紀初頭である。141は瀬戸系で口縁に鉄釉が施してあり、体部に染色体文が描かれている。19世紀前半であろう。142は波佐見焼で体部に团鶴がコンニャク印判で押されている。18世紀前半と思われる。143～149は西洋コバルトを使用している。明治以降のものであろう。150～154は磁器の皿である。152は肥前系で外面に唐草文、内面に草と底部付近より欠損していく定かではないが、雪の輪かと思われる。153は波佐見の長田窯の製品で、外面は蛇の目高台、内面は蛇の目釉剥ぎである。18世紀前半のものである。154は肥前系で外面に雪と竹、内面に唐草文を描いている。断面に火を受けた跡が見られる。155～159は陶器の碗である。155は肥前系で内外面に細かい貫入がある。18世紀前半である。156は呉器手茶碗である。157は京・信楽系で内外面に細かい貫入がある。18世紀前半のものと思われる。158は内面に打刷毛目を施し、内外面に細かい貫入がある。17世紀後半であろう。159は肥前系で外面に鉄絵が施されている。17世紀後半と思われる。160～162は陶器の碗で何れも17世紀後半である。163～169は陶器の皿である。163、164は肥前系で17世紀初頭のものである。165は肥前系で砂目が見える。17世紀前半～中頃であろう。166は肥前系で17世紀前半である。167は肥前系で内面は銅線釉で蛇の目釉剥ぎである。17世紀中頃であろう。168は肥前系で17世紀前半～中頃のものである。169は肥前系の内野山窯の製品である。砂目が見え、内外面に細かい貫入がある。17世紀前半～中頃である。170はすり鉢で底面部外面の工具痕から山口県の須佐唐津の製品であると思われる。17世紀後半～19世紀代である。171は陶器の火鉢で在地系のものと思われる。18世紀～19世紀のものであろう。172は陶器の火入れである。173は越中瀬戸系の陶器で茶道具として使われていたと思われる。17世紀前半である。174は陶器肥前系の鉢（口縁小片のため定かではないが片口になる可能性有り）で17世紀中頃である。175は陶器壺で明治以降と思われる。176は瓦で明治以降のものである。177は十人形で種別は天神である。178は秉燭で灯明痕が残っている。185は肥前系の紅猪口で17世紀後半～18世紀である。186～191は磁

器の碗である。186は肥前系で外面に一重網目文か柳目文が描かれ、高台は無釉である。187は肥前系でコンニャク印判が押されている。18世紀前半であろう。188は瀬戸系で源氏文と葵文が描かれている。19世紀前半かと思われる。189～191は明治以降のもので190は銅版転写を用いている。192は肥前系磁器の筒形碗で18世紀後半である。193は磁器の猪口で外面に草花文が描かれている。17世紀末～18世紀初頭である。194～198は磁器の皿である。194は肥前系で18世紀前半である。195と196は肥前系で初期伊万里である。何れも17世紀前半～中頃である。197は肥前系で18世紀前半である。198は肥前系で大型の製品になるかもしれない。17世紀中頃～後半である。199は磁器の蓋で外面に草花とカゴに入った虫が描かれている。明治以降のものであろう。200は陶器の甕である。201は陶器肥前系の鉢で17世紀中頃前後であろう。202は有台の鉢で19世紀中頃であろう。203～207は陶器の碗である。203は九谷で19世紀代のものであろう。204は明治以降のものであろう。205は肥前系で17世紀中頃～後半である。206は肥前系で高台部のみに鉄釉が施されている。207は京・信楽系の筒形碗で17世紀前半～18世紀後半であろう。208～211は陶器の皿である。208は肥前系で17世紀後半～18世紀前半であろう。209は肥前系で砂目が見られる。17世紀前半～中頃にあたる。210も肥前系で砂目が見られる。大型の製品になるかもしれない。17世紀前半～中頃である。211は17世紀中頃の肥前系である。内野山窯の製品にあたり、砂目が見られる。

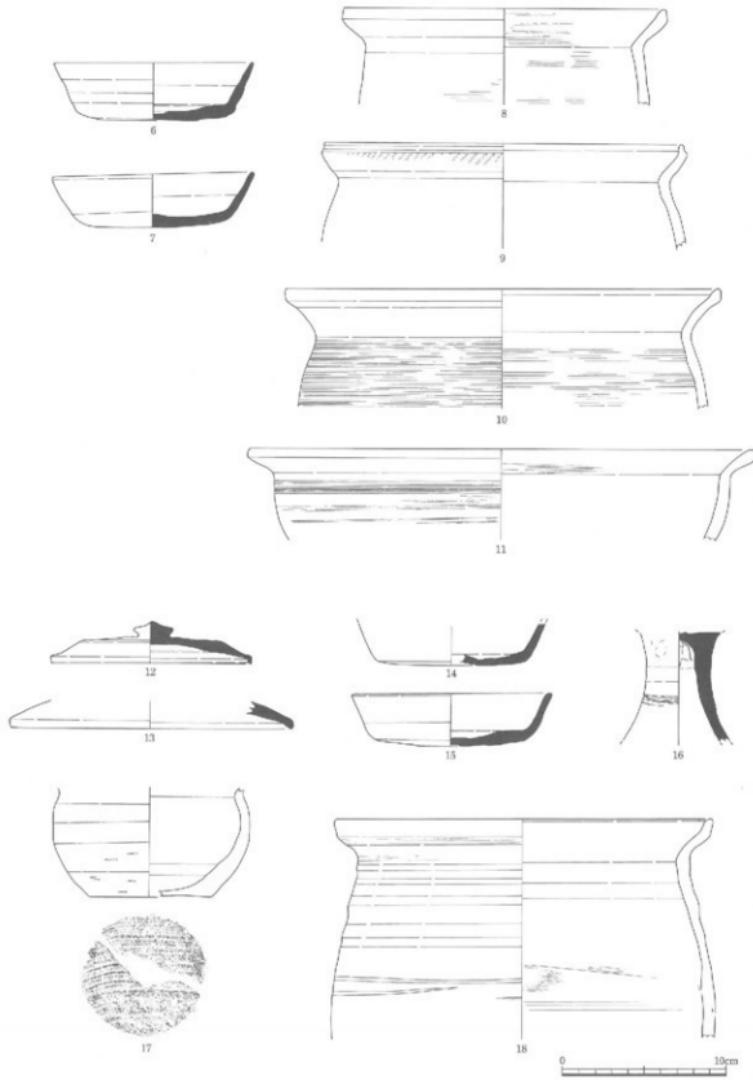
#### 第4項 石器・漆器・金属器（第77・78図）

- 1、2は竪穴建物カマドの袖石で何れも火を受けていた。
- 3は石畠の可能性がある。
- 4、5は敲石である。
- 6は打製石斧である。刃部は欠損している。
- 7～9は砥石である。7は仕上砥として使用され、鳴滝産のものである。8は中砥で、熊本県の鍋水産のものである。9は風化礫を使用しており、鉄製刃物を研いでいた面が見られる。古代以降のものと思われる。
- 10、11は何れもS D 3から出土した漆器の椀で、10は内面が赤色で外面が黒色に塗られており、草花文が描かれている。14世紀後半～15世紀前半かと思われる。11は内外面とも赤色に塗られており、やや厚めの作りである。18世紀代のものである。
- 12はS I 5より出土した鉄鎌で用途は不明である。13はS D 4より出土しており、治平元寶である。

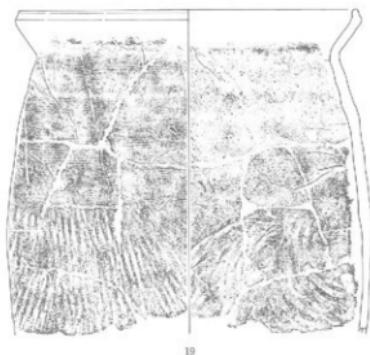


0 10cm

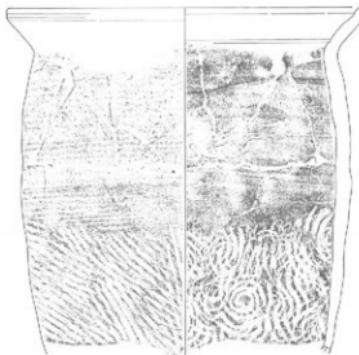
第64図 混文土器実測図



第65図 SII出土土器実測図 (S=1/3)



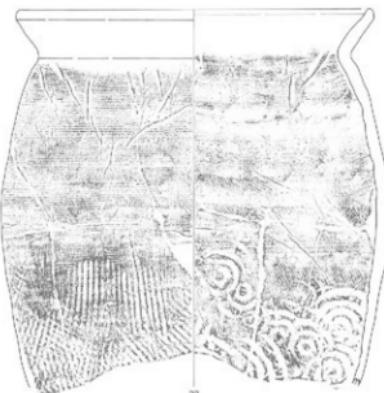
19



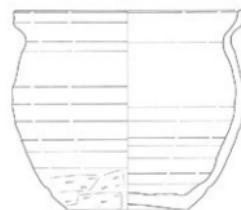
20



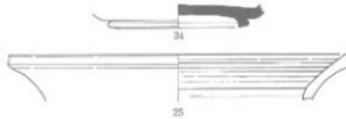
21



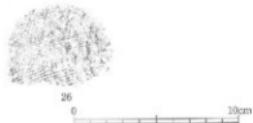
22



23



24

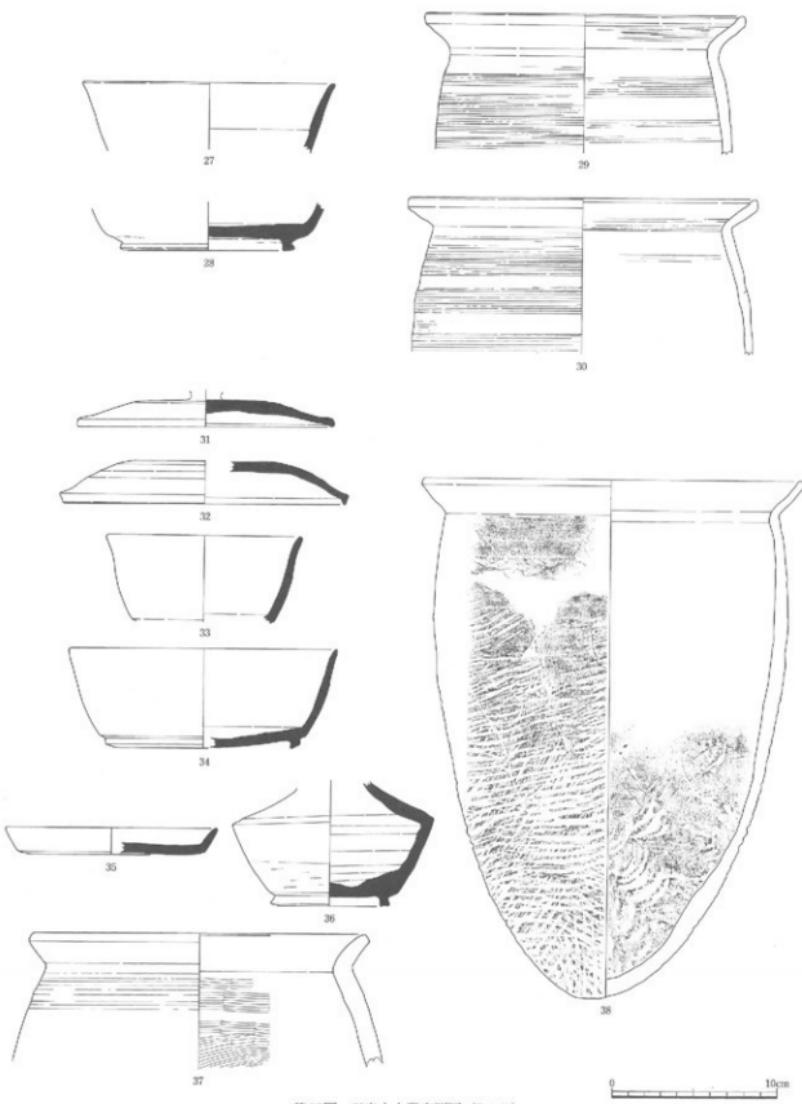


25



26

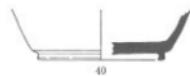
第66図 SI出土土器実測図 (S-1/3)



第67図 S1出土土器実測図 (S-1/3)



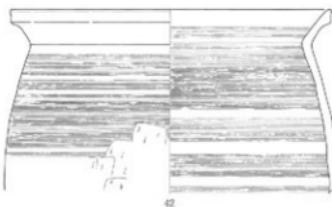
39



40



41



42



43



44



45



46



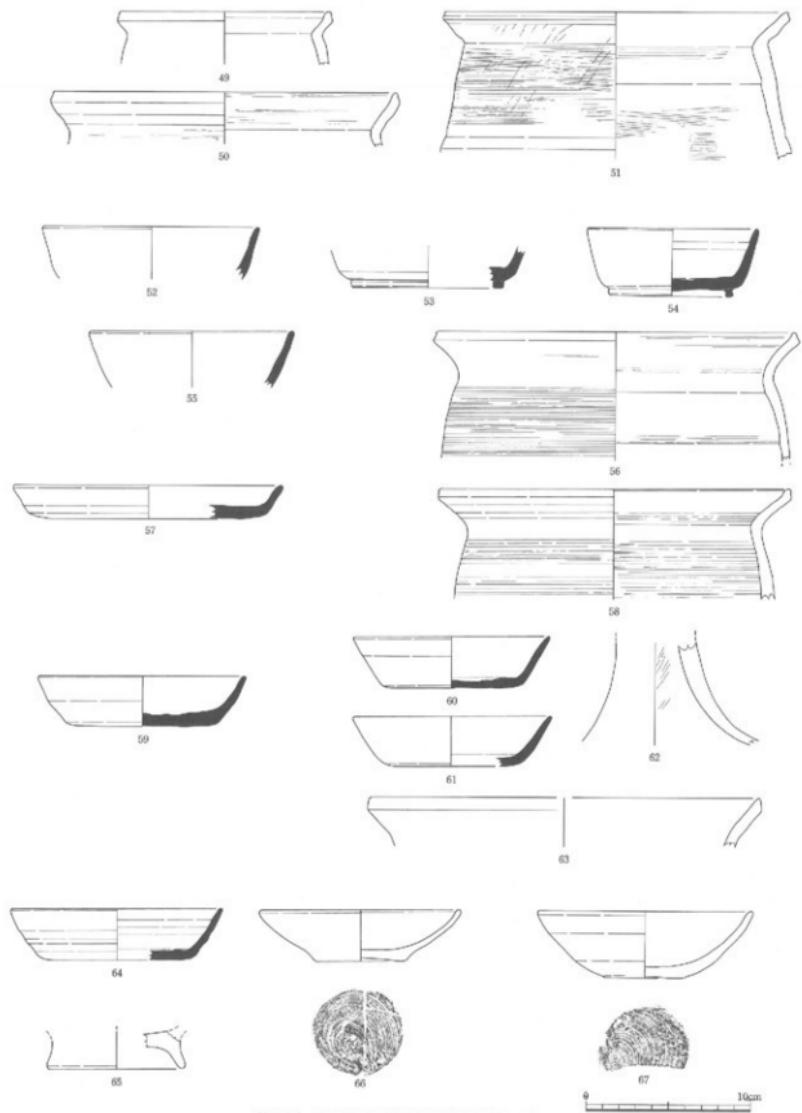
47



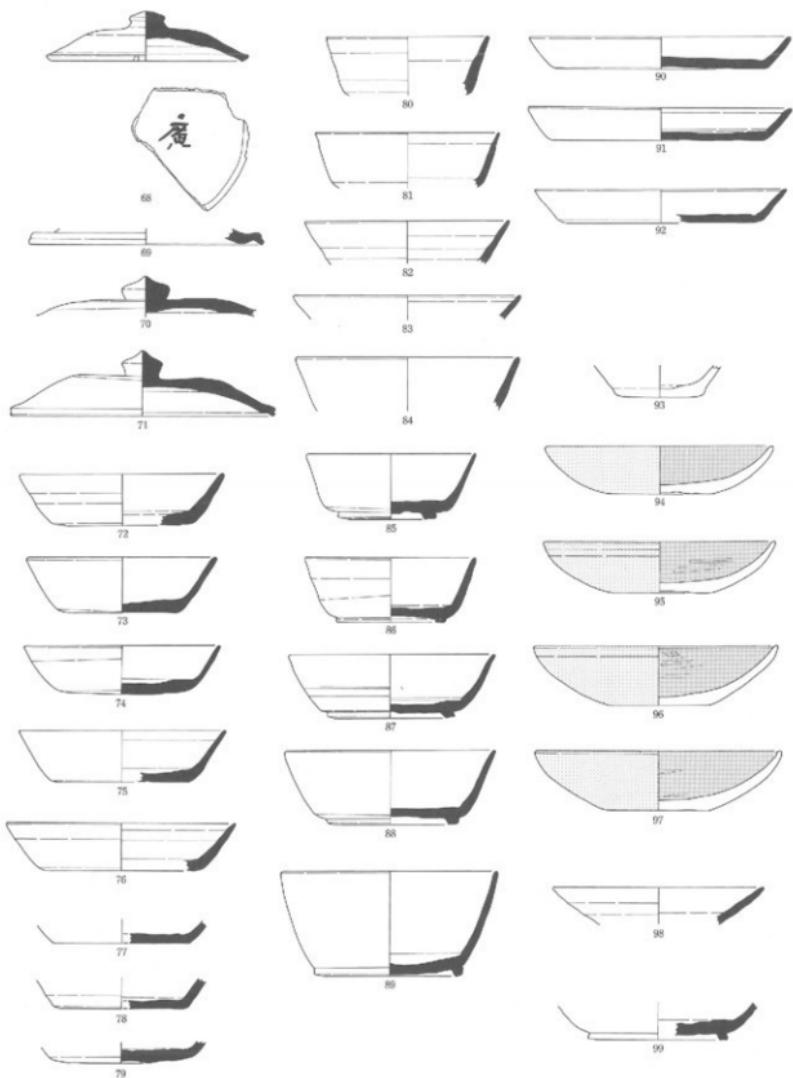
48

第68図 SI出土上器実測図 (S-1/3)



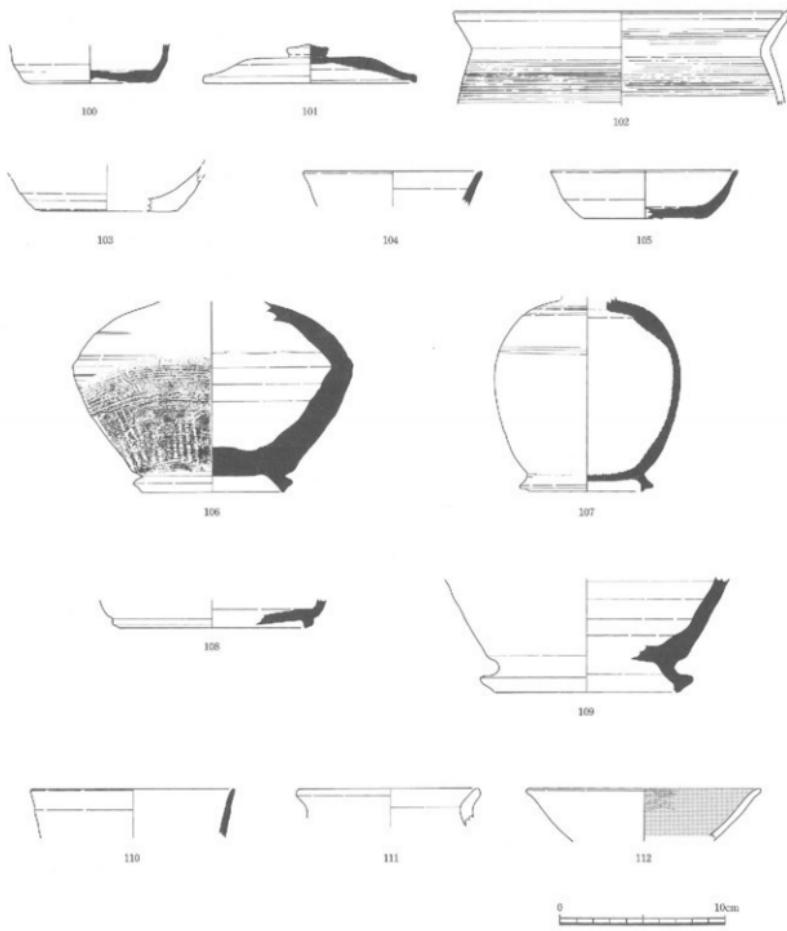


第69図 SI・SK・SD出土土器実測図 (S-1/3)

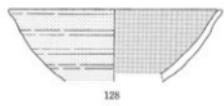
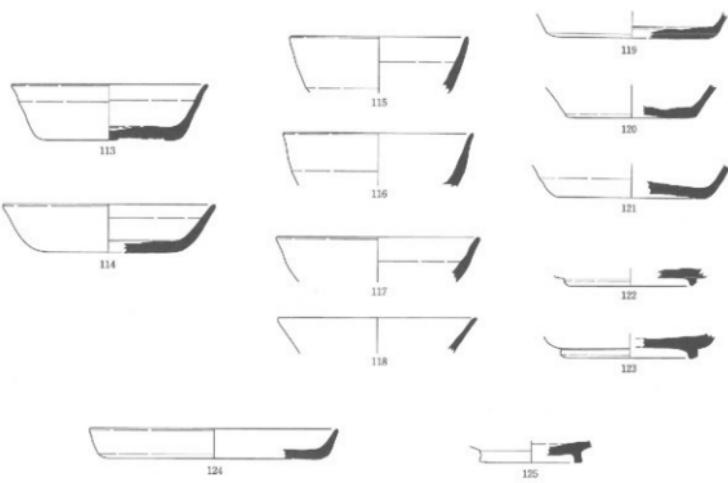


第70图 SD出土土器实测图 (S-1/3)

0 10cm

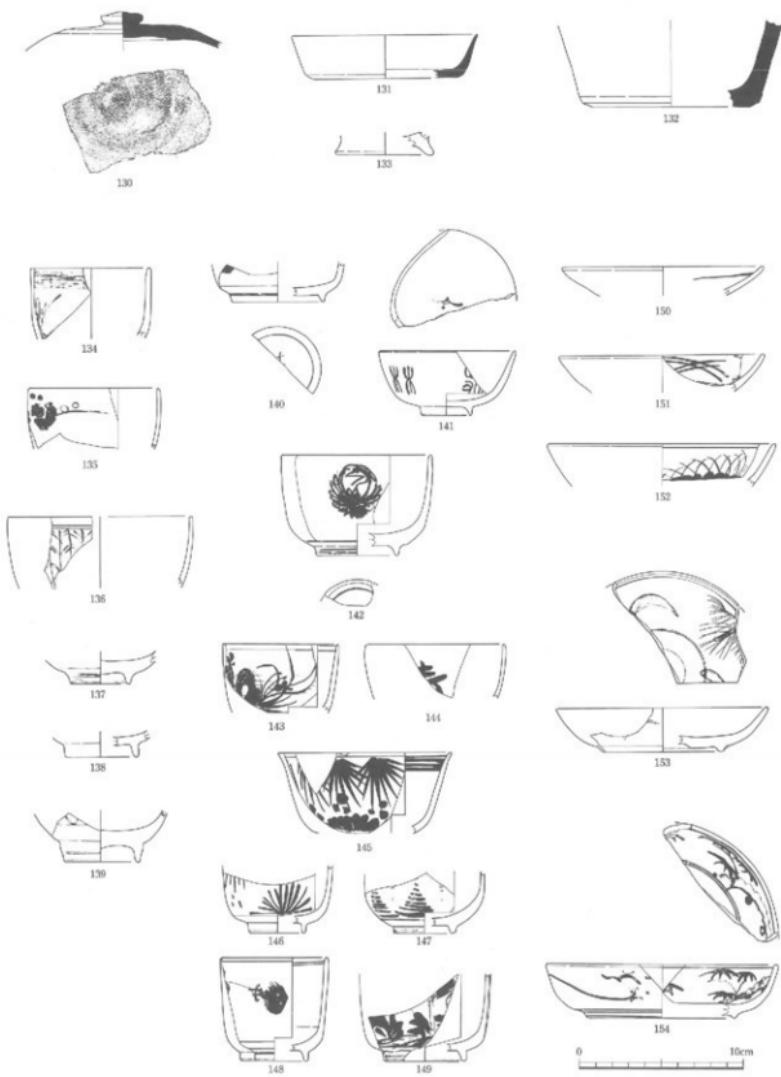


第71図 P出土土器実測図 (S-1/3)

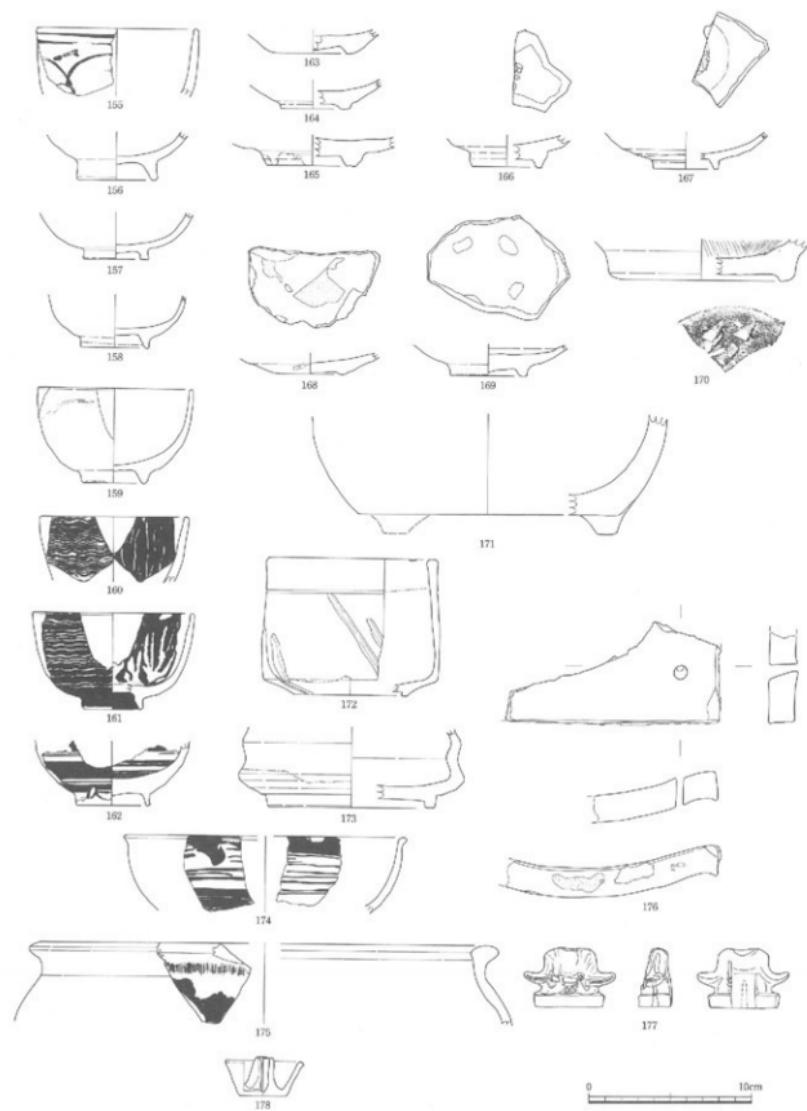


0 10cm

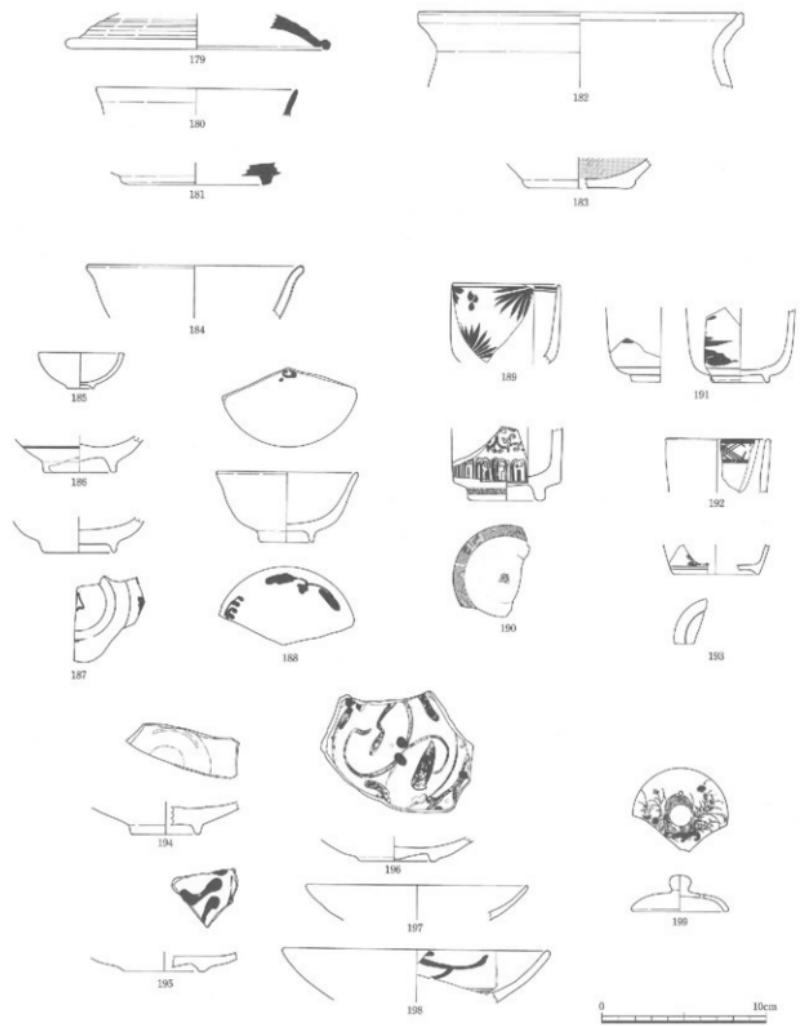
第72图 包含层出土土器夹测图 (S=1/3)



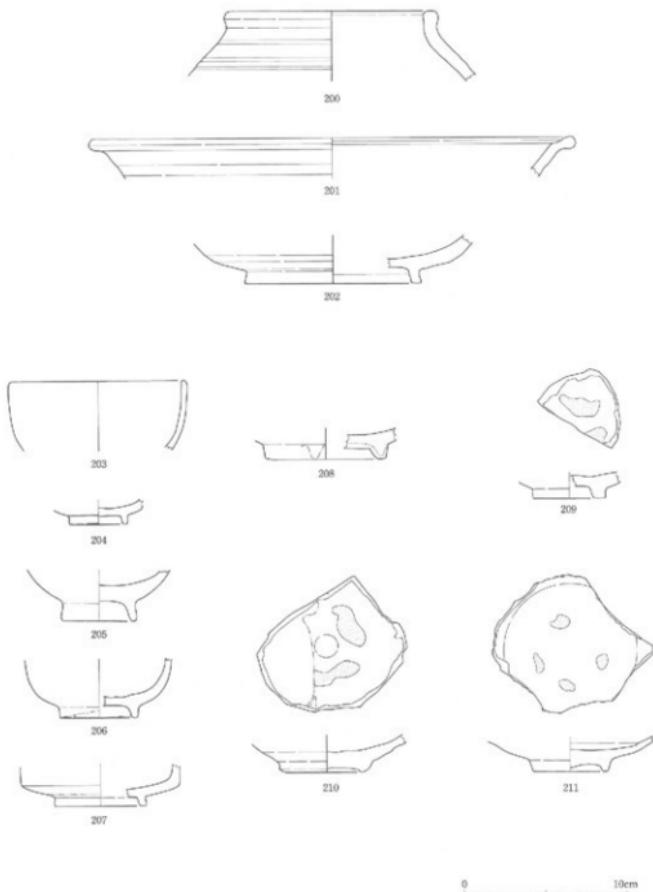
第73図 SD出土土器実測図 (S-1/3)



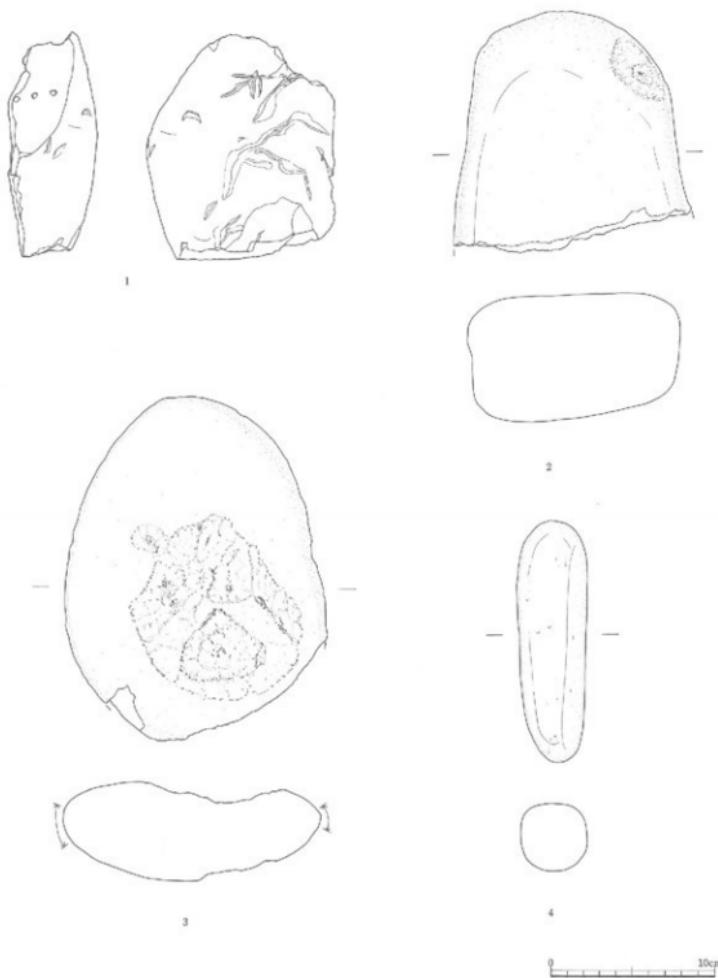
第74図 SD出土土器実測図 (S-1/3)



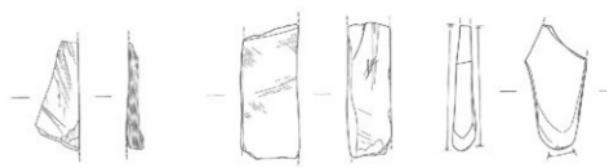
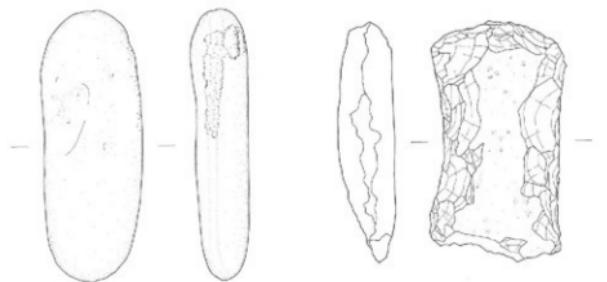
第75図 SD出土土器実測図 (S-1/3)



第76図 SD出土土器実測図 (S=1/3)

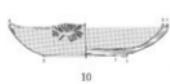


第77図 石製品実測図 (S-1/3)

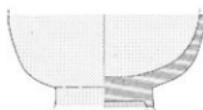


8

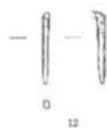
9



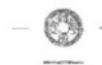
10



11



12



13

0 10cm

第78図 石製品・木製品・鉄製品・錢貨実測図 (S=1/3)

出土土器・陶磁器観察表（器種 土は土器、須は須恵器、陶は陶器、磁は磁器）

No.	出土番号	器種	法量 (mm)		色 調(内) (外)	焼 成	調 整(内) (外)	遺 存	備 考
			口径	底径					
1	SK 6	縄文 底部		90	暗黄褐色 にぶい褐色	良	ナデ、条痕 〃	底部1/4	内面に 煤付着
2	P 7	縄文 底部		108	淡黄褐色 〃	並	不明 不明	底部1/3	
3	P 8	縄文 底部			淡黄色 淡黄褐色	並	不明 不明	底部小片	
4	P 13	縄文 深鉢	287		にぶい橙色 にぶい褐色	良	ナデ、沈線1本 沈線3本	口縁小片	
5	包含縦	縄文 深鉢			にぶい黄褐色 〃	良	ナデ 条痕		
6	SI 1	須 無台环	122	99	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り		
7	SI 1	須 無台环	122		淡黄褐色 灰白ーにぶい橙色	不良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	ほぼ完形	
8	SI 1	土 甕	198		にぶい橙色 橙色	良	カキメ後ヨコナデ ヨコナデ、カキメ後ヨコナデ	口縁1/4	
9	SI 1	土 長胴甕	218		にぶい黄褐色 浅黄褐色	良	ヨコナデ 〃	口縁1/4	工具圧痕
10	SI 1	土 長胴甕	261		褐色 にぶい橙色	良	ヨコナデ、カキメ 〃、〃	口縁小片	
11	SI 1	土 甕	310		にぶい橙色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
12	SI 2	須 蓋	122	26	暗青灰褐色 〃	良	ヨコナデ ヘラ割り後ナデ、ヨコナデ	2/3	
13	SI 2	須 蓋		172	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部小片	
14	SI 2	須 無台环		48	淡赤橙色 青灰ー灰色	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部小片	
15	SI 2	須 無台环	122	92	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	完形	
16	SI 2	須 高环			青灰色 明青灰ー部青灰色	良	ヨコナデ 〃、沈線	脚部のみ	
17	SI 2	上 小型甕		75	橙色 にぶい橙色	良	ヨコナデ ケズリ、ロクロナデ、静止糸切り	2/3	煤付着 海面骨針
18	SI 2	上 長胴甕	230		にぶい橙色 にぶい褐色	良	ヨコナデ、ナデ 〃、カキメ	口縁1/4	煤付着
19	SI 2	上 長胴甕	205		にぶい黄褐色 〃	良	ヨコナデ、タタキ 〃、〃	口縁小片	
20	SI 2	上 長胴甕	216		にぶい黄褐色 浅黄褐色	良	ヨコナデ、ナデ後ヨコナデ、タタキ ヨコナデ、カキメ、タタキ	口縁1/4	
21	SI 2	上 長胴甕	207		橙色 にぶい橙色	良	ヨコナデ、タタキ後ハケメ 〃、タタキ	口縁小片	
22	SI 2	上 長胴甕	216		にぶい橙色 〃	良	カキメ後ナデ、ナデ後カキメ ヨコナデ、カキメ、タタキ	口縁1/2	煤付着
23	SI 3	須 环	170		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	

No.	出土番号	器種	法量 (mm)			色調(内) (外)	焼成	調整 (内) (外)	遺存	備考
			口径	底径	高さ					
24	SI 3	須 有台环		74		褐灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部3/4	
25	SI 3	土 甕	208			にぶい橙色 〃	良	カキメ ヨコナデ	口縁小片	
26	SI 3	上 小型甕	138	74	124	にぶい橙色 〃	良	ヨコナデ 〃、ケズリ、静止糸切口	口縁1/3 底部3/4	
27	SI 4	須 坏	153			灰白色 灰色	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
28	SI 4	須 有台环		96		明青灰色 明青灰～青灰色	良	ヨコナデ後ナデ 〃、ヘラ切り	底部完形	
29	SI 4	土 長刷甕	194			橙色 にぶい橙色	良	ヨコナデ、カキメ後ヨコナデ 〃、〃	口縁小片 煤付着	
30	SI 4	土 長刷甕	210			浅黄橙色 にぶい黄橙～浅黄橙色	並	ヨコナデ、カキメ後ヨコナデ 〃	口縁小片 煤付着	
31	SI 5	須 蓋	155			灰色 〃	良	ヨコナデ ヘラ削り後ヨコナデ、ヨコナデ	3/4	
32	SI 5	須 蓋	172			灰色 〃	良	ヨコナデ ヘラ削り、ヨコナデ	1/4	
33	SI 5	須 环	118			オリーブ灰色 暗灰色	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
34	SI 5	須 有台环	163	108	62	灰白色 〃	良	ヨコナデ ヘラ切り後ナデ	底部1/3	
35	SI 5	須 盤	128	97	19	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	口縁1/2 底部1/2	
36	SI 5	須 短刷甕		62		灰褐色 〃	良	ヨコナデ ヨコナデ、削り、ヘラ切り後ナデ	底部完形	
37	SI 5	土 甕	203			にぶい橙色 橙色	良	ヨコナデ、カキメ 〃、カキメ	口縁小片 煤付着 海面骨針	
38	SI 5	土 長刷甕	230			にぶい橙色 橙～浅黄橙色	良	ヨコナデ、タタキ 〃、〃	口縁小片 肩～底部1/3	煤付着
39	SI 6	土 長刷甕	238			にぶい橙色 橙色	良	ヨコナデ、カキメ 〃、〃	口縁小片	
40	SI 7	須 有台环		72		赤橙色 赤灰色	良	ヨコナデ 〃	底部1/4	
41	SI 7	須 盤	159	124	25	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片 底部小片	
42	SI 7	土 長刷甕	196			にぶい橙色 〃	良	カキメ 〃後削り	口縁小片	
43	SI 7	土 甕	302			にぶい褐色 黒褐色	良	カキメ ヨコナデ	口縁小片 煤付着	
44	SI 8	須 环	132			灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
45	SI 9	須 無台环	117	75	34	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	完形	
46	SI 9	須 高环		256		灰色 灰白色	良	ヨコナデ 〃	端部小片	

No.	出土番号	器種	法量 (mm)		色調(内) (外)	焼成	調 燃 (内) (外)	遺 有	備 考
			口径	底径					
47	SI 9	土 小型甕	130		に赤い黄褐色 灰黄褐色	良	ヨコナデ、カキメ ク、ク、ナデ	口縁3/4	
48	SI 9	土 小型甕	131		に赤い黄褐色 “	良	ヨコナデ、カキメ後ナデ、ナデ ヨコナデ、カキメ後ナデ、ケズリ	口縁1/3	
49	SI10	土 小型甕	130		明褐灰色 “	良	ヨコナデ ク	口縁小片	
50	SI10	土 甕	210		に赤い黄褐色 ク	良	ヨコナデ、カキメ ク、ク	口縁小片	
51	SI10	土 長胴甕	210		明褐灰色 に赤い褐色	良	ヨコナデ、カキメ ク、ク	口縁小片	工具痕 あり
52	SK 1	須 环	132		青灰色 ク	良	ヨコナデ ク	口縁小片	
53	SK 2	須 有台环		92	明青灰色 青灰色	良	ヨコナデ ク	底部小片	
54	SK 3	須 有台环	102	72	42	明青灰色 青灰~部暗灰色	良	ヨコナデ ク、ヘラ切り	口縁2/3 底部ほぼ完形
55	SK 4	須 环	124		明青灰色 ク	良	ヨコナデ ク	口縁小片	
56	SK 4	土 長胴甕	216		浅黄褐色 ク	並	カキメ後ヨコナデ ヨコナデ、カキメ	口縁小片	
57	SK 5	須 盤	164	120	21	灰色 青灰色	良	ヨコナデ ク	口縁小片 底部小片
58	SK 5	土 長胴甕	213		橙~浅黄褐色 橙色	良	ヨコナデ、カキメ ク、カキメ後ヨコナデ	口縁小片	
59	SK 6	須 無台环	126	50	31	灰白色 ク	不良	ヨコナデ ク、ヘラ切り後ナデ	口縁1/4 底部1/2
60	SD 1	須 無台环	120	72	32	灰色 ク	良	ヨコナデ ク	口縁1/2 底部ほぼ完形
61	SD 1	須 無台环	121	70	31	灰白色 ク	不良	ヨコナデ ク、ヘラ切り	口縁小片 底部1/4
62	SD 1	土 高环			橙色 ク	良	不明 不明	脚部のみ	内面に 絞り目
63	SD 1	土 甕	238		に赤い橙色 ク	良	ヨコナデ ク	口縁小片	
64	SD 2	須 無台环	129	88	32	灰白色 ク	良	ヨコナデ ク	口縁1/4 底部1/3
65	SD 2	土 有台环		82		浅黄褐色 ク	良	不明 不明	底部1/2
66	SD 2	土 無台环	120	56	32	浅黄褐色 ク	良	ヨコナデ ク、回転糸切り	口縁1/2 底部完形
67	SD 2	土 無台环	130	50	41	浅黄褐色 ク	良	ヨコナデ ク、回転糸切り	口縁小片 底部1/2
68	SD 4	須 盤	22	118	31	浅黄色 灰白色	並	ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	1/4
69	SD 4	須 蓋	142			灰オリーブ色 青灰色	良	ヨコナデ ク	口縁小片

No.	出土番号	器種	法量 (mm)		色調(内) (外)	焼成	調整(内) (外)	遺存	備考
			口径	底深					
70	SD 4	須 蓋			灰白色 〃	良	ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	縦溝み～全体1/4	
71	SD 4	須 蓋	160	41	灰色 〃	良	ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ		
72	SD 4	須 無台环	124	88	32	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片 底部小片
73	SD 4	須 無台环	115	68	35	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	完形
74	SD 4	須 無台环	120	82	32	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	口縁1/2 底部3/4
75	SD 4	須 無台环	126	78	32	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	口縁小片 底部1/5
76	SD 4	須 無台环	140	102	30	灰白色 〃	やや不良	ヨコナデ 〃	口縁小片 底部小片
77	SD 4	須 無台环		84		乳白色 〃	並	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部1/5
78	SD 4	須 無台环		76		灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部1/4
79	SD 4	須 無台环		88		灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	底部完形
80	SD 4	須 杯	98		オリーブ灰色 灰白色	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
81	SD 4	須 杯	112		灰白色 暗紫灰色	良	ヨコナデ 〃	口縁1/4	
82	SD 4	須 杯	126		灰白色 〃	不良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
83	SD 4	須 杯	138		灰白色 〃	良	ロクロナデ 〃	口縁小片	
84	SD 4	須 杯	136		灰白色 〃	良	ロクロナデ 〃	口縁小片	
85	SD 4	須 有台环	104	47	41	灰白色 〃	不良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	
86	SD 4	須 有台环	104	66	40	灰色 暗灰色	並	ヨコナデ 〃	口縁3/4 底部完形
87	SD 4	須 有台环	126	69	40	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	口縁3/4 底部完形
88	SD 4	須 有台环	128	70	46	灰白色 灰色	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	口縁3/4 底部完形
89	SD 4	須 有台环	132	81	66	灰白色 灰色	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	口縁1/4 底部3/4
90	SD 4	須 盤	158	128	20	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	口縁1/2 底部1/2
91	SD 4	須 盤	160	128	21	灰白色 〃	良	ヨコナデ、ナデ 〃、ヘラ切り	口縁1/4 底部完形
92	SD 4	須 盤	153	112	21	灰白色 〃	良	ヨコナデ、ヨコナデ後ナデ 〃、ナデ、ヘラ切り	口縁1/3 底部1/2

No.	出土番号	器種	法量 (mm)			色 調(内) に赤い褐色	焼 成	網 積 (内) (外)	遺 存	備 考
			口径	底径	高さ					
93	SD 4	土 不明		54		黄褐色 に赤い褐色	良	不明 ヨコナデ	底部1/2	煤付着
94	SD 4	土 無台塊	138	60	30	黒色 淡黄褐色	良	ミガキ 不明	口縁小片 底部ほぼ完形	内黒赤彩
95	SD 4	上 無台塊	140	62	32	黒色 褐色	良	ヨコナデ、ミガキ 〃	口縁1/2 底部ほぼ完形	内黒赤彩 黒斑
96	SD 4	土 無台塊	148	62	37	黒色 に赤い褐色	良	ヨコナデ、ミガキ 〃	口縁1/2 底部1/2	内黒赤彩 黒斑
97	SD 4	土 無台塊	150	62	37	黒色 淡黄色	良	ヨコナデ、ミガキ 〃	口縁小片 底部ほぼ完形	内黒赤彩 黒斑
98	SD 6	須 环	129			灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
99	SD 7	須 有台环		77		灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部1/2	
100	P 1	須 無台环		82		青灰色 〃	並	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部小片	
101	P 2	須 蓋	128		24	明青灰色 明青灰一暗青灰色	良	ヨコナデ後ナデ ヘラケズリ後ヨコナデ	1/4	
102	P 3	上 變	204			に赤い褐色	並	カキメ後ナデ ヨコナデ、カキメ	口縁小片	煤付着
103	P 5	土 甕		78		に赤い褐色 淡黄褐色	並	ヨコナデ 〃、ナデ	底部小片	
104	P 6	須 杯	109			明青灰～暗青灰色 暗青灰色	良	ヨコナデ 〃、後ナデ、ナデ	口縁小片	
105	P 9	須 無台环	113	70	30	青灰色 〃	並	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ	1/4	
106	P 10	須 台付長頭瓶		87		明青灰色 灰～青灰～明青灰色	不良	ヨコナデ 〃、ハケ、ケズリ後タタキ	肩部1/4 底部ほぼ完形	
107	P 11	須 瓶		68		不明 明青灰～暗青灰色	良	不明 ヨコナデ	体部～底部 完形	
108	P 12	須 有台环		114		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部小片	
109	P 14	須 壺か瓶		111		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部小片	
110	P 15	須 耳	125			灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
111	P 16	土 小型甕	110			浅黄褐色 〃	良	ヨコナデ 不明	口縁小片	
112	P 17	土 甕	140			黒色 に赤い褐色	良	ミガキ ヨコナデ	口縁小片	
113	包含層	須 無台环	118	74	35	明青灰色 明青灰～淡青灰色	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	1/2	
114	包含層	須 無台环	128	72	30	灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	口縁小片 底部1/3	
115	包含層	須 环	108			青灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	

No.	出土番号	器種	法量 (mm)		色調(内) (外)	焼成	調整 (内) (外)	遺存	備考
			口径	底径					
116	包含層	須 坏	116		青灰色 〃	不良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
117	包含層	須 坏	124		灰白色 〃	不良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
118	包含層	須 坏	121		灰白色 灰色	良	ヨコナデ 〃	口縁小片	
119	包含層	須 無台坏	86		明青灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部小片	
120	包含層	須 無台坏	68		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部1/4	
121	包含層	須 無台坏	85		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部1/3	
122	包含層	須 有台坏	76		明青灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り	底部小片	
123	包含層	須 有台坏	78		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃、ヘラ切り後ナデ		
124	包含層	須 盤	150	120	19	灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部小片
125	包含層	須 盤		55		灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部1/4
126	包含層	須 盤	104			灰色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片
127	包含層	須 蓋か瓶		138		灰褐色 〃	良	ヨコナデ 〃、ケズリ	底部1/4
128	包含層	上 壇	128			黑色 褐色	良	ヨコナデ、ミガキ 〃	口縁小片 内里赤彩
129	包含層	上 長胴甕	209			に赤い褐色 〃	良	ヨコナデ、カキメ 〃	口縁小片
130	SD 3	須 蓋				灰色 〃	良	ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	1/3
131	SD 3	須 無台坏	113	87	27	灰白色 〃	不良	ヨコナデ 〃	口縁小片 底部小片
132	SD 3	須 瓶		96		灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部小片
133	SD 3	上 有台塊		59		に赤い褐色 〃	良	ヨコナデ ヨコナデ	底部1/2

No.	出土地点	器種	法量 (mm)		釉 著	染付	文様等	產 地	遺 存	備 考
			口径	底径						
134	SD 3	磁 瓶		73		染付		肥 前	口縁小片	
135	SD 3	磁 瓶	80		透 明	染付	草花文	肥 前	口縁1/4	コンニヤク印
136	SD 3	磁 瓶	112			染付	矢羽根文	肥 前	口縁小片	

No.	出土地点	器種	法量 (mm)			釉 色	繪 付	文様等	產 地	遺 存	備 考
			口径	底径	高さ						
137	SD 3	磁 碗			36	透明	染付			底部1/4	
138	SD 3	磁 碗			41	透明			肥 前	底部1/4	
139	SD 3	磁 碗			46		染付	一条網目文	肥 前	底部完形	
140	SD 3	磁 碗			56	透明	染付		肥 前	底部1/3	
141	SD 3	磁 碗		84	30	鉄 軸	染付	染色体文	瀬 戸	底部3/4	
142	SD 3	磁 碗		91	43	63	透明	染付	團鶴	波佐見	1/4 コンニャク印附
143	SD 3	磁 碗		69						底部1/4	西洋コバルト
144	SD 3	磁 碗		84							口縁小片 西洋コバルト
145	SD 3	磁 碗		107							口縁1/4 西洋コバルト
146	SD 3	磁 碗			33					底部1/4	西洋コバルト
147	SD 3	磁 碗			33					底部1/4	西洋コバルト
148	SD 3	磁 碗		63	39	64				口縁1/3 底部1/4	西洋コバルト
149	SD 3	磁 碗			49						底部小片 西洋コバルト
150	SD 3	磁 皿		123		透明	染付				口縁1/4
151	SD 3	磁 皿		124		透明	染付				口縁小片
152	SD 3	磁 皿		136		27	透明	染付	草、雪の輪(内面) 唐草文(外側)	肥 前	口縁小片
153	SD 3	磁 皿		128	73	27				波佐見	口縁小片 蛇の目窓口 底部1/4
154	SD 3	磁 皿		140	92	34			唐草文(内面) 雪竹(外側)		1/3
155	SD 3	陶 碗		96		白みがかった透明		唐草文	肥 前	口縁1/4	
156	SD 3	陶 碗			47					肥 前	底部完形 呂器手茶碗
157	SD 3	陶 碗			39	透明				京、信楽	底部は完形
158	SD 3	陶 碗			41	透明		打ハケ目	肥 前	底部1/2	
159	SD 3	陶 碗		94	38	59	灰 軸	鉄絵		肥 前	口縁小片 底部1/2

No.	出土地点	器種	法量 (cm)			釉 菜	繪 付	文様等	原 地	遺 存	備 考
			口径	底径	器高						
160	SD 3	陶 瓢	89			透 明		打ハケ目、櫛目文 ハケ目	肥 前	口縁小片	
161	SD 3	陶 瓢	97	35	60	透 明		打ハケ目 ハケ目	肥 前	口縁小片 底部小片	
162	SD 3	陶 瓢		46	40	透 明		打ハケ目 ハケ目	肥 前	底部1/2	
163	SD 3	陶 盆		49		铁 轴			肥 前	底部1/2	
164	SD 3	陶 盆		40		灰 軸			肥 前	底部1/4	
165	SD 3	陶 盆		55					肥 前	底部1/2	砂目
166	SD 3	陶 盆		48		灰 軸			肥 前	底部1/2	
167	SD 3	陶 盆		40		銅線軸 透 明			肥 前	底部1/3	蛇の目釉剥ぎ
168	SD 3	陶 盆		36		灰 軸			肥 前	底部1/2	砂目
169	SD 3	陶 盆		45					肥 前 内野山窯	底部定形	砂目
170	SD 3	陶 オリ鉢		97		鐵泥軸			須佐唐津	底部1/4	
171	SD 3	陶 火鉢		160					在 地	底部1/4	
172	SD 3	陶 火入れ	102	70	85	縁がかった灰軸 茶色軸			北九州	口縁1/3 底部小片	
173	SD 3	陶 水入		102					越中瀬戸	底部小片	
174	SD 3	陶 鉢	170			透 明			肥 前	口縁小片	
175	SD 3	陶 瓢	275			鉄軸にワタ灰軸がけ			越 前	口縁小片	
176	SD 3	瓦	厚 200								
177	SD 3	土人形	幅 56								
178	SD 3	重器	46	27	24					完形	灯心油瓶

No.	出土地点	器種	法量 (mm)			色調(内) (外)	焼成	調整(内) (外)	遺存	備考	
			口径	底径	器高						
179	SD 5	須 蓋	157			灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	口縁小片		
180	SD 5	須 坏	122			明オリーブ灰色 オリーブ灰色	やや不良	ヨコナデ 〃	口縁小片		
181	SD 5	須 有台环		83		灰白色 〃	良	ヨコナデ 〃	底部1/4		
182	SD 5	土 甕	198			淡赤橙色 浅黄橙色	良	不明 不明	口縁小片		
183	SD 5	土 不明		60		黑色 淡橙色	良	ミガキ後ナデ ナデ	底部1/3		
No.	出土地点	器種	法量 (mm)			釉 薬	絵 付	文様等	產地	遺存	備考
			口径	底径	器高						
184	SD 5	磁 甕	130							口縁小片	青磁
185	SD 5	磁 紅猪口	52	16	22				肥 前	口縁1/4 底部1/2	
186	SD 5	磁 甕		44				一条網目文 かんじめ文	肥 前	底部1/4	高台無釉
187	SD 5	磁 甕		42					肥 前	底部1/4	コンニャク判
188	SD 5	磁 甕	84	32	44			源氏文 葵文	漸 戸	口縁1/3 底部1/2	
189	SD 5	磁 甕	66							口縁1/4	
190	SD 5	磁 甕		43						底部2/3	側版転写
191	SD 5	磁 甕		34						底部3/4	
192	SD 5	磁 筒形碗	62						肥 前	口縁小片	
193	SD 5	磁 猪口		51				草花文		底部1/4	
194	SD 5	磁 甕		42					肥 前	底部1/3	蛇口釉剥ぎ、 重ね焼き
195	SD 5	磁 甕		50					肥 前	底部小片	
196	SD 5	磁 甕		46					肥 前	底部完形	
197	SD 5	磁 甕	134						肥 前	口縁小片	
198	SD 5	磁 甕	162						肥 前	口縁小片	
199	SD 5	磁 蓋	60					カゴと虫		口縁1/2	
200	SD 5	陶 甕	120			褐灰色 にぶい橙色	良	ナデ		口縁小片	

No.	出土地点	器種	法量 (mm)		軸 軸	松 木	文様等	產 地	遺 存	備 考
			口徑	底径						
201	SD 5	陶 鉢	294		鉄 軸			肥 前	口縫小片	
202	SD 5	陶 有台鉢		106					底部小片	
203	SD 5	陶 瓢	106		綠 軸 灰 軸			再興丸谷	口縫小片	
204	SD 5	陶 瓢		35					底部1/2	
205	SD 5	陶 瓢		44				肥 前		只器手茶碗
206	SD 5	陶 瓢		48	鉄 軸 透 明			肥 前	底部1/2	
207	SD 5	陶 筒形碗		56	灰 軸			京、信楽	底部1/4	
208	SD 5	陶 有台皿		74				肥 前	底部小片	
209	SD 5	陶 有台皿		45	灰 軸			肥 前	底部1/2	砂目
210	SD 5	陶 有台皿		46	灰 軸			肥 前	底部完形	砂目
211	SD 5	陶 有台皿		46				肥 前	底部完形 内野山墓	砂目

石器觀察表

No.	出土地点	種別	法 量 (mm, g)				石質及び備考
			長	幅	厚	重量	
1	SI 5	袖石	141	117	51	1,064.60	火山巖凝灰岩
2	SI 6	袖石	150	147	83	2,635.80	テラリウム質火山巖凝灰岩
3	SK 4	石墨か	214	162	64	2,257.90	火山巖凝灰岩
4	包含層	敲石	151	44	45	448.1	安山岩
5	P 4	敲石	170	62	35	546.5	安山岩
6	SD 5	打製石斧	150	80	35	608.7	テラリウム質火山巖凝灰岩
7	SD 3	砥石	68	27	11	13.6	鳴瀬産
8	SD 3	砥石	84	36	27	142	流紋岩質凝灰岩
9	SD 3	砥石	76	38	14	38	風化礫を使用

木器觀察表

No.	出土地点	種別	法 量 (mm, g)				備 考
			口徑	底径	器高	重量	
1	SD 3	櫛					
2	SD 3	櫛					

金属器觀察表

No.	出土地点	種別	法 量 (mm, g)				備 考
			長	幅	厚	重量	
1	SI 5	鉄鍔				1.7	
2	SD 3	貨幣				2.2	材質: 銅

## 第4節　まとめ

今回の調査で8世紀後半を主体とする竪穴建物10棟と掘立柱建物2棟を検出し、複数の竪穴建物が集中するグループを2カ所見ることができる。うち、S I 3～S I 6は切り合いをもち、これは1棟の竪穴が建て替えられたためである。S I 2は他の竪穴と切り合ってはいないが、S I 4と規模、カマドの配置などに共通点を見いだすことができ、立て替えて隣に移動した可能性がある。S I 6は今回確認した竪穴と主軸が異なり、カマドの位置もS I 6のみ北東隅で、他の竪穴とは明らかにタイプが違う。切り合いをもつ竪穴群は新しくなるにつれ規模が縮小する。最も新しいS I 5は面積が約5.76m<sup>2</sup>と居住には狭いが、カマドを東南隅に有していることから炊事場としての機能をもっていたと思われる。また、S I 3～S I 6と重複してS B 2が確認されている。S B 2は切り合いから竪穴終了後に構築されたことが分かっており、竪穴建物から掘立柱建物への移行が遺構から読み取れる。原因は明確ではないが、この場所に固執して建物を構築する様子が見て取れる。このような建物の集中域は栗田遺跡で平均約150mを測り、これが計画的な土地利用に基づいているのか周辺遺跡の調査をからめて考えなければいけない。

S I 1、S I 7はカマドをもたない竪穴建物で、建物群のブロックに属さず単独で構築されている。このようなタイプは県理文協が調査した栗田遺跡からも検出されている。S I 1は面積約5.52m<sup>2</sup>、S I 7は面積約4.0m<sup>2</sup>と極めて規模が小さく、出土遺物は須恵器など土器類がほとんどである。規模が小型のため単機能による性格をもつ。カマドは存在しないため炊事場とは考えられず、S I 1は畠溝の中に存在することから畠畑作業の倉庫か作業場のような施設と仮定したい。

竪穴建物の周囲にはピットや溝が無数に掘られている。調査区西側S I 1の周囲には畠溝が走っている。溝は約3～10mの長さをもち、不規則につらなる。このエリアは耕作地となり、これより西方S D 1やS D 2を境に畠溝は途絶える。S D 1やS D 2はこれより西側が鞍部となり落ち込んでいくことから耕作地の範囲を示す区画や排水の機能をもった溝と思われる。C区からE区にかけて見つかったS D 8は一部途切れるもののB区とE区の遺物群を結ぶように走る。この溝に対してA区畠溝やS D 6とは直行し、竪穴建物や掘立柱建物の軸とほぼ同一方向を示す。溝内から遺物はほとんど出土しないが、竪穴建物や掘立柱建物と規格性をもつことから同時期のものと考えられる。

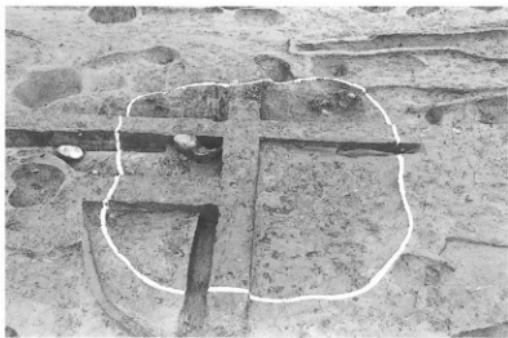
ピットは調査区の全域から検出した。また、A区S D 1、S D 2近辺、B区竪穴群北側、C区南側一帯、E区北側一帯はピットの集中する箇所である。しかし、ピットの配置は無作為で、形状や深さも均一しない。集中するには何らかの機能的事物があったと思われるが、遺物がほとんど見られないため性格は分からず。

栗田遺跡はこれまでの調査成果から竪穴建物や掘立柱建物が集中する集落域が点在し、その周囲には畠溝などの耕作地が存在するといった現在の散居村のような風景を見ることができた。県理文協の調査でも確認されていたことだが、今回はこれを更に拡大した形でおさえることができた。

## 参考文献

- |        |      |               |                  |
|--------|------|---------------|------------------|
| 小島芳孝ほか | 1991 | 『栗田遺跡発掘調査報告書』 | 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 |
| 金山弘明   | 1994 | 『松任市北安山北遺跡I』  | 松任市教育委員会         |
| 木田 清   | 1989 | 『松任市中村ゴウデン遺跡』 | 松任市教育委員会         |

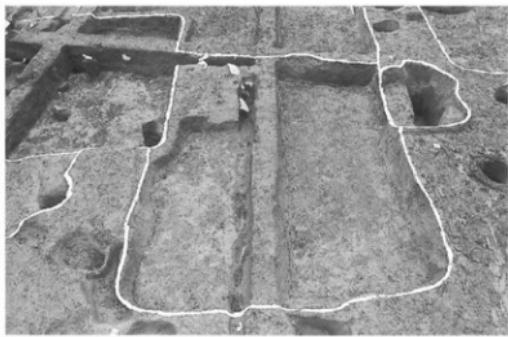




A区 S11



B区 S12



B区 S13



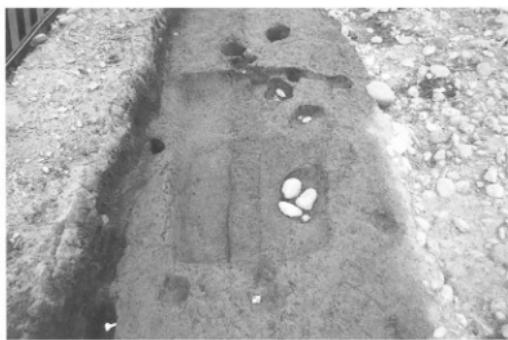
B区 SI4



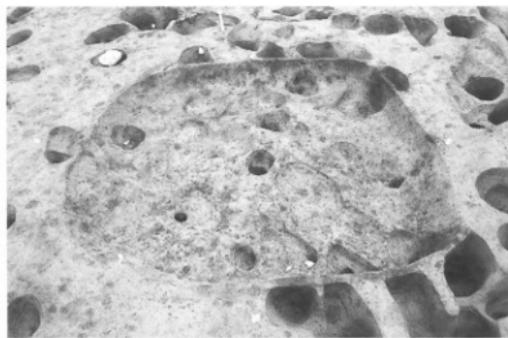
B区 SI5



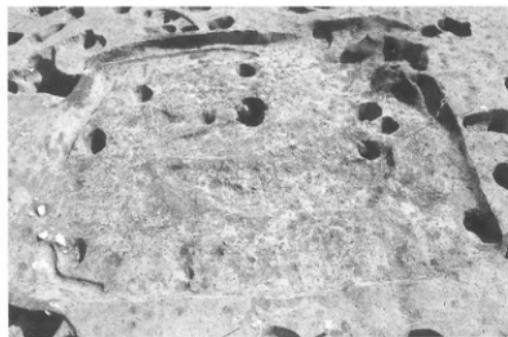
B区 SI5・SI6



C区 S17



E区 S18



E区 S19



E区 SD10



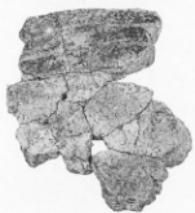
B区 SD3



D区 SD8



1



4



2



5



3



6



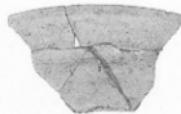
12



7



13



8



14



9



15



10



16



11



17



18



21



19



22



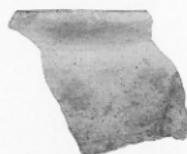
20



23



24



29



25



30



26



31



27



32



28



33



34



35



40



36



41



37



42



38



43



44



39



45



46



53



47



54



48



55



49



50



56



51



57



52



58



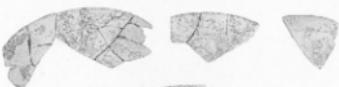
59



60



61



63



64



65

62



66



67



68



69



75



70



76



71



77



72



78



73



79



74



80



81



88



82



89



83



84



90



85



91



86



92



87



93



94



102



95



103



104



96



105



97



106



98



99



107



100



101



108



109



115



110



116



111



117



112



118



113



119



114



120



121



122



128



123



129



124



130



125



131



132



139



133



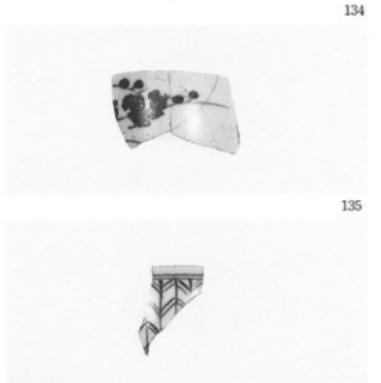
140



134



141



135



142



137



138



143



144



150



151



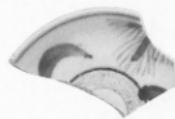
145



152



146



153



147



148



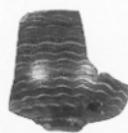
149



154



155



161



156



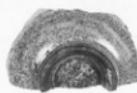
162



157



163



158



164



159



165



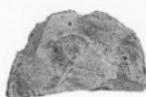
160



166



167



168



172



169

173



170

174



171

175



176



177



183



178



184



179



185



180



186



181



187



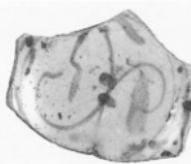
182



188



189



196



190



197



191



198



192



193



199



194



200



195



201



202



208



203



209



204



205



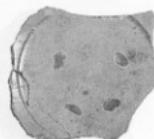
210



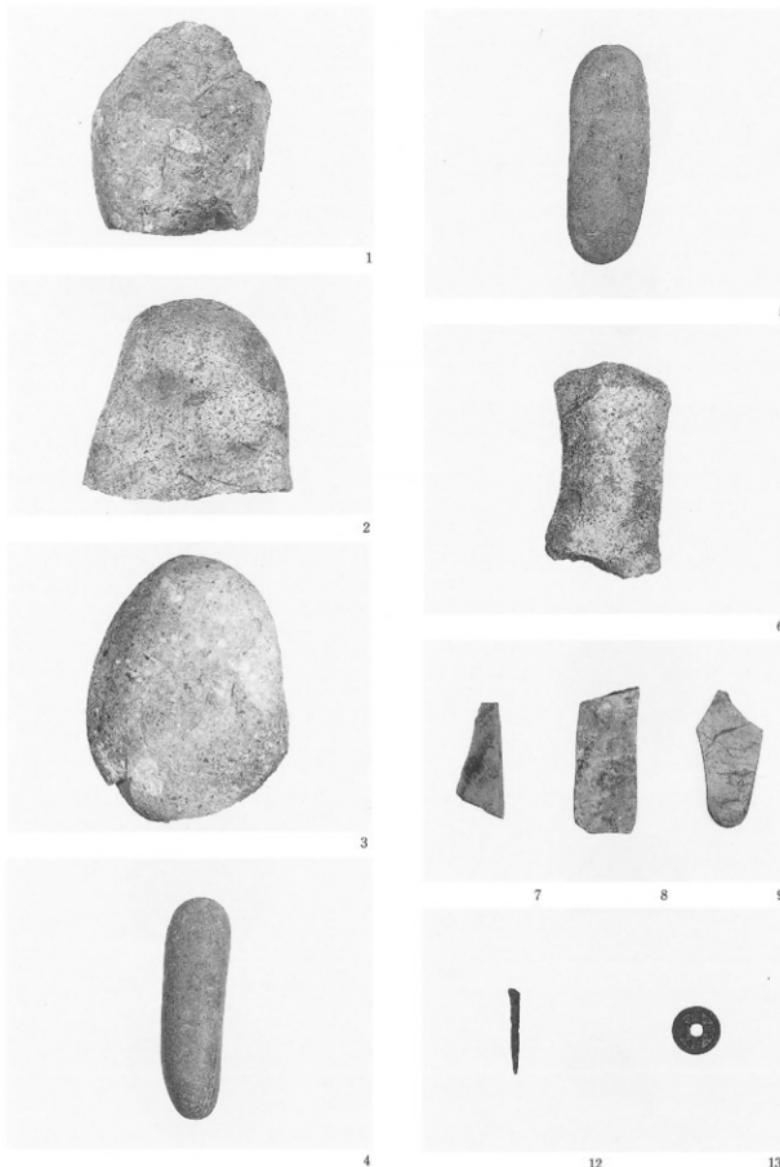
206



207



211

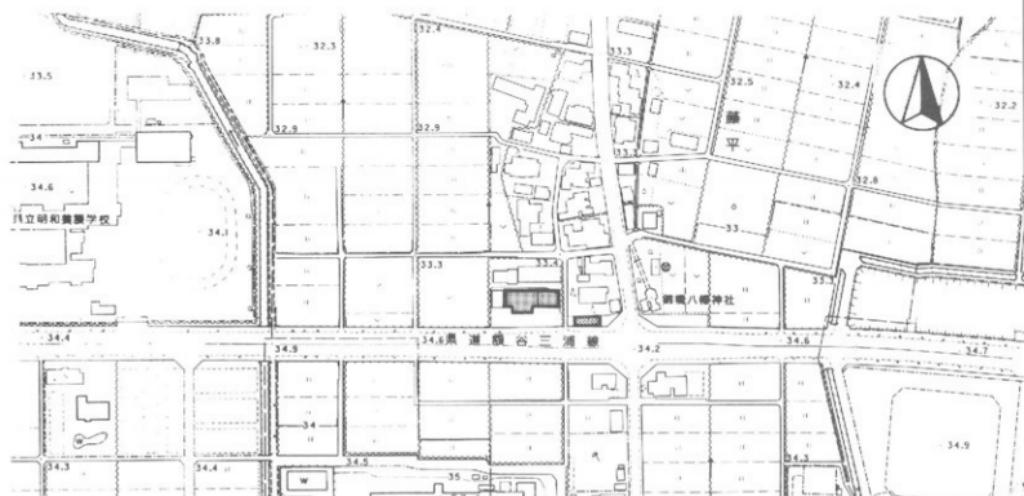


## 第4章 粟田遺跡藤平地区 (農産加工場及び交番施設建設に伴う発掘調査)

### 第1節 調査の経緯と経過

平成6年暮れ、地元農家から藤平の集落の外れに農産加工場兼店舗建設依頼の打診があった。工場建設用地は前章で報告した調査区の北隣になることから遺跡が工場予定地まで伸びることがほぼ確実とされた。そこで、町教育委員会は地元農家と協議し、発掘調査を実施することを合意。平成7年4月に工場建設予定面積約450m<sup>2</sup>を調査した。

また、この農産加工場の調査終了後、本地より東隣で交番施設の建設計画がもちあがった。窓口となる野々市町総務課と協議を行い、平成8年7月に建造物範囲となる約150m<sup>2</sup>を発掘調査した。



第79図 調査区図 (1/2,500)

### 第2節 遺構と遺物 (農産加工場兼店舗)

#### 遺構

##### S K 1 (第80、81図)

1辺約160cmの隅丸方形をしており、深さは約50cmを測る。内部には2段のテラスをもつ。1段目と2段目のテラスの間から弥生前期後半の甕の破片が散らばるように出土した。また、土器の出土した覆土には細かい炭粒が混入していた。

#### S D 1

調査区西端をN24°Wで走る溝である。幅約50cm、深さは地山から約15cmで南方はやや蛇行し、溝内にはピットが掘られる。前章で報告したS D 1の延長になると思われる。

#### S D 2

S D 1の東隣を併走する。幅約80cm、深さ地山から約15cmで、調査区途中で確認できなくなる。覆土は淡灰色粘質土で包含層の褐色粘質土を掘り込んでいることから中世まで下る可能性をもつが、遺物は出土しないため詳細は分からない。前章のS D 2と同じ溝である。

#### S D 3

調査区の中央を北東一南西間に横断する。角度はN52°Eで幅約50cm、深さ地山から約30cmで南西から北東に向かって低くなっている。覆土はS D 2と同じ淡灰色粘質土で同時期になると思われる。遺物は出土していない。

#### S D 4

調査区東端で確認した南北溝である。幅約4m前後、深さは地山から約25cmで、堆積上に砂が錯綜しながら埋まっており流水していたことが伺える。覆土内には近世陶磁器や、キセルなどが点在しながら出土する。前章のS D 3に続く溝である。

#### 歓 溝

調査区東寄りに南北に走る溝群が認められる。1本の溝幅は30~50cm、深さは5~10cmで覆土は褐色粘質土である。溝と溝の間は幅約30~100cmで、平均60~70cmとなり、畑の歓溝と考えられる。検出した歓溝の中央は約3m程途切れた状態となっており、畑地と畑地の境界にあたると思われる。遺物は確認していないが、周辺の調査成果から古代と想定される。

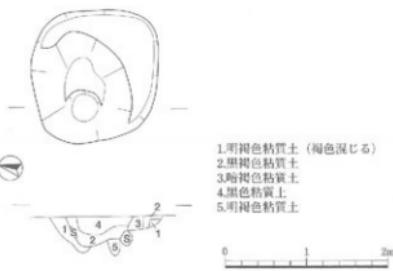
#### 遺 物

実測できた遺物を出土した遺構はS K 1とS D 4のみである。S K 1から出土した遺物は小片を含めて3個体分の甕となる。1と2は同一と思われる。何れも小片のため径を出すことはできなかった。口縁端部に2ないし3条の指沈線文がめぐる。3と4も同一である。口縁部は平縁で外面には斜条痕がはいる。底部外面には網代压痕が見られる。5は大型の甕で口縁端部は指押圧が施される。外面口縁部、内面体部にススが付着する。1~5は弥生時代前期に位置付けられる。

6~19の土器・陶磁器はS D 4から、20~22は包含層からの出土である。詳細は130ページ出土遺物観察表を参照していただき、ここでは時期を述べたい。20は16世紀末~17世紀初頭、22は17世紀代、16~18は17世紀前半、11~12・13は17世紀前半、17~19は17世紀後半~18世紀前半、8は18世紀代、7・9・15は18世紀前半、21は19世紀代、10~14は近代である。

#### 参考文献

「八田中遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター 1988  
吉岡康暢 「弥生・古墳時代の土器編年」 『日本海域の土器・陶磁器(古代編)』 六興出版 1991



第80図 SK1 平面図、断面図 (S-1/60)



加工場調査区全景（南東から）



同調査区全景（北西から）



同調査区SK1



同調査区SK1 土器出土状況

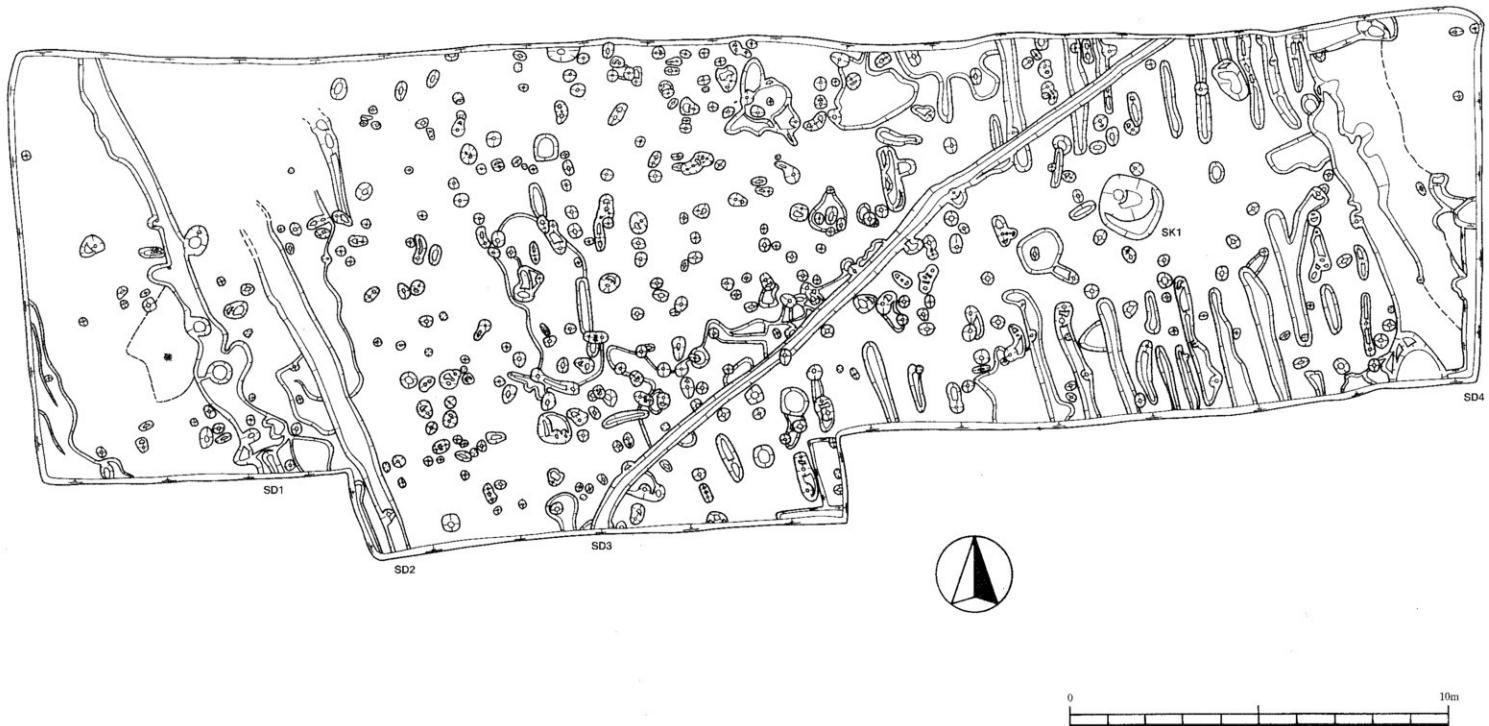


同調査区SD4



交番施設調査区全景





第81图 塑壳加工厂油库区设施全貌图(1/100)

### 第3節 遺構と遺物（野々市市南交番）

#### 遺構

##### S K 1

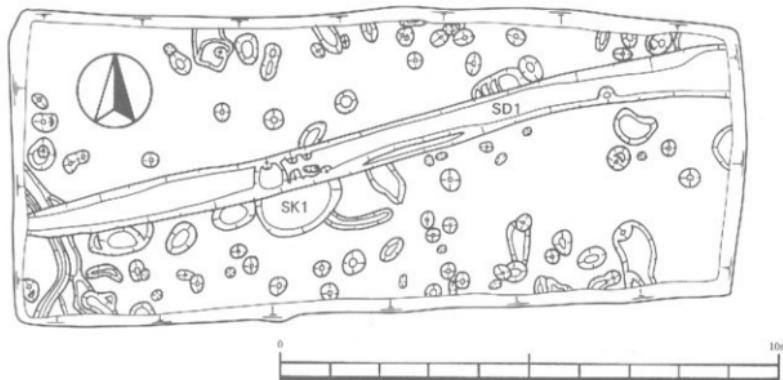
調査区中央やや西寄りでSD1に切られる形で検出された。直径約180cm、地山からの深さは約14cmである。遺物は須恵器が1点出土している。

##### SD 1

調査区の真ん中を東西方向に走る溝である。幅約50~100cm、深さ地山から約2~22cmである。遺物は出土していない。覆土は淡灰色粘質上で他の遺構を切っており、古代以降と思われる。農産加工場調査のSD2・SD3と同時期になるかは不明である。

#### 遺物

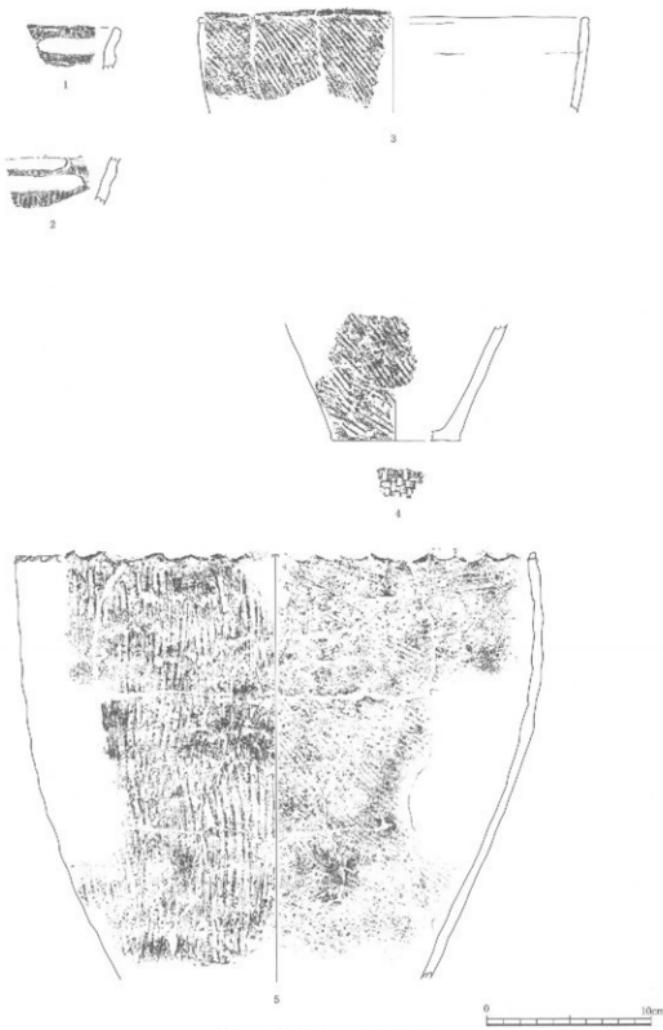
須恵器を2点確認している。1点はSK1からの出土で須恵器の貯蔵具であるが底部のみの出土であるため器種は不明である。内外面の一部に釉が掛かっており、底部内外面に指頭圧痕が見られる。もう1点は包含層からの出土で須恵器の壺の口縁で辰口産である。小片のため詳細は不明である。



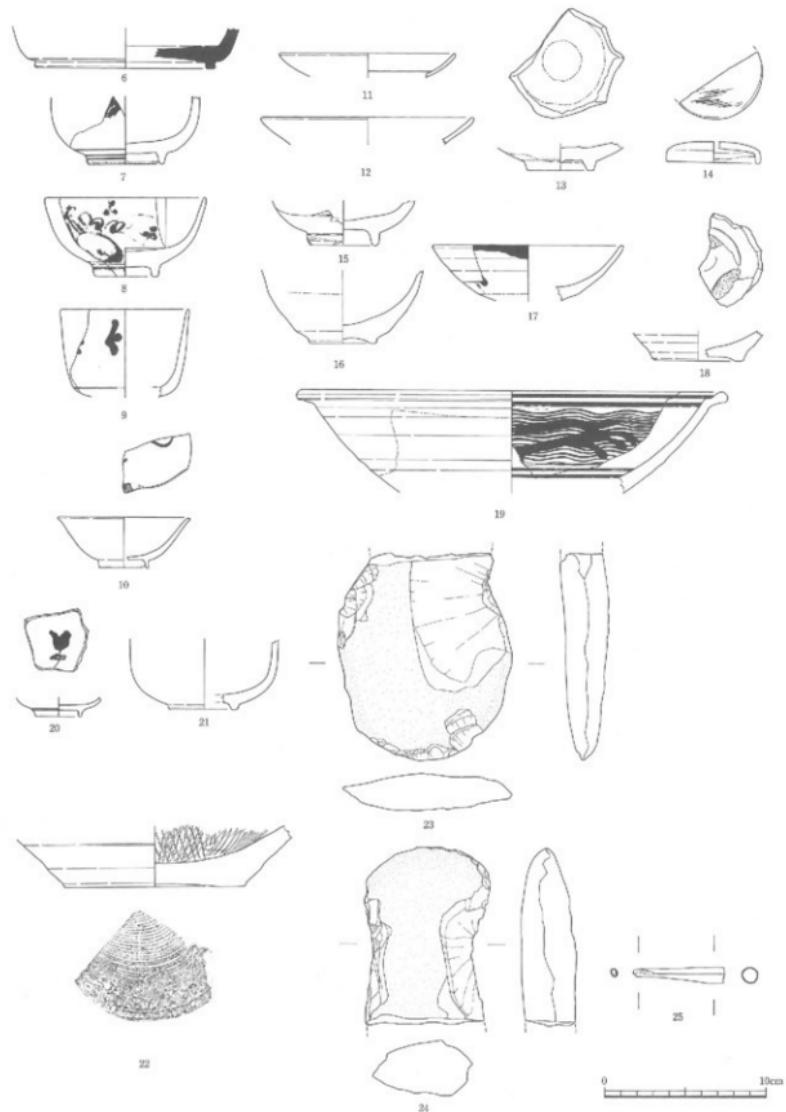
第82図 遺構全体図 (1/100)



第83図 交番施設出土土器実測図 (S-1/3)



第84図 SK出土土器実測図 (S=1/3)



第85圖 SD、包含解出土器、石製品、銅製品實測圖 (S-1/3)

出土遺物観察表  
土器

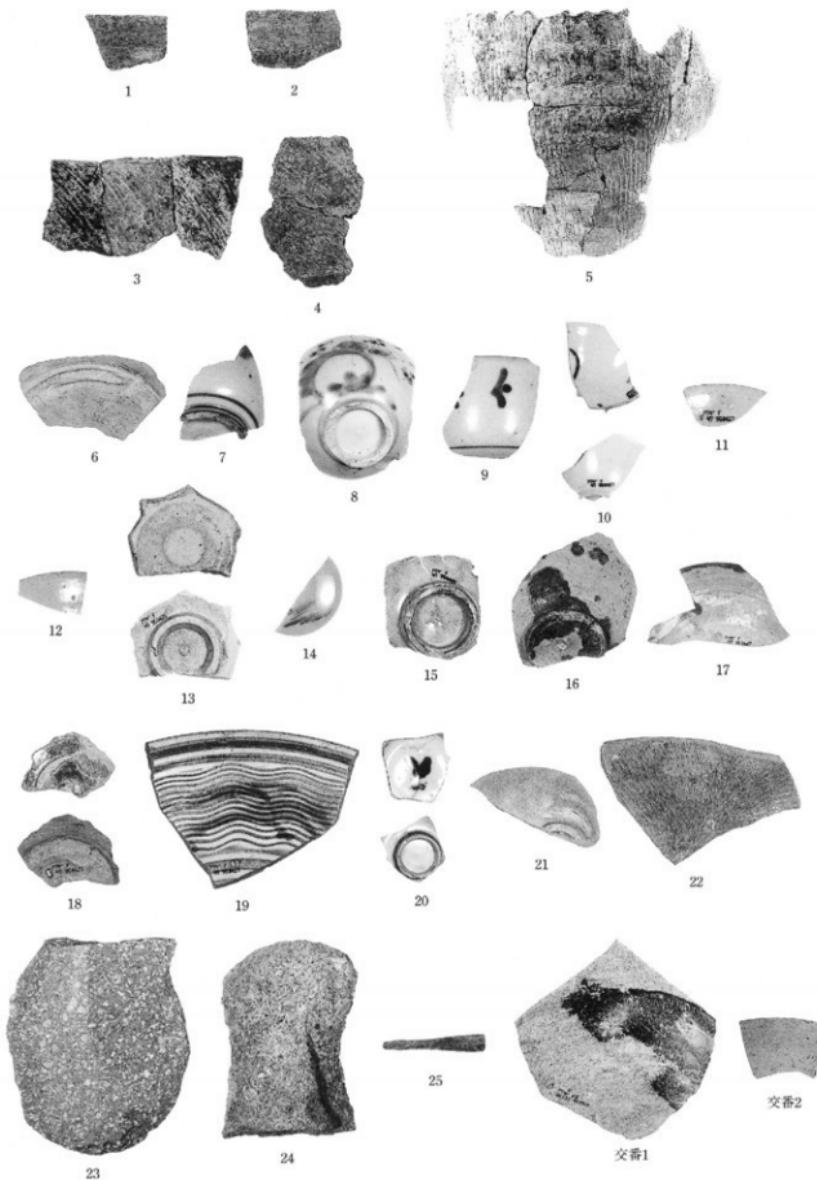
No.	出土地点	器種	法量 (mm)			色調(内) (外)	焼成	調査(内) (外)	遺存	備考
			口径	底径	高さ					
1	SK 1	甕				にぶい黄褐色 “	良	条痕 ナデ	口縁小片	
2	SK 1	甕				にぶい黄褐色 “	良	条痕 ナデ	口縁小片	
3	SK 1	甕	238			にぶい黄褐色 “	良	ナデ 条痕	口縁小片	
4	SK 1	甕		80		にぶい黄褐色 “	良	ナデ 条痕	口縁小片 底部網代 柱痕	
5	SK 1	甕	320			灰黃褐色 灰黄色	良	ナデ		
6	SD 4	須恵器 有台环		110		灰色 “	良	ロクロナデ “ ,ナデ	底部1/4	

電磁器(陶は陶器、磁は磁器である)

No.	出土地点	器種	法量 (mm)			輪 塗	松 付	文様等	所 地	道 存	備 考
			口径	底径	高さ						
7	SD 4	磁 瓶		46		透明釉	染 付			底部1/4	コンニャク印判
8	SD 4	磁 瓶	98	38	49	透明釉	染 付	梅岩文	肥 前	口縁1/4 底部1/3	
9	SD 4	磁 瓶	80			透明釉	染 付			口縁小片	
10	SD 4	磁 酒杯	80	30	32	透明釉	色 染				
11	SD 4	磁 皿	108			透明釉				口縁小片	
12	SD 4	磁 皿	130			透明釉				口縁小片	
13	SD 4	磁 皿		47			染 付		肥 前	底部2/3	蛇の目釉剥ぎ
14	SD 4	青磁 合子		58	13					1/2	
15	SD 4	陶 瓢		42		灰 稲	染 付			底部充形	
16	SD 4	陶 瓢		41		灰 稲			唐 津	底部2/3	
17	SD 4	陶 皿	118			銅錫釉			肥 前	口縁小片	蛇の目釉剥ぎ
18	SD 4	陶 皿		54		灰 稲			唐 津	底部1/3	砂目
19	SD 4	陶 平鉢	260						唐 津	口縁小片	外周埋付着
20	包含層	磁 小环		28		透明釉	染 付		中 国 景德鎮	底部充形	
21	包含層	陶 瓢		42		灰 稲				底部小片	
22	包含層	陶 すり鉢		110					肥 前	底部1/4	底部糸切り痕

石器・金属器観察表

No.	出土地点	器種	法量 (mm, g)			石 質 等
			長さ	幅	厚さ	
23	包含層	打製石斧	112	77	34	358.3 テーパー質火山峰巣灰岩
24	包含層	打製石斧	128	107	27	472.6 ヒロノ(安山岩)
25	SD 4	漆管	56		3.7	





# 清金アガトウ遺跡



## 第5章 清金アガトウ遺跡

### 第1節 遺跡の概要

#### 第1項 遺跡の立地

清金アガトウ遺跡は標高33~35mの手取川扇状地扇央部に立地し、東西200m、南北350mの範囲が推定されている。本遺跡の南方、標高40m以上の上流では、手取川から派生する河川間を帯状に連なる島状の地形が発達する。本遺跡の周辺でも河川から更に分岐する旧河道間に南北帶の島状微高地が形成される地勢を示している。

本遺跡は石川県立埋蔵文化財センター、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が昭和63年~平成2年にかけて国道157号線(鶴来バイパス)道路工事に伴って初めて発掘調査が実施された(第2図参照)。調査面積は約19,000m<sup>2</sup>で、今回実施した調査地から西方約200mに位置する。この国道工事に伴う調査では、古代~中世の集落跡が確認されている。古代は15棟の竪穴建物や5棟以上の掘立柱建物が検出されており、8~9世紀が中心となる。中世は土坑や溝が確認され、13世紀後半の土坑から鉢すきが2点、土師器の皿や椀とともに出土している。また、打製石斧が遺物包含層から30点余り出土しており、もう一時期古い時代の面が存在すると思われるが、上器がほとんど出土していないため、詳細な時期決定は確定していない。

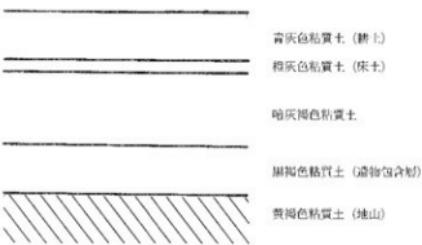
今回の発掘調査も道路工事に先がけて実施されており、事前の試掘調査で発見された。この試掘調査の結果、今回の発掘調査地の西方の地山が極端に低くなっていくことが判明し、本調査地と石川県が実施した調査地との間(中宮神社付近)には小河川が南北に走っていることが認められた。

これは小河川が何本も流れ形成された島状微高地の上にいくつかの小集落が展開されていたことを示す。

今回の調査地は東と西の端がそれぞれ谷地となって落ち込んでいくことから、東西約100m余ある調査範囲が複数根の幅となって、南北に広がる形状になると思われる。

#### 第2項 基本土層(第1図)

本遺跡の層序は比較的単純である。青灰色粘質土の耕作土が約15~20cm全体を覆い、すぐ下には耕作土の床とと思われる鉄分混じりの橙灰色粘質土が5cm程堆積する。その下は中世から近代にかけての耕作土と思われる暗灰褐色粘質土が約20~30cmの厚さで堆積している。更に下には遺物を若干含む黒褐色粘質土が20cm程続き、黄褐色粘質上の地山へと至る。地山の土は谷地になって落ち込んでいくにつれ色は淡くなり、シルト質が強くなる。



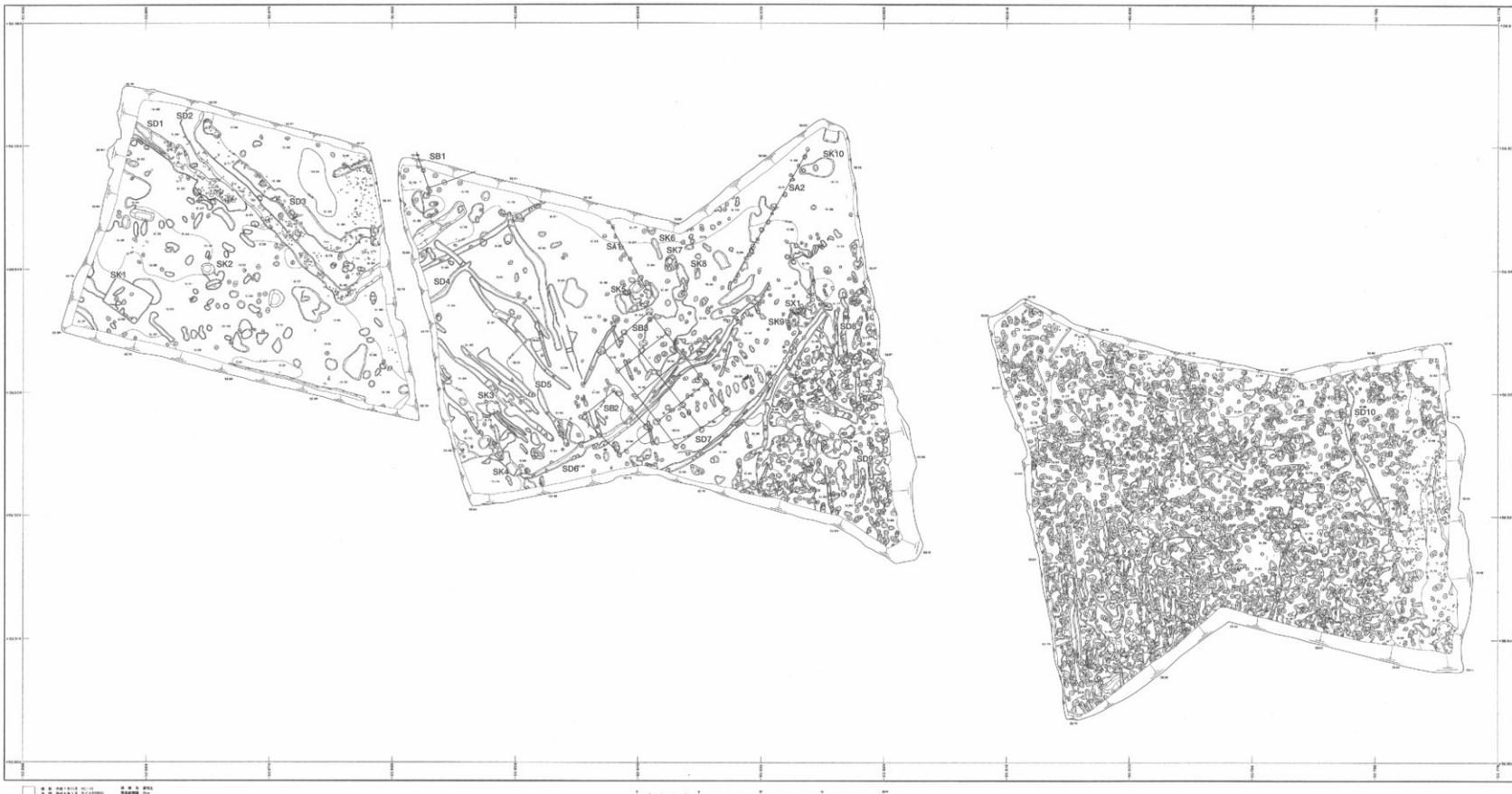
第1図 土層断面図(S-1/20)



第2図 清金アガトウ道路調査区図 (S=1/5000)

### 第3項 調査の概要（第2図）

本遺跡の発掘調査は都市計画道路の工事に先立つものである。道路は金沢市額谷町と松任市中奥町との間を結ぶ計画となっており、調査地は東西に細長い区域となっている。調査区は南北約20m、東西約110mで、水田の用水や上清金と下清金の集落を結ぶ道路が間を横断するため、3ヶ所に区分した。そこで、3ヶ所の調査区を西からそれぞれA区・B区・C区と呼称して説明することとする。



第3図 遺構全体図

## 第2節 遺構

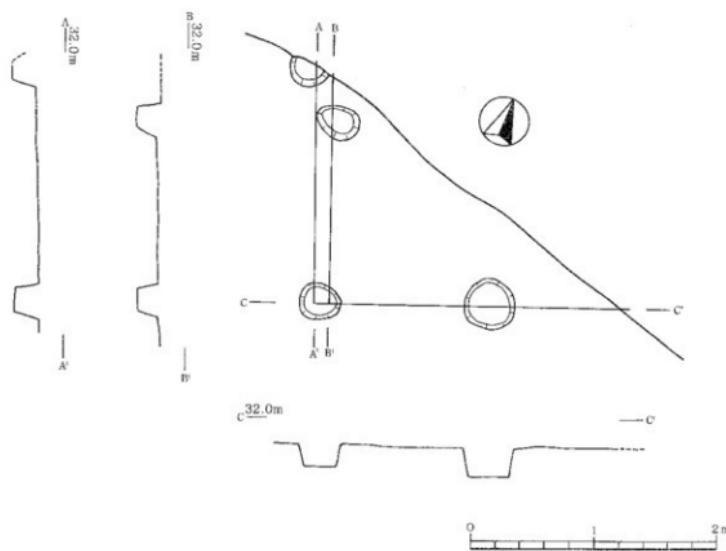
### 第1項 堀立柱建物

S B 1 (第4図 図版二)

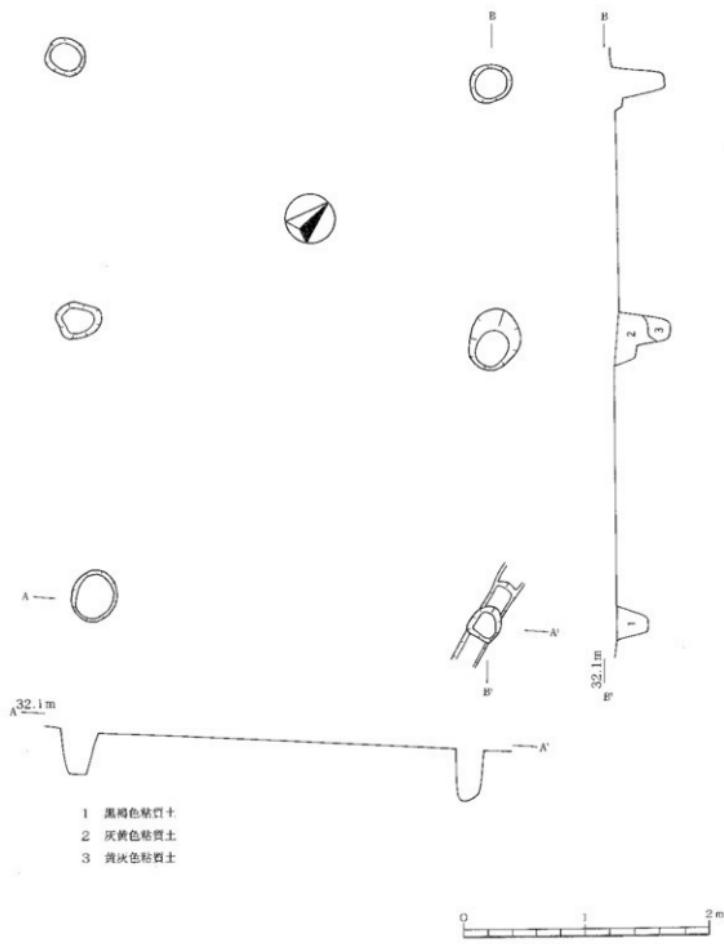
1.5m以上×2.3m以上 (1間以上×1間以上) の建物で、磁北から16°西にふれている。B調査区の北端に位置し、建物のほとんどは調査区の外へ伸びる。柱穴はいずれも円形で、直径が約30~40cm、深さが地山から約15~20cmを数える。柱間は南北が約120cm、東西約180cmを測る。南北ラインに向方に柱穴があり、建て替えがおこなわれたと思われる。

S B 2 (第5図 図版二)

B調査区の中央南寄りで確認された建物である。4.5m×3.3m (2間×1間) の側柱建物で、若干歪な形状となっている。桁行は北西一南東を向き、磁北から44°西に触れる。柱間は桁行が220cm前後である。柱穴は一部不定形をもつ円形が主体をなす。直径は約25~50cmで、平均約30cmのものが多い。深さはいずれも約30~40cm前後である。



第4図 B区 SB1 火薬図 (S=1/40)



第5図 B区 SB2 実測図 (S=1/40)

### S B 3 (第6、7図 図版二)

B調査区S B 2の東隣で検出した10m×5m (4間×2間) の総柱建物である。桁行は北西—南東方向を向き、磁北から38°西へ傾く。柱間は桁行、梁行とも約250cmである。柱穴はやや不定形な円形をしており、直径約30~50cmを測る。深さは地山から平均約40cmで、浅い箇所は約20cm、最深部は約70cmとなる。建物角にあたる柱穴は深くなる傾向をもつが、C-C'ラインの柱列の穴は比較的に浅い。柱根は遺存していないが、土層断面から直径約10cmの柱痕跡を確認することができた。

### 第2項 桁列

#### S A 1 (第3、30、35図)

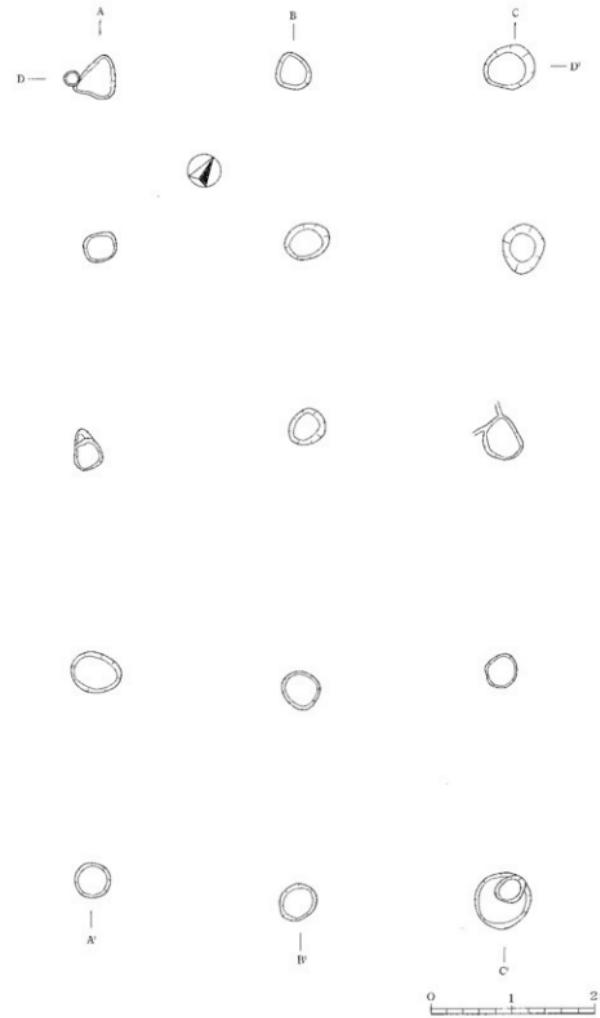
B調査区中央北寄りで確認された。直径約30~50cm、深さ地山から約15~25cmのピットが列をなして並ぶ。ピットとピットの間隔は約30~70cmと均一にはならない。北西—東南を向き、磁北より32°西に傾く。北西端は調査区外へ延び、東南端はS B 3の手前でとまる。調査区内においての長さは約5.5mである。

#### S A 2 (第3、31、36図)

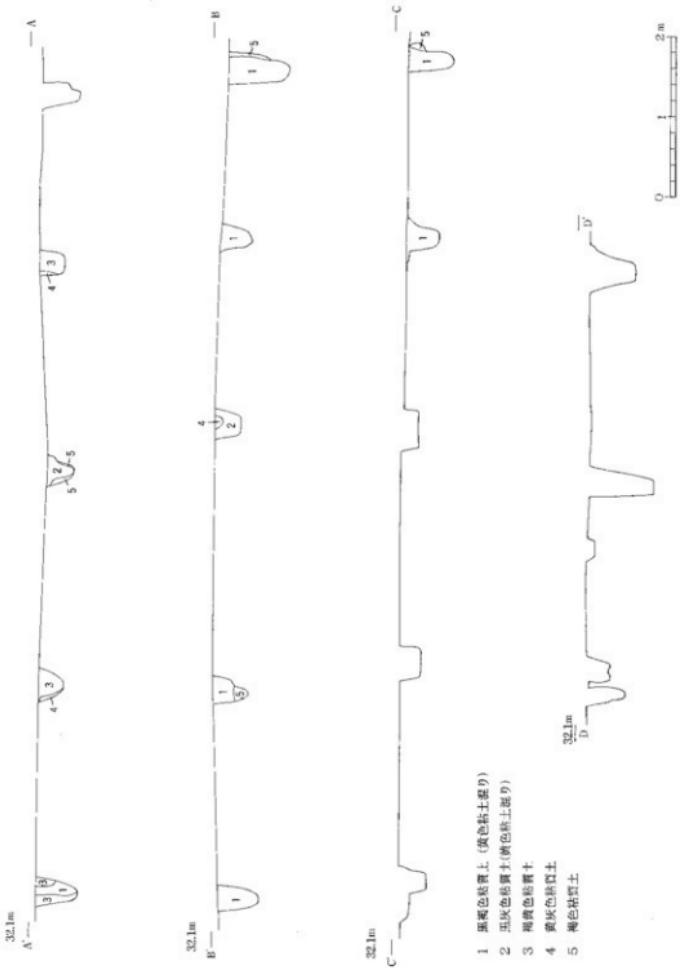
B調査区北東側で検出された。北東—南西を向き、磁北から29°東に触れる。ピットの並びはS A 1よりも直線的で整然とする。ピットは直径約20~50cmでやや不定形な円形をしており、深さは地山から約10~20cmと比較的浅い。また、ピットとピットの間隔は隣り合わせのものから約1m離れるものなど均一しない。後述する道路状遺構の溝が途切れる地点から並び始まる。全長約12mで、柵列ラインに乗ってくるP 3からは石皿の破片が出土している(第25図 6、図版六)。

### 第3項 道路状遺構 (第8、35、36、41、42図 図版四)

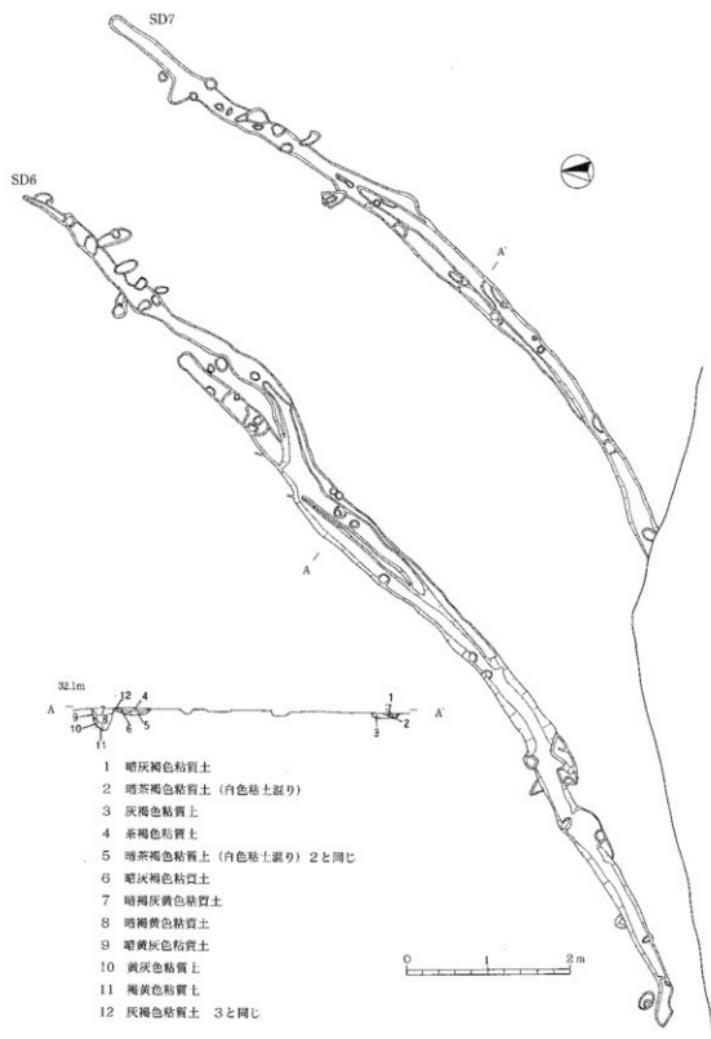
B調査区を北東—南西方向で平行に走る2条の溝、S D 6とS D 7は道路状遺構の側溝と考えられる。路面の幅は約3.5m、硬化面は認められなかった。路面内に長めのピットが東西方向に列を數いて並んでいるが、青灰色粘質土の覆土のため現在の水耕作に伴う穴と思われる。S D 6は幅約50~70cm、長さ約25mを測る。地山面からの深さは約15~20cm、北東から南西に向かって徐々に低くなる傾向であるが顕著ではない。図示はしていないが9世紀後半の須恵器蓋や鉄滓が出土している。S D 7は全長約19mで、南方は調査区外にのびる。幅約50~80cm、地山面からの深さは約10~15cmである。底のレベルはほぼ均一で高低差は見られない。須恵器、土師器の小片が確認された。いずれの溝も掘直しの痕跡が見られ、道の幅は変えず、やや東南に位置をずらしている。両者の溝の北東端は同じ箇所で途切れ、その先には溝と平行になるようにS A 2のがびていく。



第6図 B区 SB3 実測図 (S=1/60)



第7図 BK SB3 土壌断面図 (S=1/60)



第8図 B区 道路状遺構(SD6, SD7) 実測図 (S=1/60)

#### 第4項 土 坑

##### S K 1 (第9、32、33図 図版二)

A区西南隅にある1辺約2.5m×3.3mの長方形プランの土坑である。深さは地山から10cm足らずで、覆土は黒灰色粘質土の1層のみである。内部には深さ5cm程度の不定型なピットがいくつか掘られている。豊穴建物の可能性があるが、遺物は皆無で詳細はよくわからない。S K 1周辺は地山が徐々に深くなっている、從来の造構面は地山より上面にあったと思われるが、地山直上まで重機による掘削を行ったので、削平してしまった可能性がある。

##### S K 2 (第10、28、33図)

A区のほぼ中央にある土坑である。長軸約100cm、短軸約90cmの橢円形をしている。深さは地山から約25cmで、4の須恵器壺が出土している。

##### S K 3 (第11、34図 図版二)

B区西南隅に位置する。一段テラスをもった正な方形プランをしており、長辺約160cm、短辺約100cm、深さ地山から約30cmを測る。遺物は出土していないが、土層面から焼土層が確認されている。

##### S K 4 (第12、40、41図)

B区西南隅、道路状造構S D 6が終焉する北隣に位置する。やや正な長方形プランをしている。長辺約100cm、短辺約70cm、深さ地山から約20cmで、底から石鏡7が出土している。(第25図)

##### S K 5 (第13、35図 図版二)

B区中央やや北寄り、S A 1の東隣に位置する。長辺約100cm、短辺約80cmの長方形で、深さは地山から約60cmを測る。須恵器壺5が出土した。(第21図) S K 5の南隣の穴からは鉄滓が見つかっている。

##### S K 6 (第14、30図)

B区中央北端にある瓢箪形した細長い穴である。長辺約170cm、短辺約30~40cm、深さ地山から約20cmである。須恵器壺6が出土している。(第21図)

##### S K 7 (第15、30、35図)

S K 6の南隣に位置する正な方形をしている。長辺約120cm、短辺約100cmで、内部にはテラスがいくつもみられる。深さは最深部で地山から約35cmである。土師器壺の口縁46が見つかっている。(第23図)

##### S K 8 (第16、30、35図)

S K 7の東南に位置する南北に長い土坑である。長辺約90cm、短辺約40cm。内部にはピットが1基確認されている。最深部の深さ約25cm。土師器壺底部7が発見されている。(第21図)

##### S K 9 (第17、36図)

道路状造構S D 7北端が途切れるところの西隣に位置する。不定形で長辺約120cm、短辺約90cm、地山からの深さ約30cmを測る。穴内には直径10cm前後、深さ約10cmのピットが3基見られる。繩文土

器深鉢1が出土する。(第21図)

#### S K 10 (第18、31図)

B区北東端にある瓢箪形をした土坑である。最大長約280cm、最長幅約150cm、最短幅約70cm、深さ地山から約10cm前後である。上坑内には、真ん中に直径約50cm、深さ約25cm、西端に直径約30cm、深さ約15cmのピットが存在する。上師器甕口縁部45が出土する。(第23図)

#### S K 11 (第19、44、47図)

C区中央南寄りに掘られた土坑である。不定形なプランで、長辺約100cm、短辺約60cmを測る。内部にはテラスがいくつもみられる。深さは地山から最深部まで約35cmである。古代の小壺底部破片8が見つかる。(第21図)

### 第5項 溝

#### S D 1 (第3、28図)

A区西端に位置する。北西—南東ラインで、調査区外にのびるため全長は不明である。確認できる長さは約11m、幅は約70~170cmと均一しない。深さは地山から10cm程度と浅い。途中、幅約20~30cm、深さ約5cmの溝が分岐し調査区外へのびる。南東端はS D 2に切られる。遺物は須恵器小片1点のみである。

#### S D 2 (第3、26、28、29、34図 図版四)

S D 1の北隣に掘られた溝である。北西—南東ラインで、コの字形をする。B調査区道路状遺構S D 6、S D 7とほぼ同じ向きをとる。南西側のラインは全長約20m、幅約80~100cm、深さ地山から約20cmである。底の高低差は見られない。北西側ラインは調査区外にのびるため、詳細はわからない。確認できる範囲でみると、長さ2m以上、最大幅約150cm、深さ地山から約15cmである。北東側ラインは全長約13m、幅約100~140cmを測る。深さ地山から約20~35cmで、一部約40cm程深く掘りこまれているところがある。北東ラインは北壁手前で終了し、調査区外で再び出現する可能性がある。溝に囲まれた地点は本調査区で最も地山の高い所で標高約32mである。遺物は9、10の須恵器や土師器、鉄滓が検出されている。(第21図)

#### S D 3 (第3、28、29図 図版四)

S D 2の北隣に位置する。S D 2と平行になる北西—南東ラインで、途中北東方向にクランクする。掘方ラインは小さく蛇行しながら走るためS D 2と比較して縦のない形状をする。北西—南東ラインの全長約11m、幅約80~150cm、地山からの深さ約10~15cmである。向きが変わる北東側は調査区壁面際の土坑状遺構に切られてからB調査区には姿を見せず、そのまま途切れるとと思われる。推定長約3~6m、幅約100cm。深さは地山から5cm前後と極めて浅い。須恵器の小片が1点出土している。

#### S D 4 (第3、29、34図)

B区西壁面から北東方向へのびる溝で、S D 2と平行に走る。確認段階での長さ約4m、幅約40cm、

地山からの深さ約20cm。底面はレベルから北東から南西に向かって少しづつ低くなっていくことが分かった。

S D 5 (第3、35、41図 図版五)

S B 2 の西隣に存在する溝である。南北ラインよりやや西に傾き、周囲を巡る歛溝と若干軸が異なる。全長約5m、幅約25~40cm、地山からの深さ約5cmである。中央に直徑約20~50cm、深さ約20~25cmの小穴が数基確認される。溝の南端には直徑約20cm、深さ約20cmのP 2 があり、中から須恵器瓶13が見つかっている。(第21図)

S D 6 (第3項 道路状遺構 参照)

S D 7 (第3項 道路状遺構 参照)

S D 8 (第3、36図 図版五)

道路状遺構 S D 7 北端の東隣に位置する南北溝である。全長約4.5m、幅約30cm、地山からの深さ約10cm。溝内の至るところに直徑約20cm、深さ10cm前後のピットが見られる。南端には直徑約40cm、地山からの深さ約30cmのP 6 がある。穴の底から43の土師器鍋が見つかった。(第23図) P 6 とS D 8との切りあい関係は不明。

S D 9 (第3、42図)

B区東南隅に位置する。南北ラインで、全長約4m、幅約30~40cm、地山からの深さ約10cmである。溝内には直徑約20cm、深さ約15~20cmの穴がいくつも見られる。44の土師器甕が出土している。(第23図)

S D 10 (第3、39、45図 図版四)

C区東側で見られる南北溝である。全長約15m、幅約30~50cm、地山からの深さ5~10cm程度、溝内にはS D 8 やS D 9 と同様、直徑約20~40cm、深さ5~15cmのピットが複数掘られている。遺物は出土していない。これより西方は鞍部となって落ち込んでいき、遺構は希薄になっていく。

## 第6項 その他

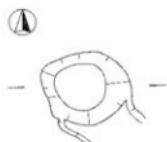
S X 1 (第20、36図)

B区S K 9 の北隣に位置する。東西の長い土坑に見えるがプランが明瞭でなく、内部はテラスやピットがいくつも鉛錆している。S D 7 に切られている。長辺約230cm、地山からの最深部約25cmを測る。須恵器蓋17が出土した。(第21図)



31.6m  
1  
1 黑灰色粘質土

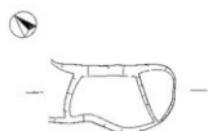
第9図 A区 SK1 実測図 (S=1/60)



32.0m



第10図 A区 SK2 実測図 (S=1/60)



32.0m  
3  
2  
4

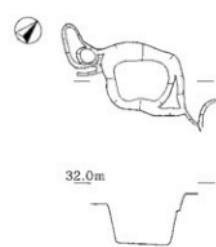
1 棕色粘質土 3 増黄褐色粘質土  
2 棕色粘質土(底泥り) 4 增褐色粘質土

第11図 B区 SK3 実測図 (S=1/60)

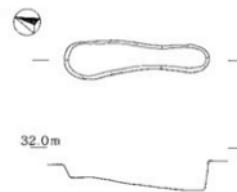


0 1 2m

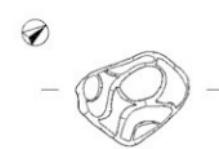
第12図 B区 SK4 実測図 (S=1/60)



第13図 B区 SK5 実測図 (S=1/60)



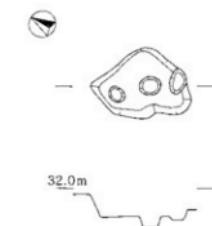
第14図 B区 SK6 実測図 (S=1/60)



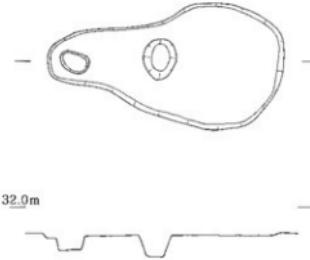
第15図 B区 SK7 実測図 (S=1/60)



第16図 B区 SK8 実測図 (S=1/60)

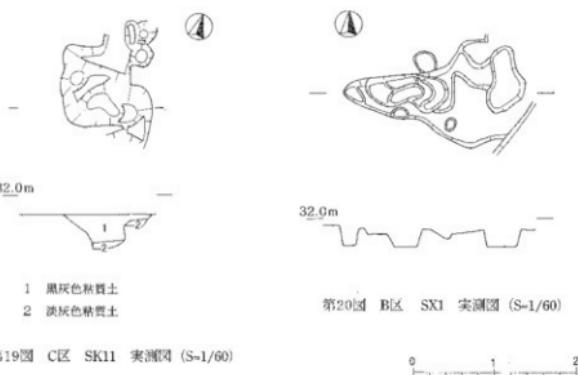


第17図 B区 SK9 実測図 (S=1/60)



第18図 B区 SK10 実測図 (S=1/60)





### 第3節 遺 物

遺物はパンケースに2箱と非常に少なく、土器・陶器の実測点数約50点実施したにすぎない。また、実測した土器も小片が多く、詳細な検討は行っていない。

#### 第1項 弥生時代以前の土器 (第21図)

1と2は繩文土器である。1は無文で、輪積みの痕跡が見られる。晩期と思われる。2は外面「」字文をもった長竹式の浅鉢である。海綿骨針が見られる。

3は弥生時代中期の壺である。内面口縁端部には綾杉状の刺突文がみられる。胎土には粗砂といっしょに赤色粒が少量含んでいる。

## 第2項 古代以降の土器・陶器

4から17は遺構から出土した古代土器である。(第21図 図版七)

4はSK2から出土した壺である。底部はヘラ切りで9世紀第3四半期にあたる。5はSK5から出土した壺の底部である。内外面とも赤みを帯びた色調をしており、9世紀前半頃と思われる。6は有台をもった壺である。SK6からのもので9世紀前半の所産である。なお、4～6は高松産である。7は9世紀後半の内面赤彩有台椀である。椀が削れた後、被熱を受けている。SK8から見つかっている。8はSK11より検出された小壺底部の破片である。外底面に回転糸切りの痕跡が残る。9と10はSD2からの出土である。9は双耳瓶の口縁部にあたり、9世紀半ば～後半にかけてのものである。小松産と思われる。10は9世紀第3四半期の盤で、高松産である。11はSD4出土の高松産の壺である。9世紀第3四半期にあたり、11縁部に重ね焼の痕跡が見られる。12はP1出土の小松産の壺で、9世紀後半にあたる。13はP2から出土した長頸瓶の口縁部である。9世紀代の南加賀所産である。14はP4から出土した9世紀半ばから後半の盤の口縁部である。15は9世紀前半の壺底部で、P5から出土した。16はP7から出土した9世紀後半の無台椀で、17はSX1から出土した8世紀末～9世紀初めにかけての蓋である。14、15、17は高松産である。

18～42は包含層から見つかった古代土器である。(第22図 図版七、八)

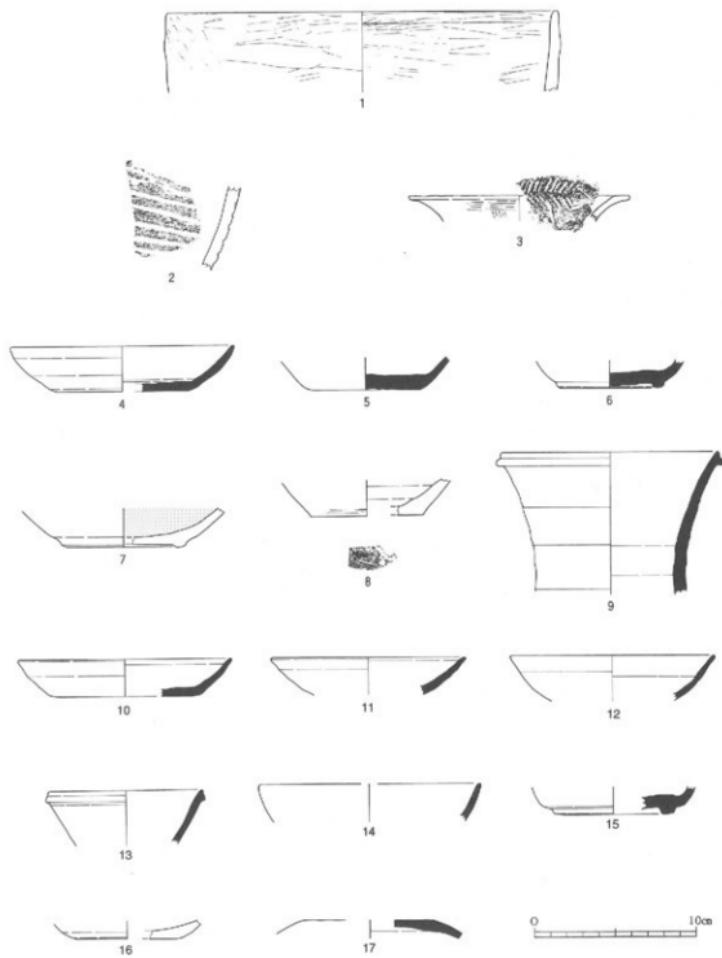
18～28は壺である。25は8世紀後半、28は8世紀末～9世紀初、18～22、26は9世紀前半、23は9世紀中頃、24は9世紀後半である。また、産地は24が小松、18・19・23・26が辰口、20～22・25が高松である。この中で25のみが橙色の色調をしている。29～31は蓋である。29は8世紀後半である。30は8世紀末～9世紀初めのもの、31は9世紀前半で高松産である。32は9世紀前半の辰口でつくられた盤である。33は橙色をした瓶または壺の底部である。34～42は土師器の椀の底部である。このうち40と41は有台で、その他は無台である。35、36、39は内黒で、37は内外面に赤彩を施す。41も内黒であるが、摩耗が著しく調整の判別は困難である。40は外面赤彩、内面黒色塗布で、これも摩耗が著しい。また、38、39、42の外底面には回転糸切りの痕跡が認められた。時期は34～41は9世紀後半で、42は10世紀後半である。

43～50は煮炊き具である。(第23図 図版八、九)

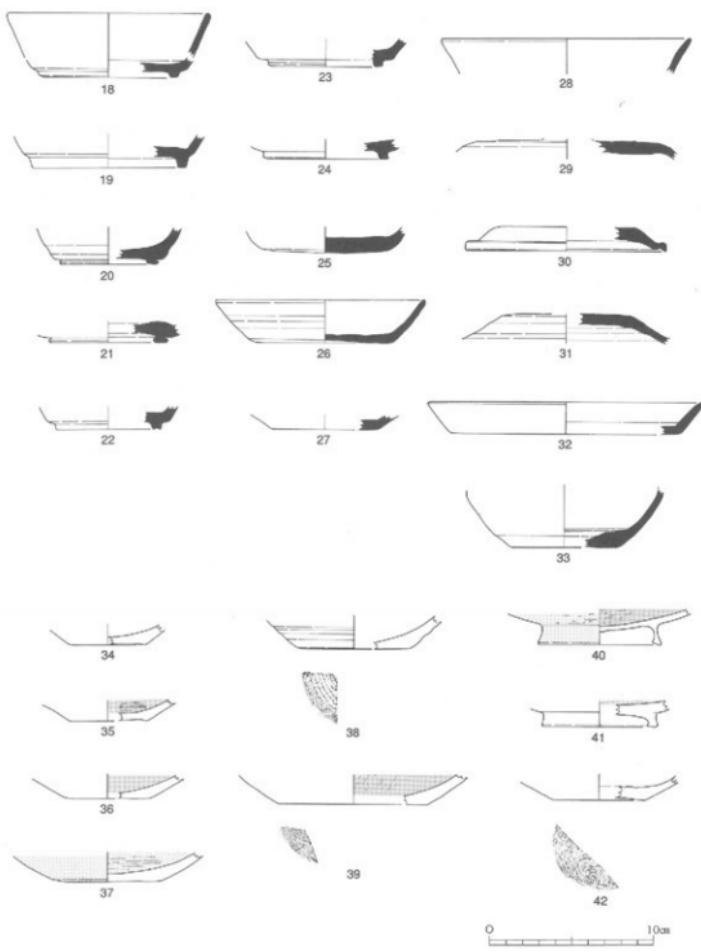
43は高松産の鍋で、口縁を内側に折り返して端部を強くナデしている。9世紀末～10世紀初のものでP6の底から出土した。(図版五)

44～46は壺の口縁部にあたる。44は丁寧なつくりをしており、口縁端部は面取りする。頸部にはミニの圧痕が認められる。SD9から出土しており、10世紀後半と思われる。45は43と同様口縁を内側へ折り返し、端部は上方へつまみあげている。SK10から見つかったもので、10世紀にあたると思われる。46はSK7から出土した。端部はやや内側に傾く。時期は判別できない。47～50にかけては小壺の底部で、48～50の外底面には回転糸切りの痕跡が見られる。

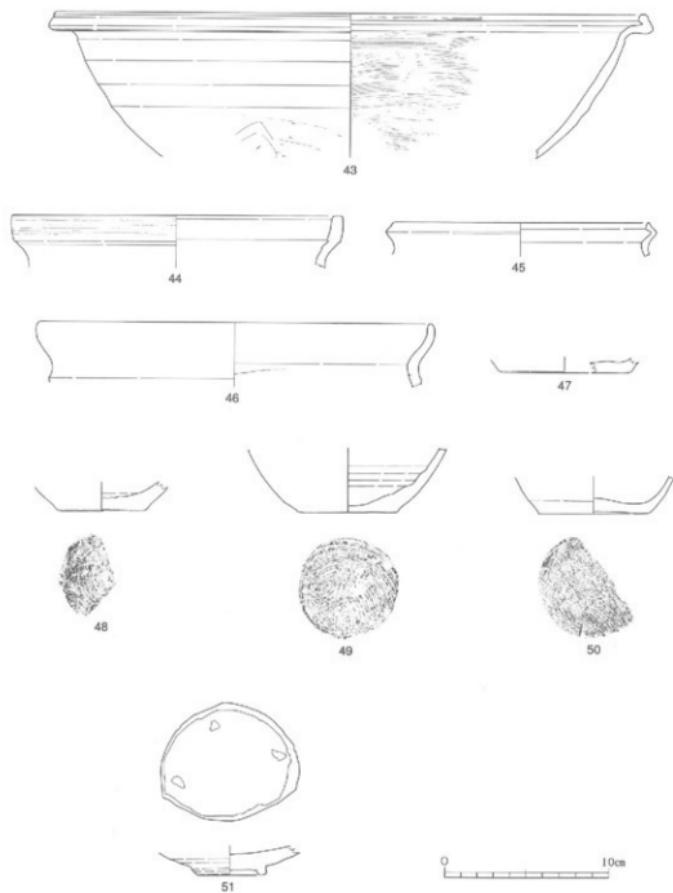
51は唐津焼の皿である。(第23図、図版九) 内面には胎土目が3箇所認められ、外面には二次的に付着したと思われるスグが確認されている。16世紀末～17世紀初のものである。



第21図 上器実測図 (S=1/3)



第22図 土器実測図 (S-1/3)



第23図 土器 陶器尖端図 (S-1/3)

土器・陶器傳統表

No.	出土點	器種	内 容	外 形	部 位	地 質	備 考
1.S.K.9	櫛文 河井	24	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	口縁 1/4
2.立脚盤			「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	小片	薄削鉢
3.立脚盤		13.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
4.S.K.2	須恵 片	13.6	8.2 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
5.S.K.3	須恵 片	6.9	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
6.S.K.6	須恵 片	6.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
7.S.K.8	土浦 小瀬	7	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
8.S.K.11	土浦 刈谷	13.2	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
9.S.D.2	須恵 盤	13	7.8 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
10.S.D.2	須恵 盤	11.8	2.3 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
11.S.D.4	須恵 片	12.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
12.P.1	須恵 片	9.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
13.P.2	須恵 片	13.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
14.P.4	須恵 片	6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
15.P.5	須恵 片	6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
16.P.7	須恵 片	6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
17.S.X.1	須恵 片	12.1	8 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
19.立脚盤		5.8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
20.立脚盤		6.9	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
21.立脚盤		6.4	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
22.立脚盤		7.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
23.立脚盤		7.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
24.立脚盤		7.7	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
25.立脚盤		12.7	2.6 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
26.立脚盤		6.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
27.立脚盤		7.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
28.立脚盤		12	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
29.立脚盤		16.6	1.9 「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
30.立脚盤		6.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
31.立脚盤		4.7	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
32.立脚盤		4.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
33.立脚盤		5.2	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
34.立脚盤		6.8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
35.立脚盤		6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
36.立脚盤		9.2	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
37.立脚盤		7.4	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
38.立脚盤		6.8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
39.立脚盤		5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
40.立脚盤		6.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
41.立脚盤		6.8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
42.立脚盤		5.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
43.P.6	土浦 河原	35.8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
44.S.D.9	土浦 河原	19.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
45.S.K.10	土浦 河原	15.6	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
46.S.K.7	土浦 河原	24	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
47.合掌	土浦 河原	8	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
48.合掌	土浦 河原	5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
49.合掌	土浦 河原	6.5	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢
50.合掌	土浦 河原	4.3	「ふ」字 圓底 盆	「ふ」字 圓底 盆	ミガキ 土	口縁 1/4	薄削鉢

口径、底径、高さはcm

### 第3項 石器 鉄器 (第24、25図 図版九、十)

1～5は打製石斧である。1は一般的に楔形と呼ばれるC<sub>1</sub>タイプのものである。刀部は円刀型をし、基部は折れていてよくわからない。2はB<sub>2</sub>型の完形品である。刀部は扁刀で直刀型をしている。基部は円基となる。1と2はB区P6の南側の遺物包含層からまとめて出土した。(図版六)周囲にはピットや溝跡が複雑に入り混って掘られているが、両者ともこれらの遺構には伴わないと思われる。3はC区遺物包含層にあたる黒灰色粘質土中の壁面から出土した。半分に折れており、基部は失っている。また、刀部右の側縁も大きく欠損している。タイプは短彫形で、刀部は円刀型である。4はA区中央のピット際、地山直上から出土した。(図版六)基部は消失し、刀縁も一部欠損する。刀部は直刀型となる。5はC区の遺物包含層から見つかった。破損のため基部しか見つかっていない。タイプは円型である。

6は石皿の破片である。B区P3の底から、10数個の自然石とともに検出した。(図版六) P3はSA2のラインに乗ってくる穴であるが、他のピットよりも規模が大きいため、この古代の柵列に伴うかは判断しかねる。

7は石鎌である。B区SK4の底から出土した。

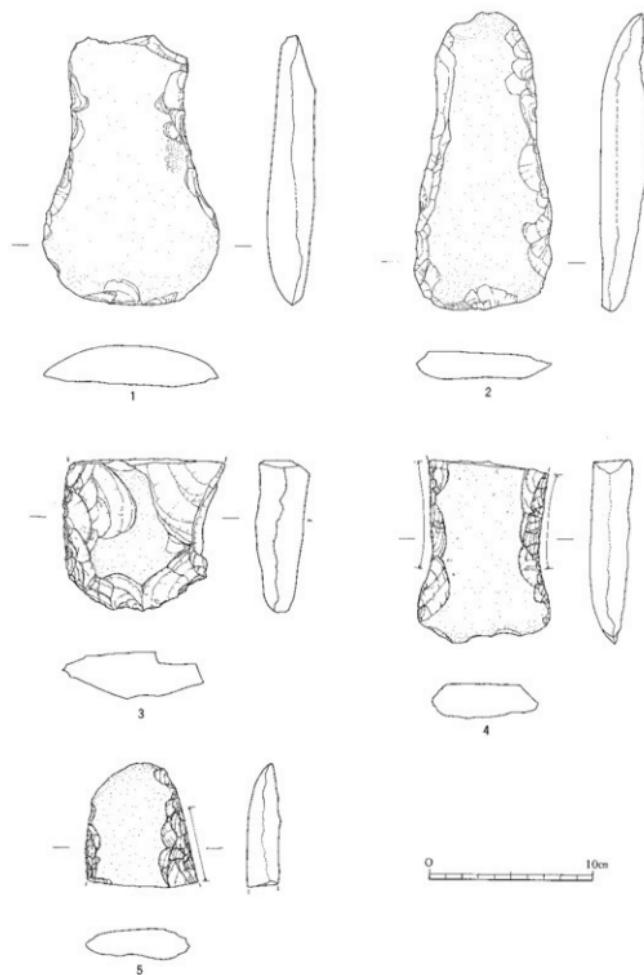
8は鉄製品である。B区P8から見つかった。丸い棒状のものであるが、錆による劣化が著しいため詳細はわからない。また、図示はしていないが、B区中央部一帯の土坑、ピットや遺物包含層から鉄滓やフイゴ羽口などが30点近く確認されている。(図版十) フイゴ羽口は道路状遺構の側溝S D6やS B3柱穴などから出土している。羽口は4点確認されており、すべて小片である。直径は約10cm測るものが多い。包含層からは鉄滓や椀形滓、刀製状製品の破片が見つかっている。

打製石斧のタイプは 石川考古学研究会 1990「特論 石器総考」[石川考古資料調査・集成事業報告書 農工具]による。

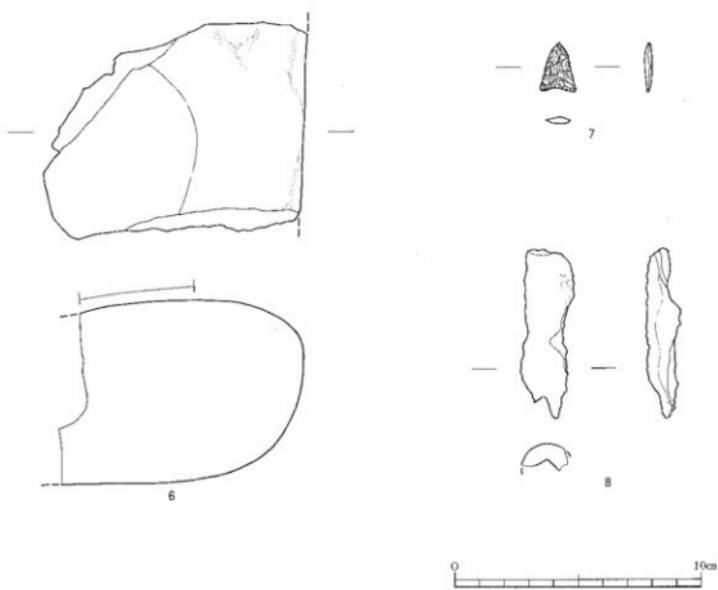
石器・鉄器観察表

No	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石質及び備考
1	B区包含層	打製石斧	16.7	10.7	2.9	543.7	凝灰岩質安山岩
2	B区包含層	打製石斧	18.4	8.2	3	537	火山疊凝灰岩
3	C区壁面	打製石斧	9.1	9.2	2.9		凝灰岩質安山岩
4	A区地山直上	打製石斧	11.1	8	2.2	304.6	ヒン岩
5	C区包含層	打製石斧	7.6	6.7	1.9		デーサイト質安山岩
6	B区 P3	石皿	8.9	10.7	7.4	1034.3	デーサイト質火山疊凝灰岩
7	B区 SK4	石鎌	2	1.4	0.3	0.7	安山岩もしくは玄武岩
8	B区 P8	不明鉄製品	6.8			11.1	錆の付着著しい

長さ、幅、厚さの単位はcm



第24図 石器実測図 (S-1/3)



第25図 石器、鉄器尖端等 (S=1/2)

## 第4節　まとめ

### 縄文時代（晩期）

縄文時代とはっきり認められた遺構は極めて少ない。出土土器はSK9からの深鉢1点と遺物包含層から少量にとどまった。ただし、石製品に関してはSK4から石鎌、P3から石皿、各調査区の遺物包含層からは打製石斧が5点とまとまって出土している。特にB区で確認された打製石斧1と2は刀部に使用痕が認められるものの完形品にちかいもので隣接して出土した。

本遺跡から東約1kmに栗田遺跡<sup>13</sup>が所在する。栗田遺跡は手取川から流出してきた川原石が堆積した礫原が露呈したところで、打製石斧の素材採集跡が確認された。本遺跡から発見された石はやや軟質な火山巖凝灰岩などで、栗田遺跡で確認された石器の素材とほとんど一致する。よって、本遺跡で確認された石器は、手取川によって形成された扇状地地内から産出された石と思われる。

打製石斧の用途は根茎類や球根類を採集する土掘り道具として認知されている<sup>14</sup>。手取川扇状地一帯ではクズ、ヤマユリ、ワラビなどが採集されていたようである。

前述したとおり本遺跡における縄文時代の遺構は土坑2基、ピット1基と極めて少ない。遺物においても土坑内から深鉢が1点、遺物包含層から上器が数点見つかっているだけである。このような状況は手取川扇状地の扇尖部に立地する遺跡によく見かける。第4章で報告した栗田遺跡藤平地区からは柴山出村式の甕が出土した土坑が1基見つかった。周囲には当該時期の遺構は確認されず、遺物も土器や打製石斧が少量確認したにすぎない。また、本遺跡から北東約3km離れた扇が丘ハワイゴク遺跡<sup>15</sup>は自然河道を有する縄文時代晩期の遺跡である。河道周辺から打製石斧や縄文土器がまとまって出土したSX4が存在する。これらの遺構は拠点的集落に居住する人たちが根茎類や球根類を採集する目的で遠征し、ベースキャンプとしてつくられた出作り小屋のようなものと想定されている。本遺跡で確認された土坑等もこの性格をもった遺構と理解したい。

欠損した打製石斧については使用中に折れたため廃棄するという使い捨てによるものと思われる。また、近接した状態で発見された完形品にちかい打製石斧の1と2については、栗田遺跡でも確認され、土中にはえる根茎類や球根類を採集する行為の代償として、打製石斧をその地に置いて土に返すという縄文人の畏敬の念による行為と考えられる<sup>16</sup>。

### 古代

古代の主要な遺構はSB1・SB2・SB3の掘立柱建物、SA1・SA2の柵列、SD2の区画溝、SD6・SD7を側溝とする道路状遺構、焼土が堆積したSK3、これらの遺構をとりまく畝溝などである。時期は8世紀後半～10世紀末で、特に9世紀後半が主体となる。9世紀後半の土器が出土した遺構は区画溝SD2、道路状遺構の側溝SD6、及びSD4、SK2などである。道路状遺構の延長上に伸びていくSA2やSD2・4とSD6の間を直交する畝溝も同時期と考えられる。また、SB2・SB3はSD6と重複することから、建物と道路状遺構は時期幅があったと想定される。しかし、SB2・SB3については道路状遺構以外の遺構の重なりが見られず、SD2やSD4の溝ラインの軸にほぼ合うことから、これらの溝遺構が機能している段階で建物と道路の付け替えがおこなわれたと思われる。なお、両遺構の前後関係は判然としない。

SB3のような直径30cm前後の小さな掘方をもった柱穴をもち、柱間2m程度の総柱プランとなる

タイプは近隣で金沢市扇台遺跡<sup>5</sup>、松任市橋爪ガンノアナ遺跡<sup>6</sup>、福正寺ゴコメマチ遺跡<sup>7</sup>で見られる。これらの遺跡は9世紀後半から10世紀にかけて存続しており、本遺跡のSB3もこの時期に機能していたと考えたい。また、SB3の北方にあるSA1はSB3の東桁行ラインの延長線上となり、密接な関係をもつと思われる。

区画溝SD2の内部にあるA区北東部は本調査区で最も地山の高いところで、当地がもっとも居住に適していたと考えられる。しかし、当地は現耕土直下で地山が検出されるほど浅いため、ほとんどの遺構は削平されたと思われる。

SD2と道路状遺構の間は畠溝が掘られている。この畠溝はSD2やSD6を直交するように形成されており、SD2を囲む空間地と道路状遺構の間に畠地を設けていたことを示す。また、道路状遺構の側溝SD7の東からC区南西部にかけても畠溝が見られ、この地も畠地として使用されたと想定される。本遺跡の西方300m離れたところに9世紀後葉の集落跡である福正寺ゴコメマチ遺跡が所在する。この遺跡の遺構は3間×2間の掘立柱建物に竪穴の小屋（報告では土坑と呼称）が付随する。その周りには畠が巡り、一般農民の家地と認識している。今回調査した場所も区画溝、掘立柱建物、畠溝が重複せずそれぞれが機能していることから、福正寺ゴコメマチ遺跡と同様一般的な農民階層の居住域と考えたい。また、B区を中心に鉄滓や楕円滓、フイゴ羽口が点在して見つかった。SK3からは遺物は出土していないが、焼土の堆積があることから、鍛冶関係の遺構ではないかと考えられる。

尚、C区一帯にはピット群が錯綜している。ピットは不定形なものがほとんどで深さは均一しない。遺物も出土しないため性格はわからない。

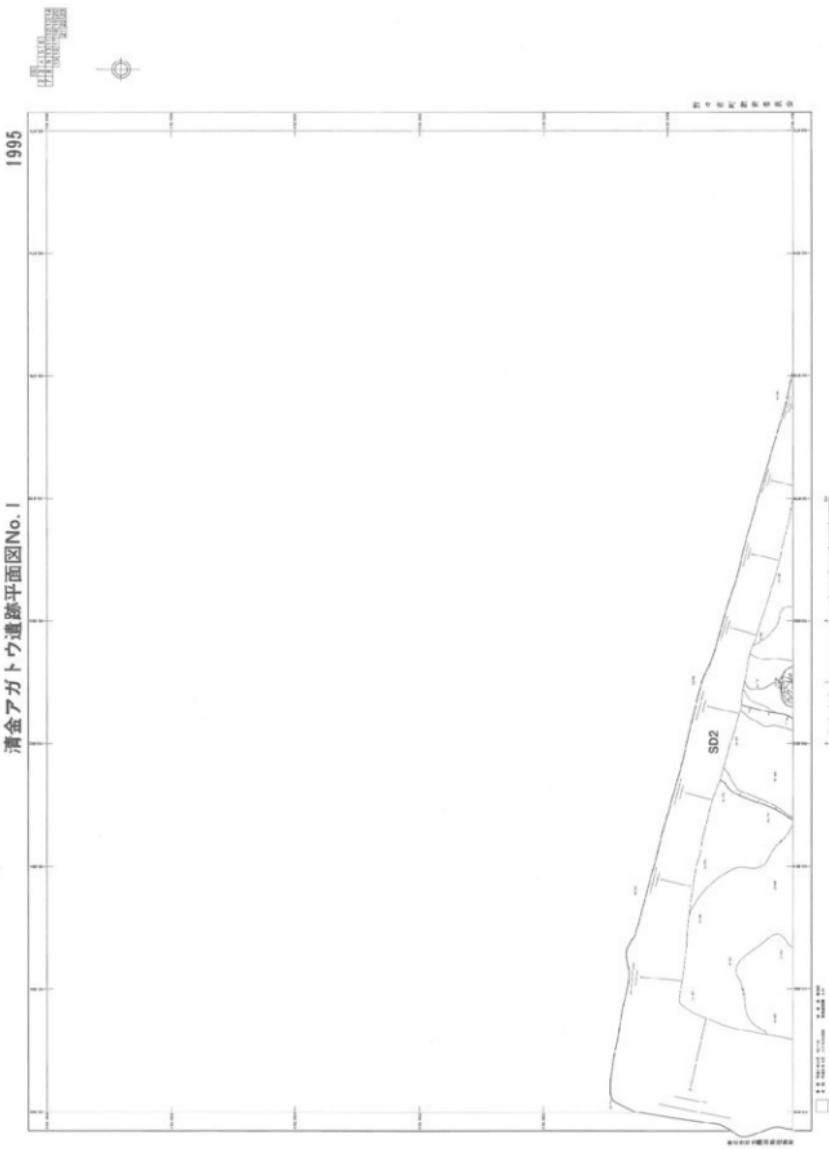
B区西側の畠溝はN48°Wを測り、9世紀代の遺物が確認されている。C区の畠溝はN5°Wと真北に近い軸をとり、溝内や周辺ピットから10世紀の上器が確認されている。本遺跡から西へ約1.2kmに向かったところに10~11世紀を主体とする橋爪ガンノアナ遺跡が存在する。この遺跡は掘立柱建物や溝跡をもった集落跡で、建物や溝の軸線は真北から東に5度、西に7度の範囲に收まる。この南北溝は条里の基軸として設定されたと考えられており、本遺跡C区南西部の畠溝群は条里に則したプランとも考えられる。しかし、時期決定に至る遺物は少なく、条里地割となりうる遺構も確認していないので、資料としてのデータは不十分である。仮説として捉えたい。

注 (1) 石川文協会	1991 b	(4) 山本	1993	(7) 松任市教委	1998
(2) 山本	1993	(5) 県立埋文センター	1998		
(3) 県立埋文センター	1995	(6) 松任市教委	1993		

## 参考文献

- (社)石川県埋蔵文化財保存協会  
(社)石川県埋蔵文化財保存協会  
(社)石川県埋蔵文化財保存協会  
石川県立埋蔵文化財センター  
石川県立埋蔵文化財センター  
石川県立埋蔵文化財センター  
松任市教育委員会  
松任市教育委員会  
山本直人  
山本直人
- 1990 「社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報1 平成元年度」  
1991 a 「社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報2 平成2年度」  
1991 b 「栗田遺跡発掘調査報告書」  
1990 「石川県立埋蔵文化財センター年報第10号」  
1995 「崩が丘ハワイゴク遺跡」  
1998 「扇台・大顎キョウデン遺跡」  
1993 「松任市橋爪ガンノアナ遺跡」  
1998 「松任市福正寺ゴコメマチ遺跡」  
1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会誌第28号』  
石川考古学研究会  
1993 「縄文時代後・晚期の打製石斧による生産活動一手取川扇状地を中心として」『考古論集一瀬見 浩先生退官記念論文集』  
瀬見 浩先生退官記念事業会

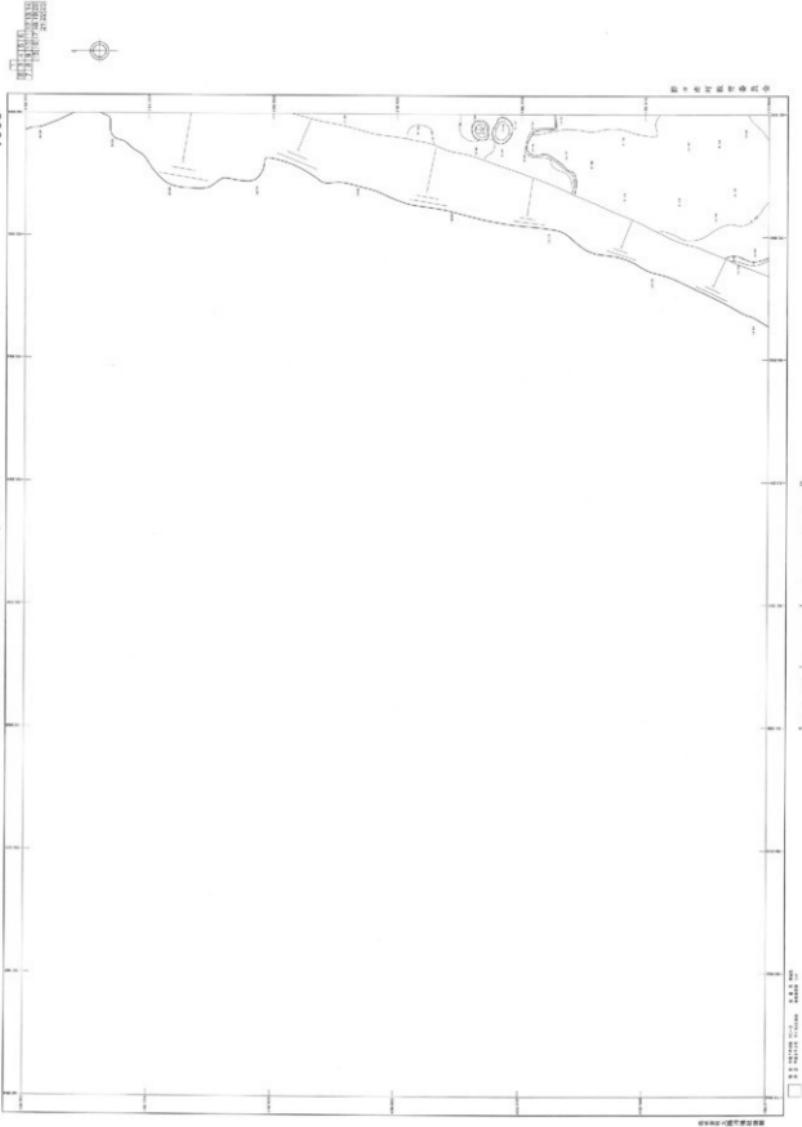
清金アガトウ遺跡平面図No.1



第26図 調査区分割 (1/80)

清金アガトウ遺跡平面図No.2

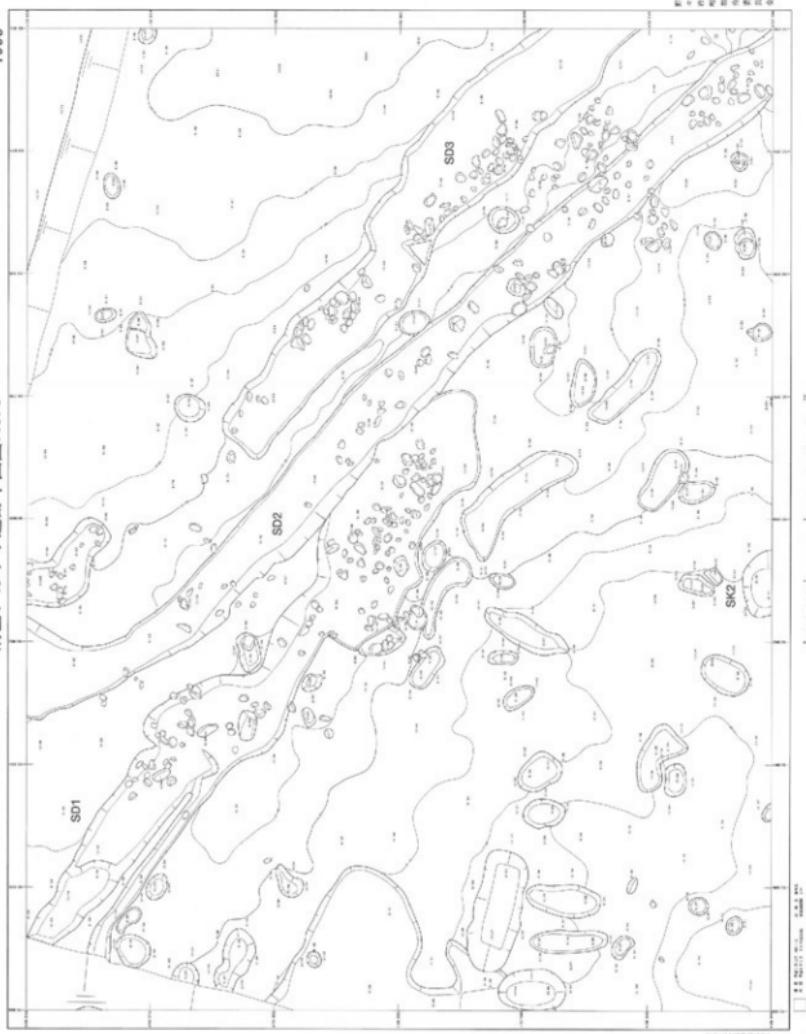
1995



第27図 調査区分図 (1/80)

1995

清金アガトウ遺跡平面図No.3



第28図 調査区分割 (1/80)

1995  
1/25000  
1/25000

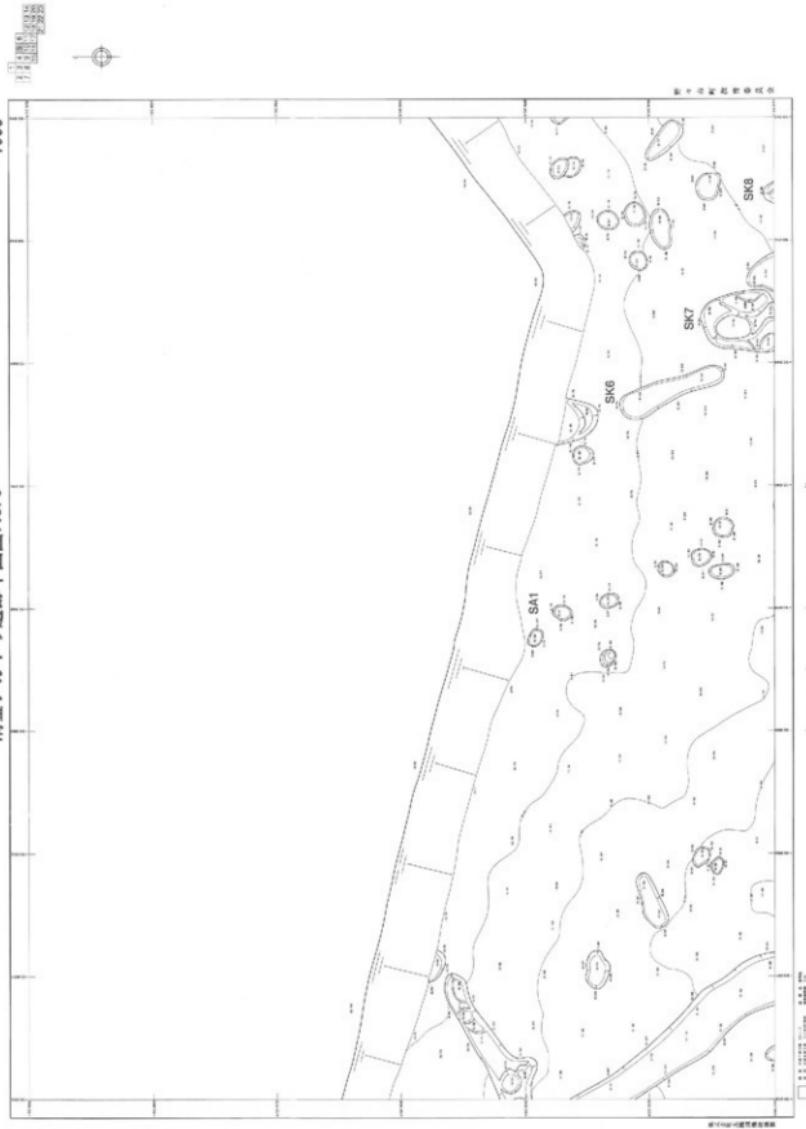
清金アガトウ遺跡平面図No.4



第29図 測査区分割 (1/80)

清金アガトウ遺跡平面図No.5

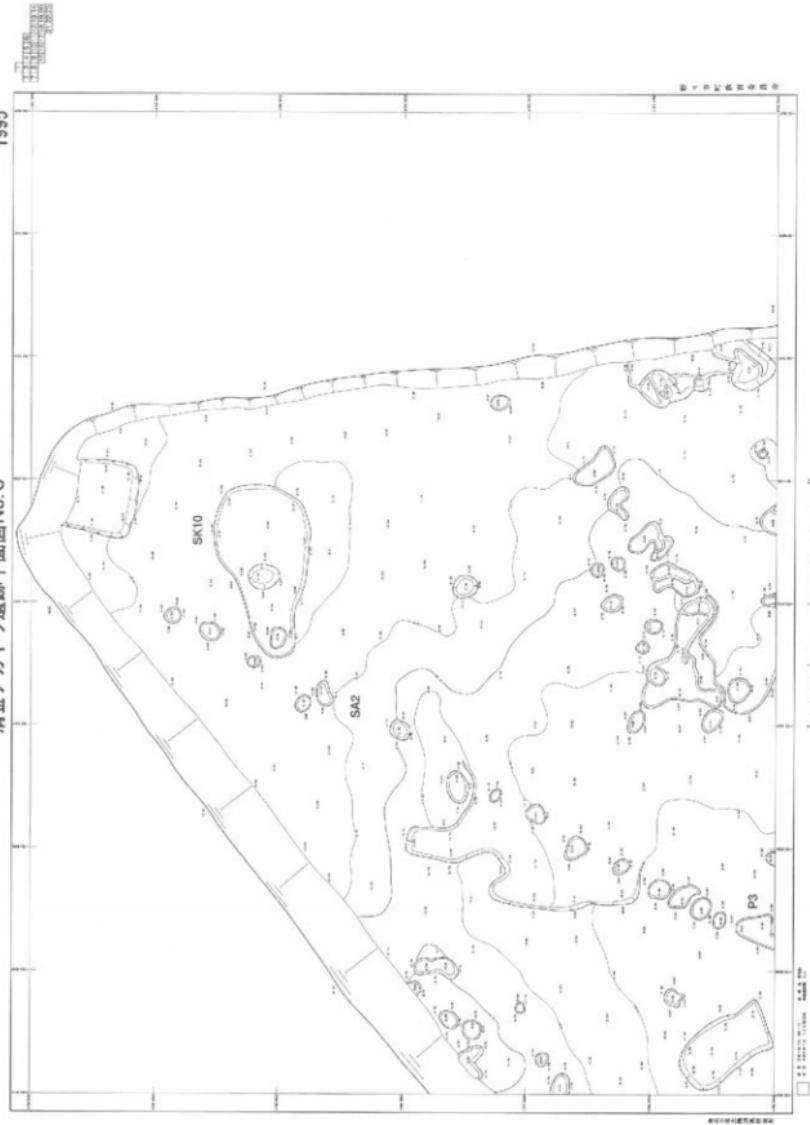
1995



第30図 調査区分割 (1/80)

1995

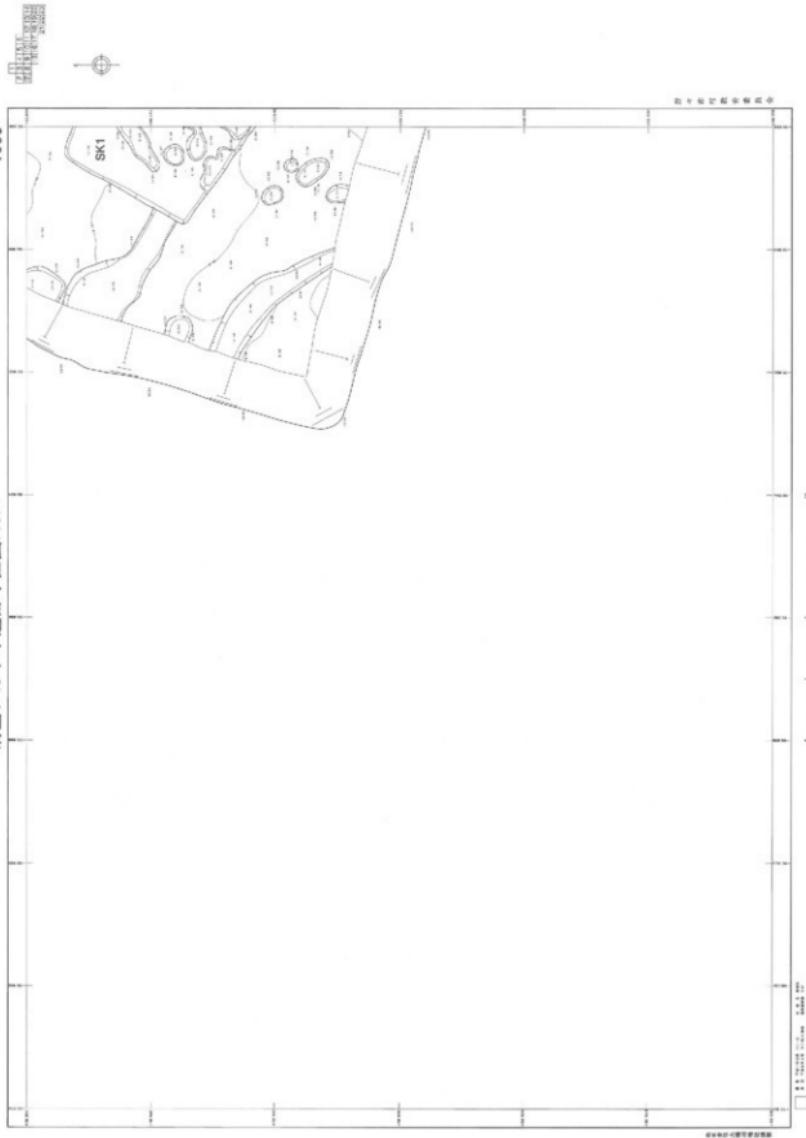
清金アガトウ遺跡平面図No.6



第31図 調査区分割 (1/80)

清金アガトウ遺跡平面図No.7

1995



第32図 調査区分割 (1/80)

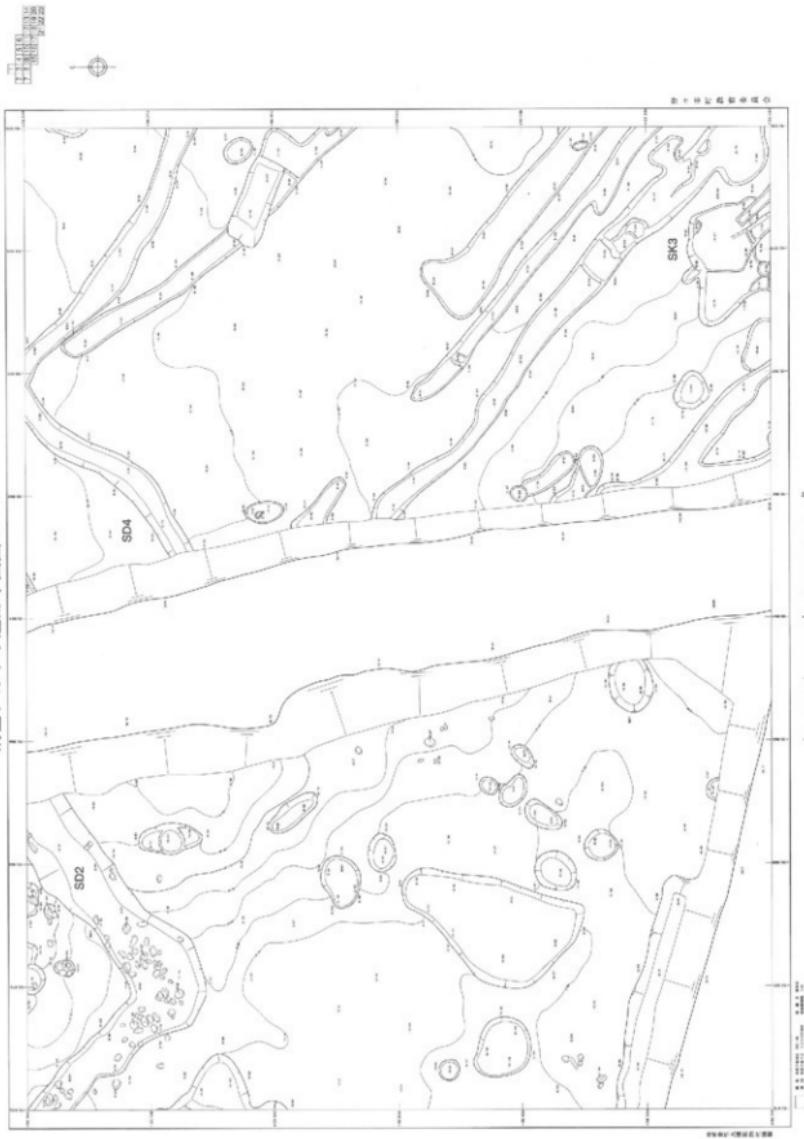
清金アガトウ遺跡平面図 No. 8



第33図 濃査区分割 (1/80)

1995

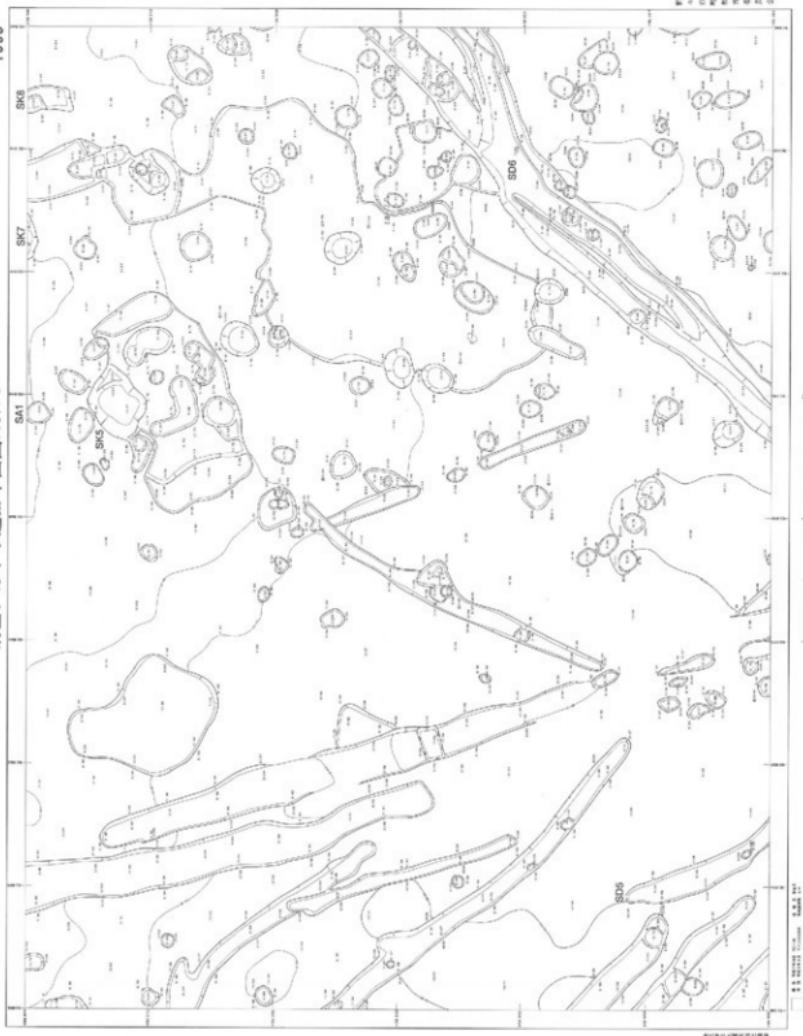
清金アガトウ遺跡平面図No.9



第34図 調査区分割 (1/80)

1995

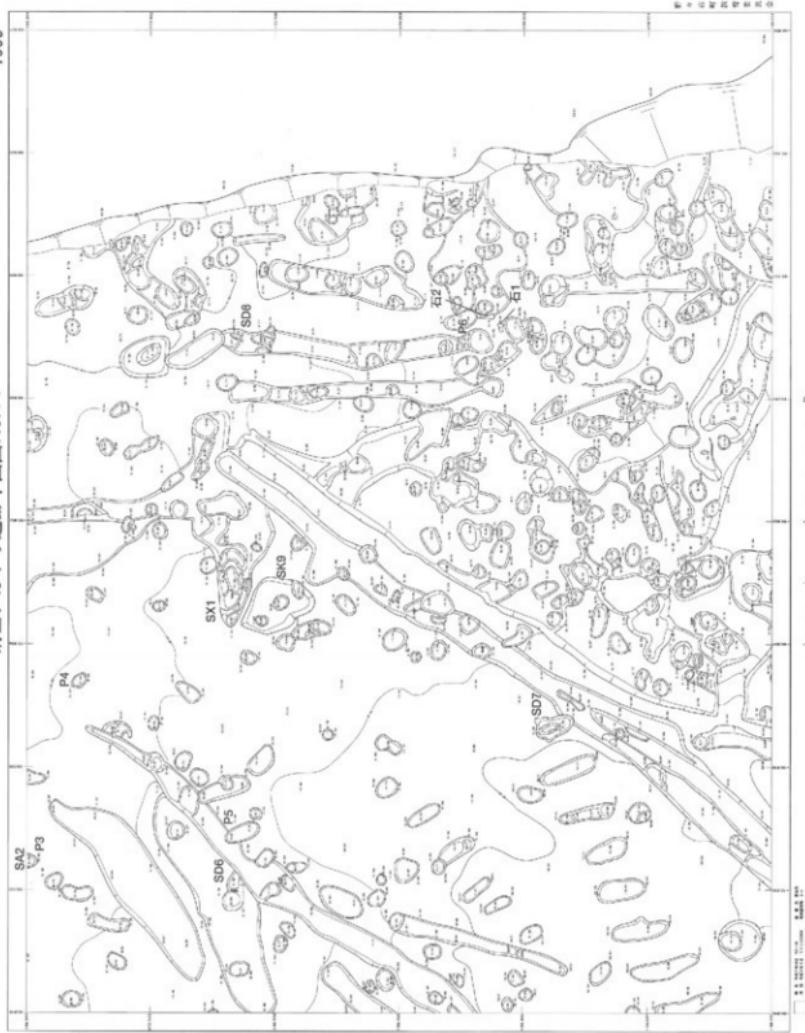
清金アガトウ遺跡平面図No.10



第35図 調査区分割 (1/80)

1995

清金アガトウ遺跡平面図No. 1



第36図 調査区分割 (1/80)

1996

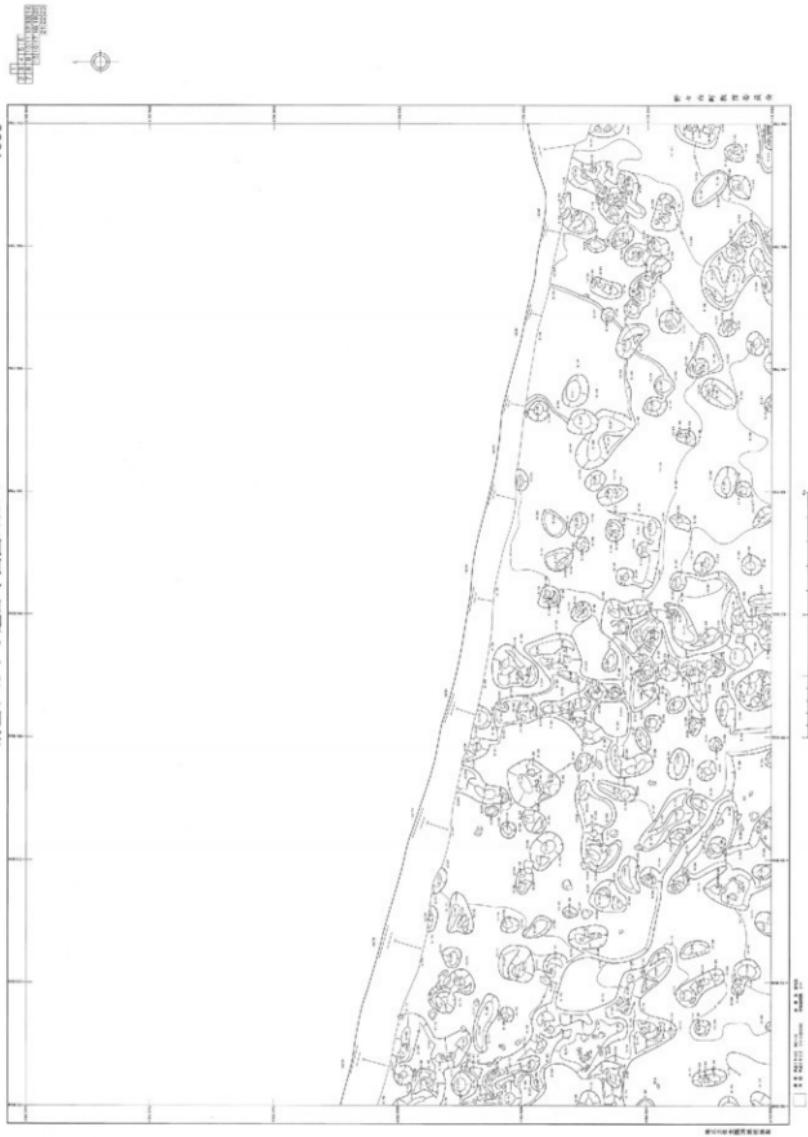
清金アガトウ遺跡平面図No.12



第37図 椰査区分割 (1/80)

1995

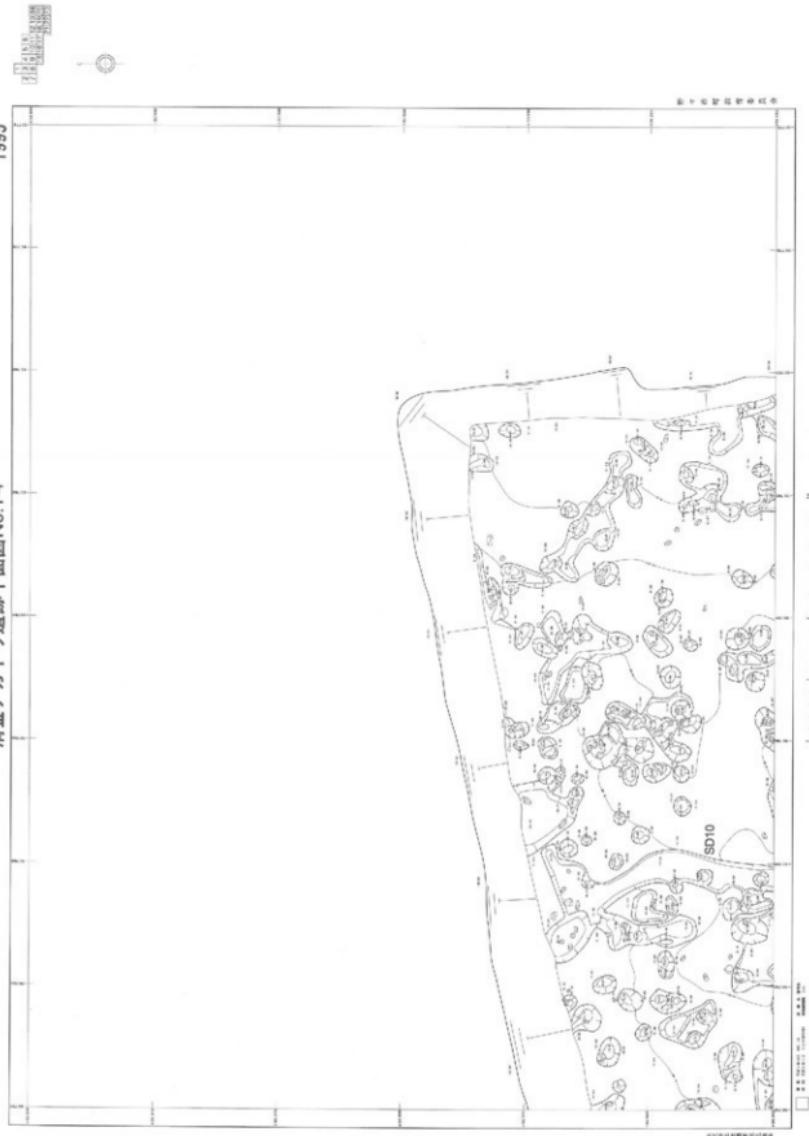
清金アガトウ遺跡平面図No.13



第38図 調査区分図 (1/80)

1995

清金アガトウ遺跡平面図No.14



第39図 調査区分割 (1/80)

1995

清金アガトウ遺跡平面図No.15



第40図 椰査区分割 (1/80)

1995

清金アガトウ遺跡平面図 No. 16



第41図 調査区分割 (1/80)

清金アガトウ遺跡平面図 No. 17

1995



第42図 調査区分割 (1/80)

1995

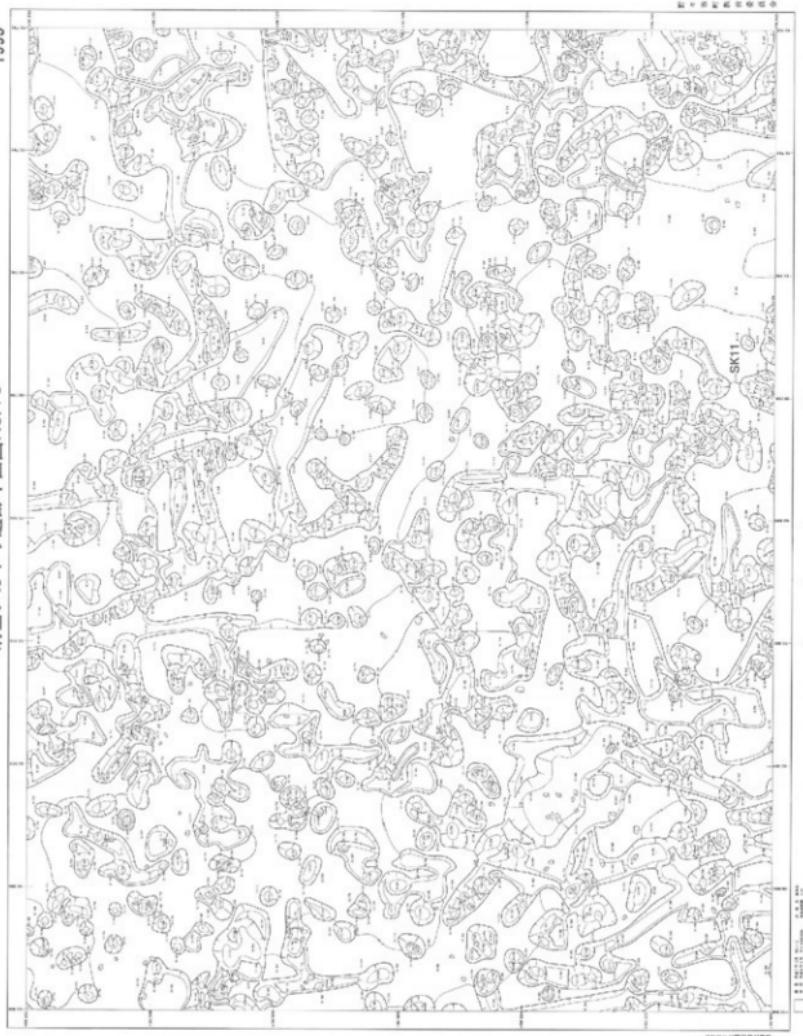
清金アガトウ遺跡平面図No.18



第43図 調査区分割 (1/80)

1995

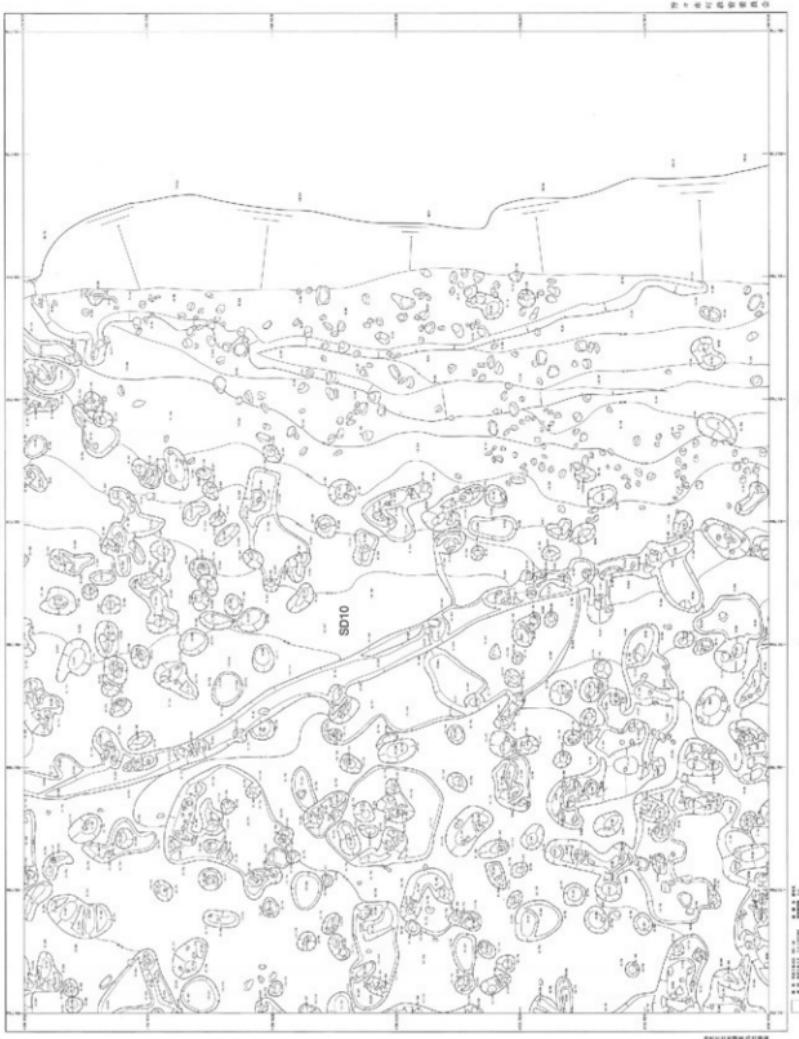
清金アガトウ遺跡平面図 No. 19



第44図 調査区分割 (1/80)

1995

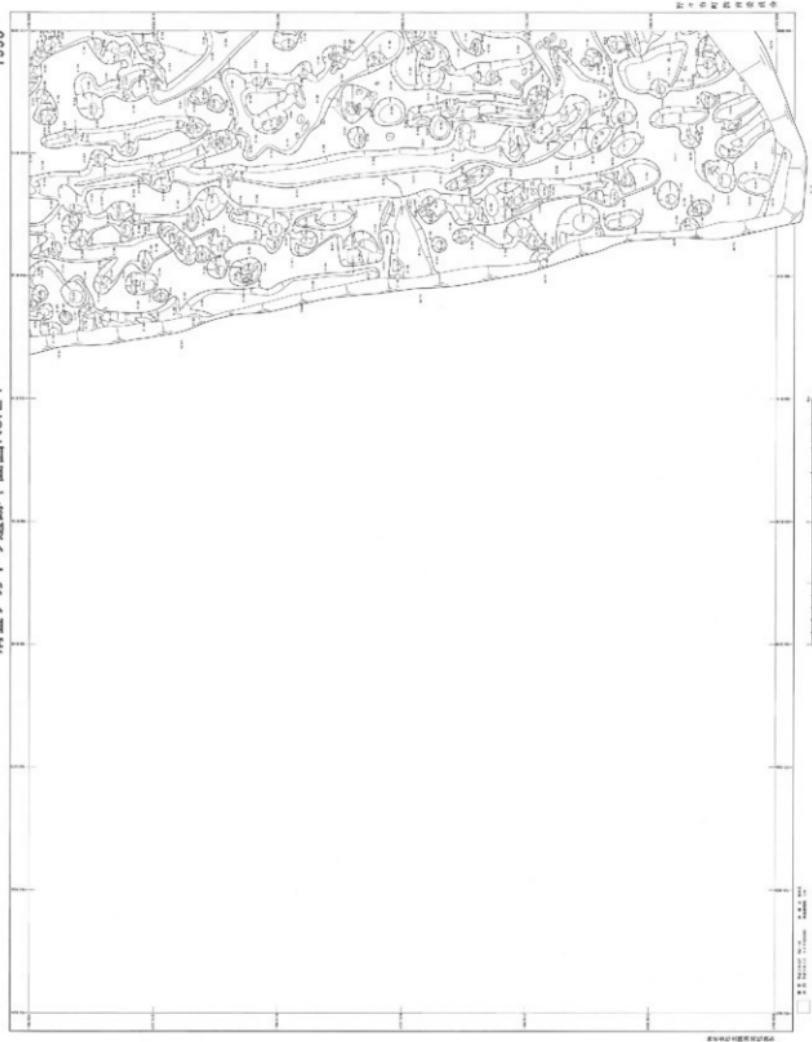
清金アガトウ遺跡平面図No.20



第45図 調査区分割 (1/80)

清金アガトウ遺跡平面図No.21

1995



第46図 調査区分割 (1/80)



第47図 調査区分割 (1/80)

薄金アガトウ遺跡平面図 No. 23

1995



第48図 測査区分割 (1/80)





A区 全景



B区 全景



C区 全景



B区 SB1



B区 SB2



B区 SB2 SB3 全景



A区 SK1



B区 SK3



B区 SK5



A区 SD2、SD3



B区 SD6、SD7 (道路状遺構)



C区 SD10



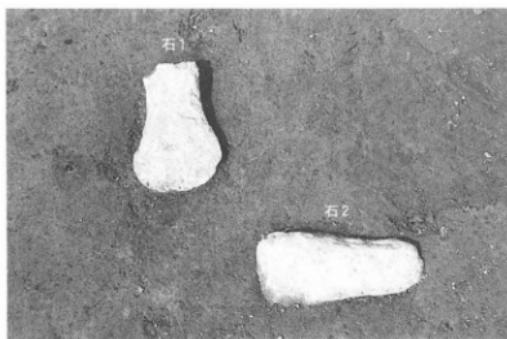
B区 故溝



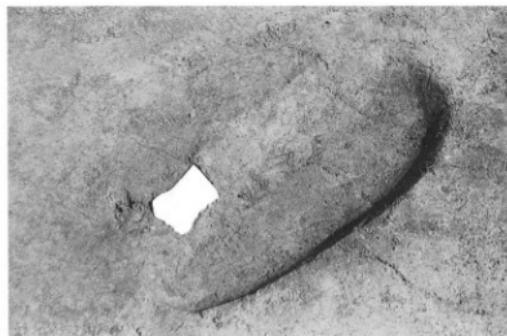
C区 故溝とピット群



B区 P6 土師器 43 出土状況



B区 打製石斧 1.2 出土状况



A区 打製石斧 4 出土状况



B区 P3 石皿 6 出土状况



1



8



16



2



9



17



3



18



4



10



19



5



12



20



6



13



21



7



14



15



23

圖版  
八





47



48



1



49



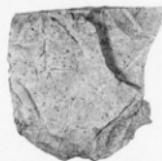
50



2



51



3



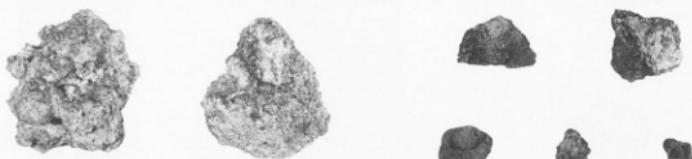
6



7



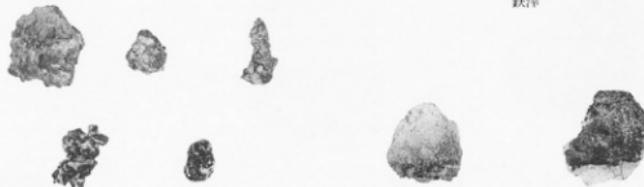
8



桶形津



鉄津



フィゴ羽口

鉄津

# 報告書抄録

ふりがな	あわたいせきふじひらちく さよかねあがとう いせき							
書名	栗田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡							
副書名	県道額谷三浦線道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	田村昌宏 徳野裕子							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町木町5丁目4-1 ☎076-246-2344							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	度	分	m <sup>2</sup>		
あわたいせきふじひらちく 栗田遺跡藤平地区	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 のいちまらふじひら 野々市町藤平	17344	16008	36度 30分	136度 36分 00秒	1993.11.3 1994.2.10 1996.5.20 1996.10.16	1,430 2,140	県道額谷三浦 線道路工事に 伴う緊急発掘 調査
きよかねあがとういせき 清金アガトウ遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 のいちまらきよかね 野々市町清金	17344	16022	36度 30分	136度 36分 27秒	1995.7.7 1995.11.7	2,600	県道額谷三浦 線道路工事に 伴う緊急発掘 調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
栗田遺跡藤平地区	縄文			縄文土器 石器	縄文、奈良・平安時代、 近世の複合遺跡			
	集落跡	奈良・平安	竪穴建物10棟 掘立柱建物2棟	土師器 須恵器				
		近世	溝	陶磁器				
清金アガトウ遺跡	縄文	上坑	縄文土器、打製石斧	縄文、奈良・平安時代の 複合遺跡				
	集落跡	奈良・平安	掘立柱建物3棟 道路状遺構	土師器 須恵器				

## 粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡

県道額谷三浦線道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 2000年3月

編集発行 野々市町教育委員会

〒921-8815 石川県石川郡野々市町5丁目4-1

☎076-246-2344

印 刷 有限会社 アサヒヤ印刷

